

Threatened Wildlife of Akita Prefecture

秋田県の絶滅の おそれのある 野生生物



秋田県版レッドデータブック2016 動物I
[鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類]



Red Data Book of
Akita Prefecture 2016
Animals I



秋田県

◎表紙写真

クマゲラ 撮影 小笠原 嵩	チュウヒ 撮影 西出 隆	オオワシ 撮影 西出 隆
トミヨ属雄物型 撮影 杉山秀樹		ゼニタナゴ 撮影 杉山秀樹
タカチホヘビ 撮影 田中政行	ニホンアカガエル 撮影 梅津一史	ミチノクマイマイ 撮影 川口洋治

Threatened Wildlife of Akita Prefecture

秋田県の絶滅の おそれのある 野生生物



秋田県版レッドデータブック 2016 動物I
[鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類]



Red Data Book of
Akita Prefecture 2016
Animals I



改訂版の発刊にあたって



秋田県は、海岸から山岳に至るまで変化に富んだ地形・地質を有しており、湿潤な気候の下で、豊かな自然が育まれてきました。

また、県内の里地里山には、人が手を加え続けることにより形成され、維持されてきた水田や雑木林などの二次的自然も広く見ることができます。本県には、このような恵まれた自然環境の中で、多種多様な野生生物が生息・生育しています。

こうした豊かな自然が残されている本県にあっても、産業構造の変化や様々な開発行為による土地の改変、過疎化・少子高齢化による手入れ不足などにより、野生生物の生息・生育環境は大きな影響を受けており、多くの種において生存が危ぶまれています。

地球上には、それぞれの環境に適応して進化した多種多様な生物が、他の多くの生物と互いに関わり合いながら生きています。私たちは、暮らしに不可欠な水や食料はもとより、地域の経済活動や固有の文化など、日々の生活が生物多様性からの恵みによって支えられていることを改めて認識するとともに、その恵沢を将来にわたり享受することができるよう、生物多様性の保全に取り組んでいかなければなりません。

このため、県では、平成23年6月に策定した「第2次秋田県環境基本計画」において、「生物多様性の確保」を重点プロジェクトとして位置付け、平成26年3月には県内に生育する維管束植物の危険性を再評価した「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2014－維管束植物」を発刊するなど、「生物多様性の確保」に向けた取組を進めてまいりました。

この度、新たに、県内に生息する鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類及び陸産貝類について、絶滅の危険度の再評価を行ったことから、「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2016－動物I」を取りまとめました。

本書が、野生生物への理解を一層深めるための一助となり、また、その保護対策に幅広く活用していただければ幸いです。

結びに、本書の発刊に当たり御協力いただきました秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会の委員を始めとする関係者の皆様と、長年にわたり野生生物の調査・研究に取り組んでこられた皆様に、心からお礼申し上げます。

平成28年3月

秋田県知事 佐竹敬久



ハクガン 絶滅危惧IA類

撮影 佐藤磯男 P25



イヌワシ 絶滅危惧IA類

撮影 千葉和彦 P26



オオヨシゴイ 絶滅危惧IA類

撮影 遠藤英之 P25



クマゲラ 絶滅危惧IA類

撮影 小笠原 高 P26



クロサギ 絶滅危惧IA類

撮影 佐々木均 P25



チゴモズ 絶滅危惧IA類

撮影 佐々木均 P27



コアシサシ 絶滅危惧IA類

撮影 西出 隆 P26



アカモズ 絶滅危惧IA類

撮影 西出 隆 P27



オオセッカ 絶滅危惧IA類

撮影 西出 隆 P27



チュウヒ 絶滅危惧IB類

撮影 西出 隆 P29



セッカ 絶滅危惧IA類

撮影 西出 隆 P28



クマタカ 絶滅危惧IB類

撮影 西出 隆 P29



シジュウカラガン 絶滅危惧IB類

撮影 西出 隆 P28



オカヨシガモ 絶滅危惧II類

撮影 西出 隆 P29



コクガン 絶滅危惧IB類

撮影 佐藤磯男 P28



ヨシガモ 絶滅危惧II類

撮影 佐々木均 P30



トモエガモ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 西出 隆 P30



ツルシギ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐藤公生 P31



ビロードキンクロ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐々木均 P30



オジロワシ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 西出 隆 P32



ヒクイナ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 鈴木三郎 P31



オオワシ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 西出 隆 P32



オオジシギ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐藤公生 P31



ツミ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐々木均 P32



ハイタカ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐々木均 P33



サンショウクイ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 西出 隆 P34



アリスイ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐藤公生 P33



コシアカツバメ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐々木均 P34



チゴハヤブサ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐藤公生 P33



イスカ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 西出 隆 P35



ハヤブサ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 佐藤公生 P34



ヒシクイ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P35



マガン 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P35



ウミウ 準絶滅危惧

撮影 佐藤磯男 P37



クロガモ 準絶滅危惧

撮影 佐藤公生 P36



ヨシゴイ 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P37



カイツブリ 準絶滅危惧

撮影 佐藤公生 P36



ササゴイ 準絶滅危惧

撮影 佐藤公生 P37



アオバト 準絶滅危惧

撮影 佐藤公生 P36



ヨタカ 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P38



ケリ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P38



ヤマシギ 準絶滅危惧

撮影 後藤恭子 P39



イカルチドリ 準絶滅危惧

撮影 佐藤公生 P38



タシギ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P40



コチドリ 準絶滅危惧

撮影 佐藤公生 P39



ホウロクシギ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P40



シロチドリ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P39



アオアシシギ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P40



キョウジョシギ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P41



サシバ 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P42



ミサゴ 準絶滅危惧

撮影 佐藤磯男 P41



オオコノハズク 準絶滅危惧

撮影 竹内昭史 P42



ハチクマ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P41



コノハズク 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P43



オオタカ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P42



アオバズク 準絶滅危惧

撮影 後藤恭子 P43



トラスク 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P43



ブッポウソウ 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P45



アカシヨウビン 準絶滅危惧

撮影 土谷諄一 P44



チョウゲンボウ 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P45



カワセミ 準絶滅危惧

撮影 鈴木三郎 P44



サンコウチョウ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P45



ヤマセミ 準絶滅危惧

撮影 鈴木三郎 P44



マミジロ 準絶滅危惧

撮影 後藤恭子 P46



コマドリ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P46



イカル 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P47



コルリ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P46



ホオアカ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P48



コサメビタキ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P47



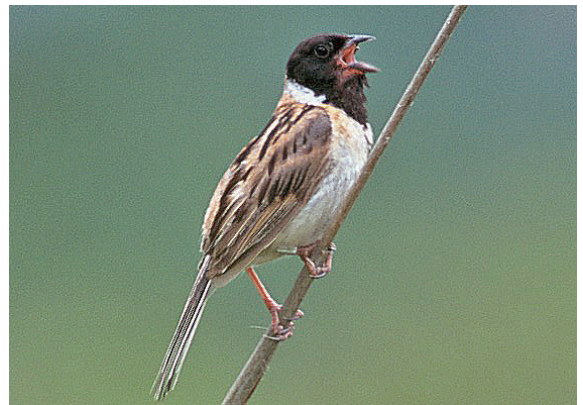
ノジコ 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P48



ハギマシコ 準絶滅危惧

撮影 佐々木均 P47



コジュリン 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P48



オオジュリン 準絶滅危惧

撮影 西出 隆 P49



シノリガモ 情報不足

撮影 佐藤成幸 P50



ウズラ 情報不足

撮影 佐々木均 P49



カワイサ 情報不足

撮影 小笠原嵩 P50



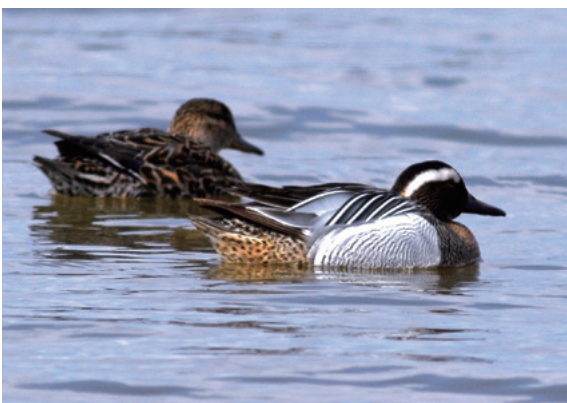
カリガネ 情報不足

撮影 西出 隆 P49



サンカノゴイ 情報不足

撮影 加賀谷幸男 P51



シマアジ 情報不足

撮影 西出 隆 P50



ミゾゴイ 情報不足

撮影 佐々木均 P51



クロツラヘラサギ 情報不足

撮影 佐藤公生 P51



アオシギ 情報不足

撮影 西出 隆 P53



クイナ 情報不足

撮影 佐々木均 P52



ヘラシギ 情報不足

撮影 加藤正敏 P53



ヒメクイナ 情報不足

撮影 加賀谷幸男 P52



ハイイロチュウヒ 情報不足

撮影 佐々木均 P53



セイタカシギ 情報不足

撮影 西出 隆 P52



ケアシノスリ 情報不足

撮影 西出 隆 P54



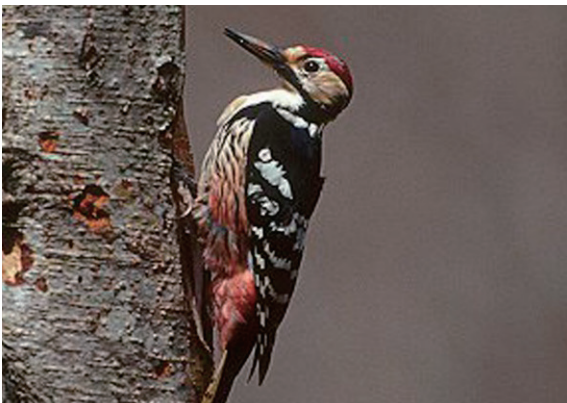
フクロウ 情報不足

撮影 小笠原嵩 P54



オオマシコ 情報不足

撮影 佐藤公生 P55



オオアカゲラ 情報不足

撮影 加藤正敏 P54



カンムリカイツブリ 留意種

撮影 佐藤公生 P56



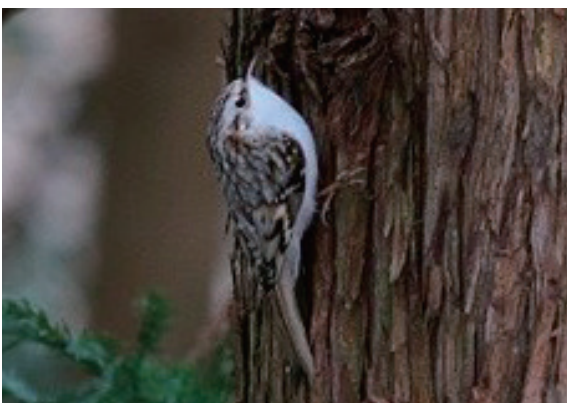
コチョウゲンボウ 情報不足

撮影 西出 隆 P55



タカチホヘビ 情報不足

撮影 田中政行 P63



キバシリ 情報不足

撮影 遠藤英之 P55



シロマダラ 情報不足

撮影 三浦 翼 P63

両 生 類 ・ 淡 水 魚 類



ニホンアカガエル 準絶滅危惧

撮影 梅津一史 P71



トミヨ属雄物型 絶滅危惧IA類

撮影 杉山秀樹 P84



クニマス 絶滅

撮影 杉山秀樹 P81



ニホンイトヨ 絶滅危惧IA類

撮影 杉山秀樹 P85



ゼニタナゴ 絶滅危惧IA類

撮影 杉山秀樹 P82



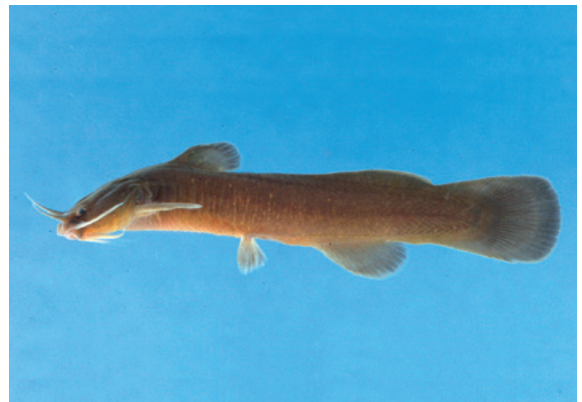
ホトケドジョウ 絶滅危惧IA類

撮影 杉山秀樹 P86



シナイモツゴ 絶滅危惧IA類

撮影 杉山秀樹 P83



アカザ 絶滅危惧IA類

撮影 杉山秀樹 P87



カワヤツメ 絶滅危惧IB類

撮影 杉山秀樹 P88



ハナカジカ 絶滅危惧IB類

撮影 杉山秀樹 P92



ヤリタナゴ 絶滅危惧IB類

撮影 杉山秀樹 P89



カジカ中卵型 絶滅危惧IB類

撮影 杉山秀樹 P93



キタノアカヒレタビラ 絶滅危惧IB類

撮影 杉山秀樹 P90



スナヤツメ北方種 絶滅危惧II類

撮影 杉山秀樹 P94



カマキリ 絶滅危惧IB類

撮影 杉山秀樹 P91



スナヤツメ南方種 絶滅危惧II類

撮影 杉山秀樹 P94



シュウサンウグイ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 杉山秀樹 P95



メダカ北日本集団 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 杉山秀樹 P97



エソウグイ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 杉山秀樹 P95



カンキョウカジカ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 杉山秀樹 P97



ギバチ 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 杉山秀樹 P96



カジカ大卵型 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P98



トミヨ属淡水型 絶滅危惧Ⅱ類

撮影 杉山秀樹 P96



スミウキゴリ 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P98



シロウオ 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P99



ビリンゴ 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P101



ミズハゼ 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P99



ニホンウナギ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P101



ヒモハゼ 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P100



ウケクチウグイ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P102



チクゼンハゼ 準絶滅危惧

撮影 杉山秀樹 P100



ドジョウ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P102



ナマズ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P103



クロヨシノボリ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P105



ニッコウイワナ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P103



チチブ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P105



クルマメサヨリ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P104



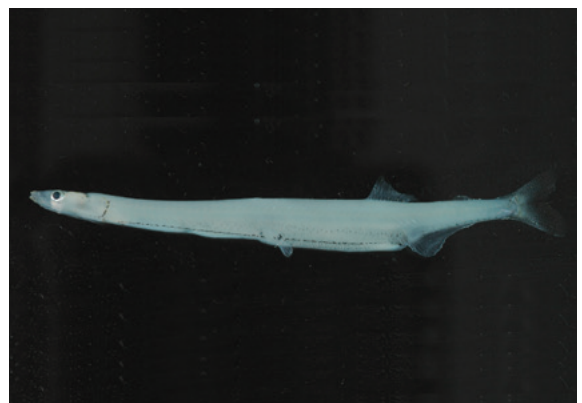
ルリヨシノボリ 地域個体群

撮影 杉山秀樹 P106



シマウキゴリ 情報不足

撮影 杉山秀樹 P104



シラウオ 留意種

撮影 杉山秀樹 P107



サクラマス(ヤマメ) 留意種

撮影 杉山秀樹 P107



イワテヒロウドマイマイ 絶滅危惧IA類

撮影 川口洋治 P118



ジュズカケハゼ広域分布種 留意種

撮影 杉山秀樹 P108



スカシベッコウ 絶滅危惧IB類

撮影 川口洋治 P118



ハコダテヤマキサゴ 絶滅危惧IA類

撮影 川口洋治 P117



ヒタチマイマイ 絶滅危惧IB類

撮影 川口洋治 P119



ヤマメタニシ 絶滅危惧IA類

撮影 川口洋治 P117



ニクイロシブキツボ 絶滅危惧II類

撮影 川口洋治 P119



カワグチレンズガイ 絶滅危惧II類

撮影 川口洋治 P120



ナミコギセル 情報不足

撮影 川口洋治 P121



ミヨシギセル 準絶滅危惧

撮影 川口洋治 P120



ヤマコウラナメクシ 情報不足

撮影 川口洋治 P122



ササケマイマイ 準絶滅危惧

撮影 川口洋治 P120



クリイロキセルガイモドキ 留意種

撮影 川口洋治 P123



ミチノクマイマイ 準絶滅危惧

撮影 川口洋治 P121

目次

改訂版の発刊にあたって

口絵

秋田県の自然環境	1
----------	---

秋田県版レッドデータブック2016の概要	5
----------------------	---

1. 改訂の目的
2. 改訂の経緯
3. 掲載対象
4. 改訂のための調査
5. 改訂のための検討体制
6. カテゴリー及びカテゴリー定義
 - (1) カテゴリー
 - (2) 秋田県版レッドデータブックカテゴリー定義
 - (3) 主な変更点
7. 評価結果
 - (1) 掲載種数
 - (2) 評価結果概要
 - (3) 掲載種一覧(分類群、カテゴリー別)

鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類 掲載種の解説	17
-----------------------------	----

掲載項目

鳥類	21
----	----

鳥類概説

鳥類掲載種解説

鳥類参考文献

爬虫類	59
-----	----

爬虫類概説

爬虫類掲載種解説

爬虫類参考文献

両生類	67
-----	----

両生類概説

両生類掲載種解説

両生類参考文献

淡水魚類	75
------	----

淡水魚類概説

淡水魚類掲載種解説

淡水魚類参考文献

陸産貝類	113
------	-----

陸産貝類概説

陸産貝類掲載種解説

陸産貝類参考文献

参考資料 秋田県版レッドデータブック2002から削除した種	126
-------------------------------	-----

秋田県の自然公園・自然環境保全地域等一覧	128
----------------------	-----

執筆者、写真提供者	130
-----------	-----

和名索引	131
------	-----

秋田県の自然環境

県内には、海岸から高山帯までの間に、平野部、河川・湖沼地域、扇状地と湧水地帯、山麓帯から山地帯、亜高山帯等の様々な環境が存在する。そこには多種多様な生物が生息・生育し、独自の生態系を形成している。以下、主要な生態系毎に県内の自然環境の概要を述べる。

1. 森林生態系

森林は県内の生態系の中核をなしている重要な存在であり、県内に生息・生育する多くの動植物もまた、何らかの形で森林生態系にその存在基盤を依存している。

現在の森林面積は県土面積の70%余りを占めているが、森林面積の50%が針葉樹を中心とした人工林で、人工林の大半はスギ植林地となっている。その他の森林の多くは落葉広葉樹林となっているが、その半分は伐採等様々な人為的影響を受けたコナラやミズナラなどからなる二次林である。一方、ブナ林をはじめとする自然林の多くは、標高500m以上の山地部にまとまって残存している。

亜高山性の森林は、標高1,100m～1,200m以上に遺存的に点在している。八幡平・森吉山や秋田駒ヶ岳一帯、鳥海山地域を除いてはいずれも小面積で連続性は少ないが、そのため固有性を保持しているとも言える。また、由利地方海岸部には暖地性の常緑広葉樹のタブノキ林等が小面積ながら残存している。

標高の高い土地の森林は、日常生活圏から離れていること、気象条件が厳しいことなどから、車道や登山道沿線等を除いて比較的自然性の高い生態系が維持されている。しかしながら、近年の登山ブームによる利用者増や盗掘等による影響と、温暖化などの地球規模での環境問題の拡大による影響が懸念されている。

2. 草地生態系

県内における自然草原としては、高山ハイデや高山風衝草原、亜高山性広葉草原、雪田植生のほか、山地帯に多く見られる雪崩植生や高茎草本群落、岩壁植生、河川の氾濫原植生、海浜地の砂丘植生や海岸風衝草原、あるいは火山・硫気孔荒原などが代表的である。これら自然草原のうち砂丘植生と河川の氾濫原植生を除いては連続性を欠いている上、面積も狭小であり、遺存的に点在しているのみである。また、砂丘植生及び河川氾濫原植生は、元来不安定な立地に成立しているとともに、様々な人為的影響を受けやすい状況となっている。

いわゆる二次草原としては、シバ草地やスキ草地などが主に里山地帯に点在している。比較的面积の大きい二次草原は、寒風山一帯や一部の牧草地やスキー場等に限定されており、その他は小面積で点在しているに過ぎない。二次草原は、古くから放牧や採草、火入れ等の人為的干渉により成立してきたが、近年の牧畜業の衰退や人為的干渉の減少に伴いその面積を大幅に減少させているとともに、二次草原に依存して生息・生育する生物の減少が認められ、その維持・管理方法の確立が課題となっている。

3. 湿原生態系

県内には、釧路湿原や尾瀬ヶ原のような大規模な湿原は見られないが、低層湿原から高層湿原まで様々な発達段階の湿原が各所に点在している。

亜高山帯及び山地帯上部に分布する中間湿原や高層湿原は、八幡平周辺、栗駒山、鳥海山等の主に自然公園内に位置しているため比較的自然度が高く維持されているが、部分的には、盗掘・踏み付け等による影響が見られる。

一方、低山地帯や低湿地、河川氾濫原、海岸砂丘後背地等に分布する湿原は、県内各所に点在しているが、開田や土地造成、公園造成などの人為的影響を受け、既に消失した湿原も多い。残されている湿原の多くも、様々な開発行為や営農行為等から直接・間接の影響を受けており、その存続基盤は脆弱な状況にある。

また、八郎潟干拓地の一部に成立したヨシ草原等は、干拓事業により人工的に創り出された湿生地であるが、県内最大の面積を有しており、鳥類等の生息地として重要な位置を占めている。

4. 河川・湖沼生態系

県内には、雄物川、米代川、子吉川の三大河川のほか、馬場目川、水沢川、白雪川をはじめとした多くの独立中小河川が存在している。これら河川は水生生物の生息場所となっているだけでなく、川沿いの河畔林と一体となって河川環境の維持・保全機能を担うとともに、様々な動植物の移動・分散ルート等としても機能している。さらに河川上流部の渓谷林は、森林生態系との連続性の確保に大きな役割を果たしている。

県内に分布する三大湖沼である十和田湖、田沢湖、八郎湖は、近代以降、おのおの大規模な生態系の改変を被っており、二次的に成立した生態系とも言える状況下にある。また、山間部等に位置する湖沼においても、魚類等の放流の影響を受けているケースが散見される。

平野部に位置する大小さまざまな河跡湖やため池群の中には、県内の生物相を特徴付ける希少な淡水魚類、水生植物や湿原植物が残存している。しかしながら、利水等を目的とした開発、オオクチバス等の移入種による在来種の駆逐等の問題が認められる。

また、平鹿・仙北地域等の扇状地に多く分布する湧水地帯には、希少なトミヨ属雄物型や水生植物が生息・生育する特異な生態系が形成されている。この生態系は周辺の水田地帯と密接な関係にあり、当該地の広域的・一体的保全が課題となっている。

5. 沿岸域生態系

県内の沿岸には暖流の対馬海流が北上しているため、緯度のわりには温暖な気候となっており、南方系の生物が由利地域や男鹿半島、岩館海岸等に線状に分布している。

県中央部で日本海に突出している男鹿半島西側一帯及び北部の岩館海岸、南部の象潟海岸には自然性の高い岩礁海岸が発達し、海岸岩礁性の様々な生物群が分布している。またこれら岩礁地帯は、ハヤブサ等の猛禽類や、ウミウなどの繁殖地としても重要な位置を占めている。

これら岩礁海岸の間には長大な砂浜海岸が弧状に連なり、海岸砂丘植生が線状に分布しているが、道路・港湾整備やクロマツ植林による海岸防風林化等の影響を受け、本来の砂浜植生が大幅に減少している。また、砂丘後背地に見られる湿地・湖沼群も、主に江戸時代から昭和20年代にかけての開田や土地造成等の影響を受け、天王湿原などごく一部を除いて大幅に面積を減少させるとともに、自然度の低下が危惧されている。

県内の海岸線にはサンゴ礁や干潟は存在しないが、男鹿、八森、象潟の岩礁性海岸の地先には様々なタイプの藻場が分布し、特にホンダワラ類を主体とするガラモ場は、ハタハタの産卵場として不可欠な存在となっている。

また、沿岸部における特異な生態系である塩沼湿地が小面積ながら男鹿半島の西部海岸域に分布している。この塩沼湿地は、海釣り利用者等による踏みつけや漂着物による影響を部分的に受けている。

6. 耕地生態系

県内の耕地面積は県土の約13%（水田面積は約11%）を占めており、森林に次ぐ大きな面積となっている。これら耕地の大半は、標高200m以下の低地に分布しており、これより標高の高い耕地の多くは戦後の開拓や近年の農地造成によるものである。

このため、ヨシ群落やハンノキ林などの低地部の原植生は、谷地湿原や池沼後背地、河川氾濫原などに断片的に残存しているに過ぎない。

耕地生態系、特に水田地帯は、用排水路等を介して河川や、ため池等と繋がった複合的な生態系をなしている。そこには、メダカ、カエル、ホタルなどの身近な生き物が数多く生息していたが、高度経済成長期を境とした社会・経済条件の大幅な変動から、耕地における生物多様性が減少してきている。一部の水生植物や淡水魚、昆虫類の中には、絶滅の危惧が指摘される種まで生じている。このため、近年は農業関係の各種事業においても環境に配慮した対策が実施されてきているが、人為的な影響を日常的に受けている生態系であることに変わりはない。

7. 都市生態系

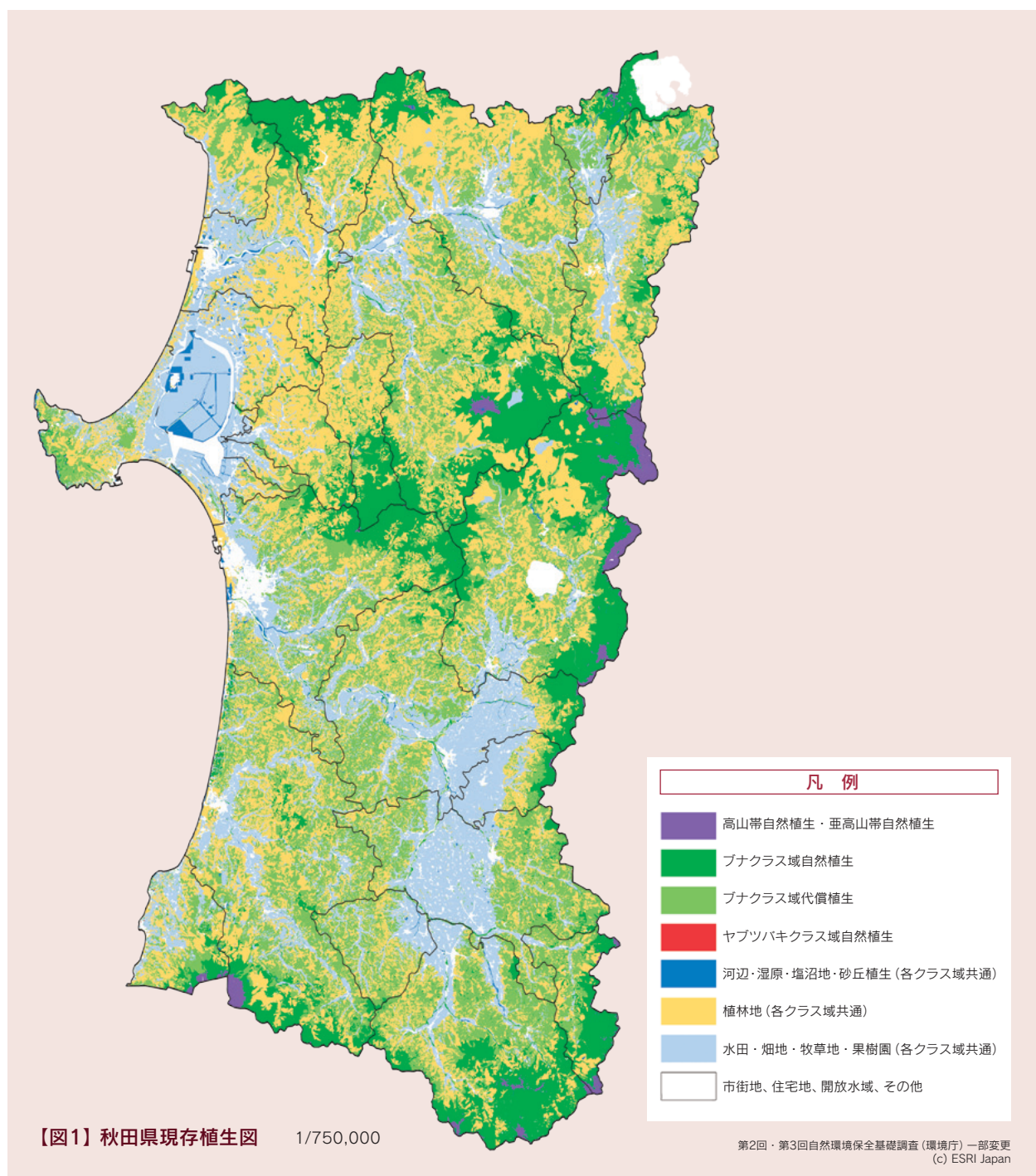
県内の主な都市域は、耕地生態系同様標高200m以下の平野部に集中している。その大半は、低地においては水田地帯やヨシ群落、ハンノキ林などから、丘陵地においては畑地及び二次林地帯などから改変されたものと考えられる。

県内の都市域は、概して都市公園面積率が低いが、都市近郊丘陵部の二次林や海岸部のクロマツ防風林、河畔林等により森林生態系と回廊的または飛石状に連続性が確保されている地域が多い。反面、そのスピードが減少してきているものの郊外の二次林地帯等への宅地化が進行しており、秋田市などでは都市部と森林域との連続性が失われる傾向が認められる。また、都市公園や街路の植栽への郷土産樹種等の使用、河川整備時の多自然型工法等の採用による親水性の確保と水生生物の生息・生育空間の回復が課題となっている。

8. 秋田県現存植生図

ある場所を覆っている植物体の総称を植生といい、それらの広がりを地図上に表現したものが植生図である。図1は、環境庁（現環境省、以下同じ）が実施した第2回・第3回自然環境保全基礎調査植生調査（1/50,000縮尺）の成果をもとに、植生を8つに区分して、その水平分布を示したものである。

現在、環境省は1/25,000縮尺植生図の整備を進めている。平成27年3月末で、秋田県域の整備率は約51.1%（2次メッシュ数による算出）と全国平均を下回っている。今後の整備の進展が期待される。



秋田県版レッドデータブック 2016の概要

1. 改訂の目的

豊かな自然が残っているとされる本県においても、土地利用の変化に伴って動物の生息地や植物の生育地は様々な影響を受けてきている。環境の悪化により生息・生育地の消失や個体数の減少が生じ、中には絶滅の危機に瀕している例も出現している。また、産業構造や資源利用の変化と社会の過疎化・高齢化により、里地里山への働きかけが減少することによって、近い過去に存続してきた生態系が大きく変化している状況も顕著になってきている。さらに人為によって他の地域から持ち込まれた生物が在来種の脅威となっている例も見られる。本県における生物多様性の保全を図るためには、環境の悪化を防ぎ、植生や種を持続的に維持する努力が必要と考えられる。

全国レベルでの野生生物の絶滅の危険性の評価は、国により行われている。しかしながら、野生生物の生息・生育状況や生息・生育環境は地域によって異なるため、全国的には絶滅のおそれがないと評価された種であっても都道府県レベルでは地域の実態に符合しない場合がある。都道府県において種の保全を行うためには、より地域の現況を反映したレッドリスト^{*1}・レッドデータブック^{*2}が必要となり、これまでに全ての都道府県において都道府県版レッドデータブックが発刊されてきた。また、野生生物の生息・生育状況や生息・生育環境は常に変化していることから、これらにおける評価は定期的に見直すことが求められ、既に多くの都道府県で改訂版が発刊され、残るほとんどの都道府県でも改訂に向けた作業が進められている。

「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2016－動物I」は、本県における絶滅のおそれのある野生生物についての最新の状況を明らかにすることを目的に作成された。これらの情報が明らかにされることにより多くの人々が種や生態系の保全に関心を持ち、自然環境の良好な推移に留意されることが期待される。

また、本書は絶滅の危機にある県内の野生生物の現状を知り、教育普及から開発行為に至る広い領域での基礎的情報として共有されることが望まれる。

※1：野生生物について生物学的観点から絶滅の危険性を評価し選定したリスト。

※2：レッドリストに選定された野生生物について、分布、生息・生育環境、生息・生育状況、絶滅の要因、保全対策などをとりまとめて編さんした本。

2. 改訂の経緯

環境省は1991年に「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編－」及び「同一無脊椎動物編－」を発行した。その後環境省は、国際自然保護連合(IUCN)が採択したレッドリストカテゴリーの考え方を取り入れた新たなカテゴリーに基づく改訂を行った。環境省はこれまでに3回の見直しを行い、2012年と2013年に第4次レッドリストを公表した。また、2015年には哺乳類の一部の種を見直し、レッドリスト2015として公表している。

秋田県では、1999～2001年に、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類、陸産貝類及び維管束植物について秋田県版レッドリストを順次公表した。その一部を見直した後、2002年に「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物2002－秋田県版レッドデータブック－動物編・植物編」(以下「2002年版」という。)を発刊した。また、2008年には、蘚苔類及び地衣類についての秋田県版レッドリストを公表するとともに、2009年に、「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物2009－秋田県版レッドデータブック－維管束植物以外編(蘚苔類・地衣類)」を発刊した。

さらに、2009年には、シヤジクモ類についての秋田県版レッドリストを公表した。

しかしながら、2002年版が発刊されてから10年以上が経過し、この間にも野生生物の生息・生育状況などに変化が見られるとともに、新たな知見が蓄積され、掲載した野生生物及びそのカテゴリーを現況に出来るだけ正確に反映させるための見直しの必要性が認識された。

そのため県では2009年から順次、分類群ごとに県内の野生生物の専門家で構成された「秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会」を設置し、見直しを進め2014年3月に維管束植物について、「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2014－維管束植物」を発刊した。

このたび、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類及び陸産貝類の絶滅の危険性の再評価が取りまとめられ、「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2016－動物I」として発刊することとなった。

3. 掲載対象

今回対象とした分類群は、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類及び陸産貝類である。

対象とした生物の単位は、種及び地域個体群とした。種の単位は、種及び亜種としたが、鳥類は、野外の観察では亜種の同定が困難である場合が多いため、種のレベルまでとした。

対象範囲は、本県全域に生息するものとしたが、いわゆる迷鳥や偶産等と考えられるものや外来種等は対象としなかった。

4. 改訂のための調査

2002年版の発刊後に新しく記録された野生生物の生息状況等について分類群ごとに文献などを確認した。

淡水魚類については、生息地の現地調査も実施した。

5. 改訂のための検討体制

秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会を分類群ごとに2009年から順次設置し、改訂の進め方、評価対象種の選定、その生息状況の情報収集・整理及び絶滅のおそれの評価等を協議、検討した。

【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（鳥類）委員】

- | | |
|--------|-------------------|
| ◎小笠原 暁 | 秋田大学 名誉教授 |
| 佐々木 均 | 能代市立能代商業高等学校 教頭 |
| 佐藤 磯男 | あきた鳥の会 会長 |
| 佐藤 公生 | 日本野鳥の会 秋田県支部 支部長 |
| 西出 隆 | 日本野鳥の会 秋田県支部 副支部長 |

【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（両生・爬虫類）委員】

- 猿田 基 有限会社地盤環境コンサルタント 課長
田中 政行 株式会社自然科学調査事務所 環境2部 部長
◎本郷 敏夫 元秋田県自然保護協会会長

【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（淡水魚類）委員】

- 草薙 利美 株式会社自然科学調査事務所 環境2部 魚介類調査室 室長
熊谷 雅之 有限会社地盤環境コンサルタント 代表取締役
今野 清文 エヌエス環境株式会社東北支社 秋田支店 技術部 次長
◎杉山 秀樹 秋田県立大学 客員教授
水谷 寿 秋田県農林水産部 水産漁港課 副主幹

【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（陸産貝類）委員】

- ◎川口 洋治 日本貝類学会会員
(五十音順、敬称略、所属等は委員会設立当時、◎はチーフ)

6. カテゴリー及びカテゴリー定義

(1) カテゴリー

秋田県版レッドデータブックのカテゴリー及び同定義は、環境省レッドリストカテゴリーと判定基準（2013）に準拠した。

【秋田県版レッドデータブックカテゴリー】

- 絶滅 (EX) : 本県ではすでに絶滅したと考えられる種。
野生絶滅 (EW) : 飼育下でのみ存続している種。
絶滅危惧 : 絶滅の危機に瀕している種。
IA類 (CR) : ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。
IB類 (EN) : IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。
II類 (VU) : 絶滅の危険が増大している種。
準絶滅危惧 (NT) : 現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。
情報不足 (DD) : 「絶滅危惧」に移行する可能性はあるが、評価するだけの情報が不足している種。
地域個体群 (LP) : 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高い個体群。

[付属資料]

- 留意種 (N) : 本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種、現在は講じられている保護策により絶滅の危険が回避されている種、過去に個体数・分布が著しく減少した種、他の機関で準絶滅危惧以上の評価を受けている種。

(2) 秋田県版レッドデータブックカテゴリー定義

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>●絶滅 Extinct(EX) 本県ですでに絶滅したと考えられる種(注1、以下同じ)</p>	<p>過去に本県に生息したことが確認されており、飼育下を含め、本県ですでに絶滅したと考えられる種</p>	
<p>●野生絶滅 Extinct in the Wild (EW) 飼育下でのみ存続している種</p>	<p>過去に本県に生息したことが確認されており、飼育下では存続しているが、本県において野生ですでに絶滅したと考えられる種</p> <p>【確実な情報があるもの】 ①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。</p> <p>【情報量が少ないもの】 ③過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。</p>	
<p>○絶滅危惧I類 Critically Endangered+ Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p>●絶滅危惧 T H R E A T E N E D</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。</p> <p>【情報量が少ないもの】 ⑤それほど遠くない過去(30年～50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。</p>	<p>絶滅危惧 IA類 Critically Endangered (CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少がみられる場合。 1. 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間(注2、以下同じ)を通じて、90%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、かつ理解されており、かつ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間若しくは3世代のどちらか長い期間において80%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</p> <p>B. 出現範囲が100km²未満若しくは生息地面積が10km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ所の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 3年間若しくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、若しくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 a) 個体群構造が次のいずれかに該当 i) 50以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に90%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少</p> <p>D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、10年間、若しくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</p>

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
		<p>絶滅危惧IB類 Endangered (EN)</p> <p>絶滅危惧IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、70%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、かつ理解されており、かつ明らかに可逆的である。 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 今後10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。 過去と未来の両方を含む10年間若しくは3世代のどちらか長い期間において50%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が500km²未満若しくは生息地面積が50km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。 <p>C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 5年間若しくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 成熟個体数の継続的な減少が観察、若しくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> 250以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 1つの下位個体群中に95%以上の成熟個体が属している。 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、20年間、若しくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。</p>
<p>○絶滅危惧II類 Vulnerable (VU)</p> <p>絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧I類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ②大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。 	<p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、かつ理解されており、かつ明らかに可逆的である。 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 今後10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があると予測される。 過去と未来の両方を含む10年間若しくは3世代のどちらか長い期間において30%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が2,500km²未満若しくは生息地面積が250km²未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

カテゴリ及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>● 絶滅危惧 T H R E A T E N E D</p>		<p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10年間若しくは3世代のどちらか長い期間内に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、若しくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 1,000以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中にすべての成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p>
<p>● 準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種</p> <p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) 個体数が減少している。 b) 生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 d) 交雑可能な別種が侵入している。 	
<p>● 情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>次に該当する種</p> <p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリを判定するに足る情報が得られていない種。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b) 生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 	
<p>● 地域個体群 Threatened Local Population (LP) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。 ② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。 	

■付属資料

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
●留意種 Noteworthy (N)	次に該当する種 ①本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種。 ②現在は保護策が講じられていて、差し迫った危機はないが、それが中止されれば絶滅危惧Ⅱ類以上の危険度になる種。 ③過去に個体数・分布が著しく減少した種など。 ④他の機関で準絶滅危惧以上の評価を受けている種。	

(注1) 種：種及び亜種を示す。

(注2) 過去10年間若しくは3世代：1世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を超えるものは世代数を採用する。

(3) 主な変更点

① 環境省レッドリストカテゴリーと判定基準(2013)からの変更点

ア 本県の面積を勘案し、定量的要件のB要件の出現範囲面積と生息地面積を変更した。(2002版と同じ)

カテゴリー		環境省	秋田県
絶滅危惧IB類 (EN)	出現範囲	5,000km ² 未満	500km ² 未満
	生息地面積	500km ² 未満	50km ² 未満
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	出現範囲	20,000km ² 未満	2,500km ² 未満
	生息地面積	2,000km ² 未満	250km ² 未満

イ 環境省では付属資料としている「絶滅のおそれのある地域個体群」をレッドデータブックカテゴリーに組み入れ、名称を「地域個体群」とした。(2002版と同じ。)

ウ 本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要するとされる種などのためのカテゴリーとして「留意種」を設け、付属資料とした。(2002版では、本カテゴリーを設けてレッドデータブックカテゴリーに組み入れた。)

② 2002版のカテゴリー定義からの変更点

ア カテゴリー名称から“種”を削除した。(付属資料を除く。)

イ 本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要するとされる種などのためのカテゴリーとして2002版で設けた「留意種」を付属資料とした。

ウ 「環境庁レッドリストカテゴリー(1997)」から「環境省レッドリストカテゴリーと判定基準(2013)」への変更内容を反映した。

エ 一般的に植物を対象としてのみに用いる用語を削除した。

7. 評価結果

(1) 掲載種数

秋田県版レッドデータブック2016には、絶滅1種、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧IA類、絶滅危惧IB類、絶滅危惧II類）61種、準絶滅危惧54種、情報不足34種、1地域個体群が掲載された。

その他、付属資料として留意種に5種が掲載された。（表1）。

【表1】秋田県版レッドデータブック2016掲載種数

カテゴリー			分類群	鳥類	爬虫類	両生類	淡水魚類	陸産貝類	合計
絶滅			EX	0	0	0	1	0	1
				0	0	0	(1)	0	(1)
野生絶滅			EW	0	0	0	0	0	0
				0	0	0	0	0	0
絶滅のおそれのある種	絶滅危惧I類	IA類	C R	10	0	0	6	4	20
		(6)	0	0	(5)	(4)	(15)		
	IB類	E N	4	0	0	6	3	13	
			(6)	0	0	(4)	(3)	(13)	
	絶滅危惧II類		V U	17	0	0	8	3	28
				(20)	0	0	(7)	(3)	(30)
絶滅危惧計				31	0	0	20	10	61
				(32)	0	0	(16)	(10)	(58)
準絶滅危惧			N T	42	0	1	7	4	54
				(50)	0	(1)	(8)	(4)	(63)
情報不足			D D	20	2	0	9	3	34
				(19)	(2)	0	(1)	(3)	(25)
地域個体群			L P	0	0	0	1	0	1
				0	0	0	(2)	0	(2)
合計				93	2	1	38	17	151
				(101)	(2)	(1)	(28)	(17)	(149)

[付属資料]

留意種	N	1	0	0	3	1	5
		0	0	0	0	(1)	(1)

※ 表中の括弧内の数字は、2002版を示す。

(2) 評価結果概要

秋田県版レッドデータブック2016に新たに掲載された種は、鳥類22種、淡水魚類13種であった。

一方、調査・研究により生息状況などに関する新たな知見が蓄積されたことや、生息環境の改善等により絶滅のおそれなくなったことなどにより、2002版に掲載された種から鳥類28種、淡水魚類1種、計29種が秋田県版レッドデータブック2016に掲載されなかった。

爬虫類、両生類及び陸産貝類については、既存文献等を調査したところ県内の生息状況等に変化がみられなかったことなどから2002版と同じ評価結果となった。

今回の改訂で、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧ⅠA類、絶滅危惧ⅠB類、絶滅危惧Ⅱ類）と評価された種数は2002版より3種増加した。

また、現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては絶滅のおそれのある種に移行する要素を有するものとして準絶滅危惧と評価された種は9種減少したが、情報不足とされた種が9種増加しており、生息状況等の知見の蓄積が求められるとともに、今後の推移に注意が必要である。

(3) 掲載種一覧(分類群、カテゴリー別)

【鳥類】

絶滅危惧IA類 (CR)

- 1 ハクガン
- 2 オオヨシゴイ
- 3 クロサギ
- 4 コアジサシ
- 5 イヌワシ
- 6 クマゲラ
- 7 チゴモズ
- 8 アカモズ
- 9 オオセツカ
- 10 セツカ

絶滅危惧IB類 (EN)

- 1 シジュウカラガン
- 2 コクガン
- 3 チュウヒ
- 4 クマタカ

絶滅危惧II類 (VU)

- 1 オカヨシガモ
- 2 ヨシガモ
- 3 トモエガモ
- 4 ビロードキンクロ
- 5 ヒクイナ
- 6 オオジシギ
- 7 ツルシギ
- 8 オジロワシ
- 9 オオワシ
- 10 ツミ
- 11 ハイタカ
- 12 アリスイ
- 13 チゴハヤブサ
- 14 ハヤブサ
- 15 サンショウクイ
- 16 コシアカツバメ
- 17 イスカ

準絶滅危惧 (NT)

- 1 ヒシクイ
- 2 マガン
- 3 クロガモ
- 4 カイツブリ
- 5 アオバト
- 6 ウミウ
- 7 ヨシゴイ
- 8 ササゴイ
- 9 ヨタカ
- 10 ケリ
- 11 イカルチドリ
- 12 コチドリ
- 13 シロチドリ
- 14 ヤマシギ
- 15 タシギ
- 16 ホウロクシギ
- 17 アオアシシギ
- 18 キョウジョシギ
- 19 ミサゴ
- 20 ハチクマ
- 21 オオタカ
- 22 サシバ
- 23 オオコノハズク
- 24 コノハズク
- 25 アオバズク
- 26 トラフズク
- 27 アカショウビン
- 28 カワセミ
- 29 ヤマセミ
- 30 ブッポウソウ
- 31 チョウゲンボウ
- 32 サンコウチョウ
- 33 マミジロ
- 34 コマドリ

- 35 コルリ
- 36 コサメビタキ
- 37 ハギマシコ
- 38 イカル
- 39 ホオアカ
- 40 ノジコ
- 41 コジュリン
- 42 オオジュリン

情報不足 (DD)

- 1 ウズラ
- 2 カリガネ
- 3 シマアジ
- 4 シノリガモ
- 5 カワアイサ
- 6 サンカノゴイ
- 7 ミゾゴイ
- 8 クロツラヘラサギ
- 9 クイナ
- 10 ヒメクイナ
- 11 セイタカシギ
- 12 アオシギ
- 13 ヘラシギ
- 14 ハイイロチュウヒ
- 15 ケアシノスリ
- 16 フクロウ
- 17 オオアカゲラ
- 18 コチョウゲンボウ
- 19 キバシリ
- 20 オオマシコ

留意種 (N)

- 1 カンムリカイツブリ

【爬虫類】

情報不足 (DD)

- 1 タカチホヘビ
- 2 シロマダラ

【両生類】

準絶滅危惧 (NT)

- 1 ニホンアカガエル

【淡水魚類】

絶滅 (EX)

- 1 クニマス

絶滅危惧IA類 (CR)

- 1 ゼニタナゴ
- 2 シナイモツゴ
- 3 トミヨ属雄物型
- 4 ニホンイトヨ
- 5 ホトケドジョウ
- 6 アカザ

絶滅危惧IB類 (EN)

- 1 カワヤツメ
- 2 ヤリタナゴ
- 3 キタノアカヒレタビラ
- 4 カマキリ
- 5 ハナカジカ
- 6 カジカ中卵型

絶滅危惧II類 (VU)

- 1 スナヤツメ北方種
- 2 スナヤツメ南方種
- 3 ジュウサンウグイ
- 4 エゾウグイ
- 5 ギバチ
- 6 トミヨ属淡水型
- 7 メダカ北日本集団
- 8 カンキョウカジカ

準絶滅危惧 (NT)

- 1 カジカ大卵型
- 2 スミウキゴリ
- 3 シロウオ
- 4 ミミズハゼ
- 5 ヒモハゼ
- 6 チクゼンハゼ
- 7 ビリンゴ

情報不足 (DD)

- 1 ニホンウナギ
- 2 ウケクチウグイ
- 3 ドジョウ
- 4 ナマズ
- 5 ニッコウイワナ
- 6 クルメサヨリ
- 7 シマウキゴリ
- 8 クロヨシノボリ
- 9 チチブ

地域個体群 (LP)

- 1 ルリヨシノボリ

留意種 (N)

- 1 シラウオ
- 2 サクラマス(ヤマメ)
- 3 ジュズカケハゼ広域分布種

【陸産貝類】

絶滅危惧IA類 (CR)

- 1 ハコダテヤマキサゴ
- 2 ヤママメタニシ
- 3 エゾコギセル
- 4 イワテヒロウドマイマイ

絶滅危惧IB類 (EN)

- 1 スカシベッコウ
- 2 ヒメコハクモドキ
- 3 ヒタチマイマイ

絶滅危惧II類 (VU)

- 1 ニクイロシブキツボ
- 2 スジキビ
- 3 カワグチレンズガイ

準絶滅危惧 (NT)

- 1 ミヨシギセル
- 2 ササミケマイマイ
- 3 オオタキマイマイ
- 4 ミチノクマイマイ

情報不足 (DD)

- 1 ナミコギセル
- 2 ヤマコウラナメクジ
- 3 コシタカオオベソマイマイ

留意種 (N)

- 1 クリイロキセルガイモドキ

Animals I



**鳥類・爬虫類・
両生類・淡水魚類・
陸産貝類**

掲載種の解説

Red Data Book of Akita Prefecture 2016
Animals I

掲載項目

〔例〕

カモ目カモ科 ← (1)	秋田県2016：絶滅危惧IA類 ← (4)	PHOTO
ハクガン ← (2)	秋田県2002：絶滅危惧種IA類 ← (5)	
<i>Anser caerulescens</i> (Linnaeus, 1758) ← (3)	環境省2014：絶滅危惧IA類 ← (6)	
◆ 国内外の分布	北アメリカ大陸北部、グリーンランド北西部などの北極海沿岸で繁殖し、冬季は南部に渡って越冬する個体が多い。国内では冬季に北海道、本州に少数飛来する。 ← (7)	
◆ 県内の分布	能代市、男鹿市、大潟村など ← (8)	
◆ 本種の概要	冬鳥として国内に飛来し、11月下旬から3月頃まで留まるが数は少ない。マガンやヒシクイなどと共に行動することが多い。 ← (9)	
◆ 本種の現状	冬季に大潟村や県北部の沼沢地などに少数飛来している。近年、やや増加傾向にある。 ← (10)	
◆ 生存に対する脅威	少しずつではあるが、増加傾向にあるものの、依然として個体数はきわめて少ない。 ← (11)	
◆ 現在の保護対策	← (12)	
◆ 特記事項	← (13)	
	(佐藤 磯男) ← (14)	

(1) 目科名

(2) 和名

(3) 学名

目科名、和名、学名の引用元

① 鳥類

日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会2012)に準拠した。

② 爬虫類及び両生類

日本産爬虫両生類標準和名(日本爬虫両棲類学会2014)に準拠した。

③ 淡水魚類

基本的に環境省レッドデータブック2014に準拠したほか、一部の種に関しては秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会(淡水魚類)委員の見解に従った。

④ 陸産貝類

基本的に環境省レッドデータブック2014に準拠したほか、一部の種に関しては秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会(陸産貝類)委員の見解に従った。

(4) 秋田県2016

秋田県版レッドデータブック2016のカテゴリーを記載した。

(5) 秋田県2002

2002版のカテゴリーを記載した。2002年版では掲載されていない場合は、「-」と記載した。

(6) **環境省2014**

環境省レッドデータブック2014のカテゴリーを記載した。掲載されていない場合は、「該当なし」と記載した。

(7) **国内外の分布**

国内外の分布を記載した。

(8) **県内の分布**

県内の分布を記載した。

(9) **本種の概要**

形態的特徴や生態等を記載した。

(10) **本種の現状**

主に県内での生息状況等を記載した。

(11) **生存に対する脅威**

減少、絶滅の要因として推定されるものを記載した。

(12) **現在の保護対策**

天然記念物の指定などの保護対策を記載した。記載すべき事項が無い場合は項目を省略した。

(13) **特記事項**

その他特記すべき事項を記載した。特記すべき事項が無い場合は項目を省略した。

(14) **執筆者氏名**

執筆した方の氏名を記載した。

Aves



鳥類

Red Data Book of Akita Prefecture 2016
Animals I

鳥類概説

秋田県は西側が日本海に面し、東側には奥羽山脈が南北に連なり、脊梁沿いにブナ林が残存している地域がある。青森県との県境には白神山地があり、その一部が世界遺産に登録されている。

また県内には米代川および雄物川という二大河川があり、米代川は能代市から東に、雄物川は秋田市から南に揚々と横たわっている。その沿線には広大な水田地帯が広がっている。

このように秋田県土は天然ブナ林に代表される良好な自然環境のほか、日本海沿岸、農耕地帯、二次林など極めて多様性に富んだ環境であり、300種を超える鳥類が生息している。

奥羽山脈には北から八幡平、森吉山、秋田駒ヶ岳、和賀岳、栗駒山、更に沿岸部には烏海山と標高1000mを越す山々が連なり、亜高山から高山帯に生息するビンズイ、イワヒバリ、カヤクグリ、ホシガラス等が生息しており、ブナ林帯では極めて多くの鳥類が生息・繁殖している。なかでも比較的生息個体数の少ない鳥類はコマドリ、ルリビタキ、コルリ、クロジ、キバシリ、ブッポウソウ、アカショウビン等であるが、近年ブナ林帯の溪流でシノリガモの繁殖が栗駒山、田代岳、白神山地等で確認され、話題を呼んでいる。その詳細な生態の解明に向け調査が行われている。本種はこれまで殆どがシベリア方面から冬鳥として飛来し、沿岸の岩礁地帯で越冬すると云われていた。しかし、その生息数も少ないことから、冬鳥として飛来するのか、本州や北海道で繁殖したものが冬季沿岸で認められるのか判然としない。

沿岸部ではクロサギ、コアジサシ、オオジシギ、ホオアカ、コシアカツバメ等が生息個体数は少ないものの繁殖している。クロサギは暖帯性のサギの仲間であるが男鹿半島と象潟沿岸に少数ながら繁殖し、コアジサシも現在少数が雄物川の中州で繁殖している。以前には大潟村や秋田市から男鹿市に至る海浜で大きなコロニーで繁殖していたが、近年は大きなコロニーは観察されていない。オオジシギ、ホオアカなどは少数が県内の草原、湿地等で繁殖している貴重な鳥類である。

また冬鳥のコクガンも数少ないながら毎年男鹿半島および象潟沿岸に飛来するのも貴重である。

なかでも、日本全体でも一時幻の鳥と云われたオオセツカが大潟草原に多数が繁殖したことがあったが、現在そこには少数つがい繁殖している。この大潟草原は現在も鳥獣保護区特別保護地区となっており、オオセツカの繁殖数の増加が望まれている。この大潟草原はオオセツカ他、オオジュリン、コジュリン、ホオアカ、コヨシキリ、オオヨシキリ、オオヨシゴイ等の草原性の鳥類の繁殖地として極めて貴重な存在である。更に本草原にはチュウヒという草原性の猛禽類が繁殖しているのも貴重である。

1978年には、森吉山ノロ川地区で、本州で初めてクマゲラの繁殖が記録され、現在もひとつがいがほぼ毎年繁殖し続けているのは特筆に値する。本種は日本産キツツキ類では最も大型で、ハシボソガラス程の大きさであり、本州では白神山地を含め、奥羽山脈の標高約600mのブナ林で、大木がまとまって残存する林で繁殖している。本県では今のところ森吉山と八幡平のみで繁殖が知られている。クマゲラは営巣木として、直立した下枝のないブナの木の上約10～13mの所に大きな穴をあけて営巣する。

また、ここ数十年以前から大潟村を中心として、マガン、ヒシクイの仲間が、特に北帰行の折り、2月下旬から3月末に大集結し、雪が解けるに従い、能代市から北側の米代川沿いの水田地帯で落ち穂を拾っているのも見ごたえがある。

特に、近年マガン、ヒシクイの飛来数が多くなり、又、シジウカラガン、ハクガンの飛来数が増加しつづけているのは特筆に値する。

森林生態系の頂点に位置しているといわれる猛禽類、特にイヌワシ、クマタカがブナ帯から低山帯にかけて営巣、繁殖している。イヌワシは現在知られているのは10つがいほどである。

一方、クマタカは20つがいほどの営巣が確認されているものの、調査が進むにしたがって、もっと多くの営巣地が知られるようになるであろう。

イヌワシはブナ林帯の岩棚や天然スギの太い横枝に営巣し、その県内の分布は白神山地から奥羽山脈、烏海山であるのに対し、クマタカは低山帯からブナ林帯下部の天然スギやキタゴヨウ等の大木に営巣している。

更にその他の猛禽類であるオオタカは海岸砂防林からブナ林帯下部の森林で、多くはクロマツ、アカマツ、カラマツ等に営巣することが多い。その他、ハチクマ、ノスリ、サシバ、ミサゴ等多くの猛禽類が低山帯で繁殖している。なかでもミサゴとサシバが近年多く見受けられるようになった。

ミサゴは沿岸の後背林や大河川付近、ダム湖周辺部で繁殖している。一方サシバは、県内の二次林で多く繁殖しているのが各種調査で明らかになっている。

これら大型猛禽類が多く生息し、繁殖するだけの餌動物の生息を可能にしている多様な自然環境が豊富であるからであろう。

(小笠原嵩)

カモ目カモ科

ハクガン

Anser caerulescens (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧IA類
秋田県2002：絶滅危惧種IA類
環境省2014：絶滅危惧IA類



- ◆国内外の分布 北アメリカ大陸北部、グリーンランド北西部などの北極海沿岸で繁殖し、冬季は南部に渡って越冬する個体が多い。国内では冬季に北海道、本州に少数飛来する。
- ◆県内の分布 能代市、男鹿市、大潟村など
- ◆本種の概要 冬鳥として国内に飛来し、11月下旬から3月頃まで留まるが数は少ない。マガンやヒシクイなどと共に行動することが多い。
- ◆本種の現状 冬季に大潟村や県北部の沼沢地などに少数飛来している。近年、やや増加傾向にある。
- ◆生存に対する脅威 少しずつではあるが、増加傾向にあるものの、依然として個体数はきわめて少ない。

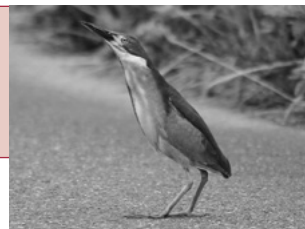
(佐藤磯男)

ペリカン目サギ科

オオヨシゴイ

Ixobrychus eurhythmus (Swinhoe, 1873)

秋田県2016：絶滅危惧IA類
秋田県2002：絶滅危惧種IB類
環境省2014：絶滅危惧IA類



- ◆国内外の分布 中国やウスリー地方からボルネオ島やジャワ島など広範囲に生息している。国内では北海道、本州に夏鳥として生息している。
- ◆県内の分布 男鹿市、大潟村など
- ◆本種の概要 北海道、本州では夏季に湿地や湖畔、河畔などの草原に生息し、繁殖している。
- ◆本種の現状 全国的にも減少傾向にあり、本県では男鹿市、大潟村などの限られた場所で観察されている。
- ◆生存に対する脅威 繁殖環境である低地湿性草原は、長期的に同じ環境を維持することが困難である上に、人為的な土地整備や開発に伴って環境が変化しやすい。

(佐藤磯男)

ペリカン目サギ科

クロサギ

Egretta sacra (Gmelin, 1789)

秋田県2016：絶滅危惧IA類
秋田県2002：絶滅危惧種IB類
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 韓国、台湾、フィリピン諸島、スンダ列島、マレーシア、オーストラリア北部など広範囲に生息している。国内では、本州以南の海岸に広く生息している。
- ◆県内の分布 八峰町、男鹿市、にかほ市など
- ◆本種の概要 本州以南の海岸の岩礁地帯に生息し、樹木の上や岩壁の棚の上などで繁殖し、留鳥として生息している。
- ◆本種の現状 八森岩館海岸、男鹿半島、象潟海岸の岩礁地帯に周年生息し、男鹿半島では繁殖が確認されているが、個体数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 比較的人家から離れた岩礁地帯に生息しているが、個体数が少ない。また、近年生息地に多くの釣り人が訪れるなど、生息環境が変化している。このことから生息数が減少することが考えられる。

(佐藤磯男)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

チドリ目カモメ科

コアジサシ

Sterna albifrons Pallas, 1764

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2014：絶滅危惧II類



- ◆国内外の分布 ヨーロッパ、ロシア西部、中東、インド、東南アジア、オーストラリア、アフリカ、北アメリカ中部、南アフリカ北部などで繁殖する。日本には夏鳥として渡来し、限られた地域で繁殖し、秋には大群になって南下する。
- ◆県内の分布 大館市、能代市、三種町、秋田市、男鹿市、潟上市、大潟村、大仙市、雄物川、皆瀬川、子吉川河口など
- ◆本種の概要 全長は、約28cmの雌雄同色のアジサシ類。海岸、大きな河川や河口の砂礫地、砂地、中洲の砂地などで見られ、群れで生活している。4月から8月にかけて砂地を掘って窪みを作り産卵しコロニーを形成する。
- ◆本種の現状 コロニーの近くや河口付近、渚に近い海上でホバリングしながら小魚を狙って急降下するのが観察されていたが、最近県内ではコアジサシのこうした行動が見られなくなった。河川の洪水などの影響でコロニーが消失し、繁殖する場所が一定しなくなった。
- ◆生存に対する脅威 海岸線の砂浜、河川の中洲や川原などの整備や開発などで繁殖地に、大型機械などが出入りするようになった。そのため、地面に産卵するコアジサシには脅威となり生存率低下の原因となっている。
- ◆現在の保護対策 国際希少野生動物種

(西出 隆)

タカ目タカ科

イヌワシ

Aquila chrysaetos (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸と北アメリカの広い範囲、および北西アフリカの一部に生息する。日本では主に本州に生息し、北海道や九州では極く少数の生息が確認され、その多くは同一地域に周年留まって生息する。
- ◆県内の分布 大館市、北秋田市、能代市、八峰町、藤里町、男鹿市、五城目町、横手市、東成瀬村、秋田駒ヶ岳、鳥海山など
- ◆本種の概要 全長は雄が約81cm、雌は約89cmで、雄より雌の方が大きい。岩壁や針葉樹などの大木に営巣する。東北地方の繁殖状況は一応安定していると云われていたが、最近は繁殖率低下が懸念されるようになってきている。その原因の正確な状況は把握されていない。
- ◆本種の現状 県内では、秋田駒ヶ岳や鳥海山などに生息しているが、近年では繁殖が確認されていない。それ以外の地域でも繁殖の状況がつかめていない。イヌワシの継続した動向調査が必要である。
- ◆生存に対する脅威 森林伐採や林道、ダムなど大規模開発で環境の破壊が起き、営巣放棄の原因となることも考えられる。そのような開発行為には慎重な対応が必要となる。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物、国内希少野生動物種

(西出 隆)

キツツキ目キツツキ科

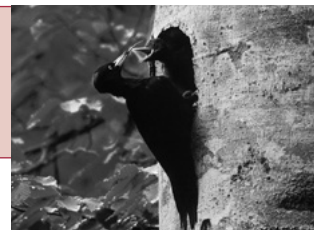
クマゲラ

Dryocopus martius (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧II類



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸の寒帯、亜寒帯、温帯北部に広く生息する。国内では北海道、青森県、岩手県、秋田県で生息が確認されている。また不確実であるが他県でも生息情報がある。
- ◆県内の分布 これまで確実に生息が確認されている地域は、白神山地、森吉山および八幡平などの原生林である。他の地域でも採餌跡やねぐら穴などは確認されているが、生息が直接確認された地域はまだない。
- ◆本種の概要 北海道では主にトドマツ林やブナ林などの原生林に生息し、本州ではブナ林で繁殖する。本州では昭和9年(1934年)に八幡平で捕獲されているが、当時は北海道から飛来したものと考えられていた。昭和50年(1975年)に森吉山において写真撮影により生息が確認され、さらに昭和53年(1978年)には本州で初めて繁殖も確認された。その後白神山地でも生息が確認された。
- ◆本種の現状 生息が確認された白神山地と森吉山は保護対策がとられているが、他の地域ではまだ調査が不十分であり、今後は速やかに十分な調査を行う必要がある。
- ◆生存に対する脅威 近年はブナ林の過度な伐採が行われなくなったが、県内では大木が林立する緩斜面のブナ林はほとんど無くなってしまい、本種の生息環境は非常に狭められている。これ以上の原生林の破壊は、生物多様性の観点からも止めなければならない。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物。森吉山の繁殖地は、国設の鳥獣保護区特別保護地区となり、伐採が規制されている。また、白神山地では自然環境保全地域、森林生態系保護地域、世界自然遺産となり、こちらも保護されているが、周辺地域で生息が確認された場合、すみやかに保護対策を講ずる必要がある。他の地域でも今後確認される可能性があり、森林の保護対策が重要となる。

(小笠原 嵩)

スズメ目モズ科

チゴモズ

Lanius tigrinus Drapiez, 1828

秋田県2016：絶滅危惧IA類
秋田県2002：絶滅危惧種II類
環境省2014：絶滅危惧IA類



- ◆ **国内外の分布** ウスリー、中国北東部、朝鮮半島で繁殖し、冬季は中国南部からマレー半島、インドネシアに渡る。国内では夏鳥として本州中部以北に渡来するが、局地的である。
- ◆ **県内の分布** 大館市、能代市、男鹿市、秋田市、仙北市、横手市など
- ◆ **本種の概要** 夏鳥として渡来し、平地から山地までの落葉広葉樹林内や針葉樹との混交林内に生息する。
- ◆ **本種の現状** 渡来地は局地的とはいえ、かつては県内各地で目撃例や繁殖例があった。しかし、個体数の減少が著しく、近年は秋田市での繁殖しか知られていない。
- ◆ **生存に対する脅威** 生息地が局地的で個体数が少なく、繁殖例が激減している。詳しい原因は不明であるが、少なくとも繁殖環境の保全が必要である。

(佐々木均)

スズメ目モズ科

アカモズ

Lanius cristatus Linnaeus, 1758

秋田県2016：絶滅危惧IA類
秋田県2002：絶滅危惧種II類
環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆ **国内外の分布** アナディール地方、カムチャッカ半島、モンゴル、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬はインド、中国南部、インドシナ半島、フィリピン、インドネシアなどに渡る。日本では北海道、本州、四国、九州などで繁殖記録がある。
- ◆ **県内の分布** 大館市、能代市、秋田市、男鹿市、森吉山など
- ◆ **本種の概要** 全長は約20cm。明るい林、林縁の低木林や低木のある草原、公園、ゴルフ場などに生息し、茂みに巣をつくる。一般の習性はモズに似ている。
- ◆ **本種の現状** 海岸砂防林や低地の疎林で局地的に目撃されていたが、1978年に当時の環境庁で行われた調査では全国的に確認地点が減少した。県内でもこの頃から確認例が減少した。
- ◆ **生存に対する脅威** 海岸砂防林で松枯れが発生して以降、本種は確認されなくなった。生息が局地的なので、生息環境の保全が必要である。

(西出 隆)

スズメ目センニュウ科

オオセツカ

Locustella pryeri (Seeböhm, 1884)

秋田県2016：絶滅危惧IA類
秋田県2002：絶滅危惧種IA類
環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆ **国内外の分布** アジア東部の中国東北部からロシアの日本海沿岸にかけて生息する。日本固有の亜種が青森県、秋田県、茨城県、千葉県の限られたヨシ原で繁殖している。
- ◆ **県内の分布** 県内で繁殖するのは大潟村のみで、男鹿市、八郎潟町、潟上市などでは、休耕田での生息が確認されている。
- ◆ **本種の概要** 全長は、約13cmのスズメより小さい鳥。1973年に大潟村の草原で発見され、周辺地域のヨシ原にも生息していた。その後、繁殖も確認されたが、一時個体数が減少した。
- ◆ **本種の現状** 2002年から植生の復元を図る事業が行われた後、徐々に姿が見られるようになった。2010年には繁殖も確認されている。その後、個体数は増加傾向にある。
- ◆ **生存に対する脅威** 繁殖環境は、ヨシなどの植物群落と群落の境界付近で下草が豊富な場所であるので、こうした環境を維持することは極めて難しい。そのため、生息環境の保全を図り、その動向を見極める必要がある。
- ◆ **現在の保護対策** 国内希少野生動植物種、国指定大潟草原鳥獣保護区大潟草原特別保護地区

(西出 隆)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

スズメ目セツカ科

セツカ

Cisticola juncidis (Rafinesque, 1810)

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ヨーロッパ南部、アフリカ、エジプト、インド、インドシナ半島、インドネシア、中国南部、フィリピン、日本などで繁殖する。日本では、本州以南で繁殖する。記録のある地域は本州、四国、九州、伊豆諸島、沖縄などである。本州北部のものは冬には暖地に移動する。
- ◆県内の分布 秋田市、男鹿市、大潟村など
- ◆本種の概要 全長は約12.5cmで、海岸や川岸の草生地、水田、山地の草原などに生息し、草の中にクモの糸で数枚の葉をつづり合わせた楕円形の巣をつくる。一夫多妻の繁殖習性をもっている。
- ◆本種の現状 1970年代の県内では極めて希れに観察されていたが、その後の環境変化の影響で、ほとんど記録されていない。
- ◆生存に対する脅威 川岸の草生地や水田などの生息地は、開発や整備の対象になりやすいので、環境保全と、生息状況の把握に努める必要がある。

(西出 隆)

カモ目カモ科

シジュウカラガン

Branta hutchinsii (Richardson, 1832)

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧IA類



- ◆国内外の分布 北アメリカに広く分布する。日本に渡来するのはアリューシャン列島と千島列島北部で繁殖したものが越冬のために渡来してくる。北海道、宮城、秋田、埼玉、千葉、新潟、石川での記録がある。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、八峰町、秋田市、男鹿市、大潟村、大仙市など
- ◆本種の概要 全長約67cmのガンで1980年代では極めて希に渡来していた。主に宮城県で越冬していて、春の渡りの時季、マガンの群れに混じって八郎潟干拓地の水田に渡来する。
- ◆本種の現状 1970年ころは八郎潟干拓地にマガンの群れに混じって、希に渡来する珍鳥であった。1985年からシジュウカラガンの復元計画が開始。1995年からは宮城県内で放鳥が始まり、確実に個体数が増えて1,000羽を超えた。シーズン中には大潟村と宮城県伊豆沼を何度も往復する群れと、県内で越冬する群れが見られるようになった。
- ◆生存に対する脅威 生息するためには、休息に適した安全な場所と妨害なく採餌ができる農地が必要となるがそのような適地は少なくなってきている。
- ◆現在の保護対策 国内希少野生動物種

(西出 隆)

カモ目カモ科

コクガン

Branta bernicla (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：絶滅危惧II類



- ◆国内外の分布 シベリアの北極海沿岸に分布し、冬季はアジアでは中国、朝鮮半島、日本などの沿岸に生息する。国内では冬季に北海道、本州、九州などで越冬している。
- ◆県内の分布 男鹿市、にかほ市など
- ◆本種の概要 冬季に渡来し、本州、九州の海岸部で越冬する冬鳥である。海岸の浅瀬や磯浜でアマモ、アオサなどを採餌する。
- ◆本種の現状 本県では象潟海岸や男鹿半島南岸に毎年渡来しているが、多いときで10数羽と個体数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 生息場所が餌となるアマモやアオサなどの繁茂している地域であるが、近年、これらが減少している。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物

(佐藤磯男)

タカ目タカ科

チュウヒ

Circus spilonotus Kaup, 1847

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 ロシア極東部やモンゴル、ウスリー地方、中国東北部などで繁殖し、東南アジアで越冬する。日本ではその多くは冬鳥として渡来するが、一部が北海道、青森、秋田、石川、三重、大阪、山口、福岡などで局所的に繁殖している。
- ◆県内の分布 能代市、秋田市、男鹿市、八郎潟町、大潟村で繁殖。
- ◆本種の概要 全長は48～58cm、翼開長113～137cmの雄より雌が大きい脚の長い中形のタカ類。両翼を浅いV字型に保って滑翔と羽ばたきを繰り返しながら、低く飛んで地上の獲物を探す。
- ◆本種の現状 県内では、広大なヨシ原が残っている地域は少なく、チュウヒの繁殖するヨシ原を保全することが重要である。
- ◆生存に対する脅威 日本で繁殖する個体は、記録にあるもので30～40つがいと推測されている。大潟村のような広域なヨシ原が残されている地域は少なく、風力発電やソーラー発電などの計画も出て来るようになった。それらの計画に対しては、チュウヒを含めた動植物の総合的な保全策を考える必要がある。
- ◆現在の保護対策 国指定大潟草原鳥獣保護区大潟草原特別保護地区

(西出 隆)

タカ目タカ科

クマタカ

Nisaetus nipalensis Hodgson, 1836

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 スリランカ、インド南部から、中国東北部、朝鮮半島、日本にかけて分布する。国内では北海道から九州にかけて生息している。
- ◆県内の分布 小坂町、大館市、北秋田市、上小阿仁村、能代市、三種町、八峰町、藤里町、秋田市、五城目町、由利本荘市、大仙市、美郷町、横手市、湯沢市、東成瀬村、森吉山、八幡平、秋田駒ヶ岳、鳥海山など
- ◆本種の概要 全長は雄約72cm、雌約80cmの大型のタカ類。キタゴヨウ、ブナ、ミズナラ、スギなどに営巣するため、原生林や二次林などの森林が必要であると考えられている。
- ◆本種の現状 県内の生息状況は、各種調査の結果から、必ずしも原生林に限られておらず、里山のスギ林に営巣する例も確認されている。
- ◆生存に対する脅威 森林の伐採や林道建設などにより、営巣放棄の危険性が高くなるので、開発計画前に十分な調査を実施する必要がある。また、繁殖期には親鳥が神経質になるため、立ち入り制限などの対策も必要となる。
- ◆現在の保護対策 国内希少野生動植物種

(西出 隆)

カモ目カモ科

オカヨシガモ

Anas strepera Linnaeus, 1758

秋田県2016：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシアおよび北アメリカの亜寒帯で繁殖し、ヨーロッパ南部、北アフリカ、インド、中国東部、北アメリカ南部で越冬する。国内では冬鳥として全国に渡来する。
- ◆県内の分布 能代市、秋田市、男鹿市、潟上市、大潟村、にかほ市、大仙市、横手市など
- ◆本種の概要 北海道東部で少数が繁殖し、本州以南には冬鳥として渡来し、河川や沼沢地、湿地などに生息する。
- ◆本種の現状 沿岸部や内陸の河川や池沼等で、主に春秋の渡りの時季に少数が観察されている。
- ◆生存に対する脅威 もともと本県を通過する個体が少なく、沿岸地域の環境改変や内陸池沼での釣り人の増加等により、安全な休憩地が少なくなっている。

(佐々木均)

カモ目カモ科

ヨシガモ

Anas falcata Georgi, 1775

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 シベリア東部、サハリンで繁殖し、朝鮮半島、中国で越冬する。国内では、北海道には夏鳥として、本州以南には冬鳥として渡来する。
- ◆県内の分布 大館市、能代市、秋田市、男鹿市、五城目町、潟上市、由利本荘市、にかほ市、大仙市、横手市、羽後町など
- ◆本種の概要 冬鳥として本州以南の湖沼、池、河川、港湾等に渡来する。北海道では夏鳥として少数が繁殖する。
- ◆本種の現状 県内各地の湖沼、池、河川に渡来するが、記録は春秋に多い。男鹿市の沿岸では比較的普通に見られる。
- ◆生存に対する脅威 もともと本県を通過する個体が少なく、沿岸地域の環境改変や内陸池沼での釣り人の増加等により、安全な休憩地が少なくなっている。

(佐々木均)

カモ目カモ科

トモエガモ

Anas formosa Georgi, 1775

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 シベリア東部で繁殖し、冬季は中国、朝鮮半島、日本などで越冬する。国内では北海道、本州、四国、九州などに生息している。
- ◆県内の分布 大館市、能代市、秋田市、大潟村、横手市など
- ◆本種の概要 冬季、湖沼や河川、湿地などに生息するが、個体数は少ない。
- ◆本種の現状 冬鳥として、大潟村などに生息しているが、個体数はきわめて少ない。
- ◆生存に対する脅威 個体数が少ない。

(佐藤磯男)

カモ目カモ科

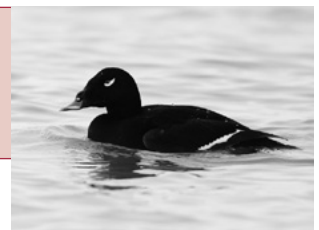
ビロードキンクロ

Melanitta fusca (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 シベリア、カムチャツカ半島、北千島等に生息し繁殖している。冬季は朝鮮半島、中国、日本などに南下する。国内では北海道以南に冬鳥として生息している。
- ◆県内の分布 八峰町、秋田市、男鹿市、にかほ市など
- ◆本種の概要 冬鳥として渡来し、港湾や外洋に面した海岸近くの海上に生息している。
- ◆本種の現状 県内では冬季に八峰町や秋田市、男鹿市、にかほ市の海岸で少数観察されている。
- ◆生存に対する脅威 個体数が少ない。

(佐藤磯男)

ツル目クイナ科

ヒクイナ

Porzana fusca (Linnaeus, 1766)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 インドから東南アジア、中国北部・東部、朝鮮、台湾にかけて分布している。全国で確認されているが北になるほど少ない。
- ◆県内の分布 大館市、男鹿市、潟上市、由利本荘市、大仙市、仙北市など
- ◆本種の概要 水田や湿地または水辺に近い草地に生息する。草むらを潜行し姿を見せることはまれで、特有の鳴き声により生息が確認されることが多い。
- ◆本種の現状 以前は普通に見られたというが、近年の目撃例はきわめて少ない。
- ◆生存に対する脅威 耕地整理に伴う水田の排水路やあぜのコンクリート化及び湿地の開発などにより生息地が減少したと考えられる。

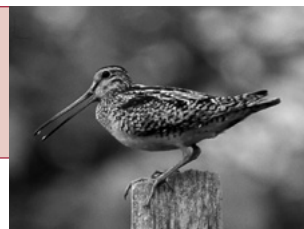
(佐藤公生)

チドリ目シギ科

オオジシギ

Gallinago hardwickii (Gray, 1831)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 サハリン南部、ロシア極東部、千島列島南部で繁殖し、オーストラリア東部で越冬する。国内では北海道、本州、九州で繁殖する。
- ◆県内の分布 大館市、北秋田市、男鹿市、大潟村、にかほ市など
- ◆本種の概要 北海道や東北地方では平地の草原や農耕地、湿地などで繁殖し、本州中部以南では高原の草原で繁殖する。渡りの時季は、他のシギ類同様に湿地や水田などで見られる。
- ◆本種の現状 繁殖期には独特のさえざりと飛翔から生息が確認され、巣の確認はほとんどないものの繁殖していることは明らかである。大潟村ではかつて街路樹の下草部分で繁殖を確認したことがあるが、主な生息地であった総合中心地北部の開発、防風林の枯れ死や下草刈りなどにより生息数が激減した。また仁賀保高原にも生息していたが近年はほとんど姿を見ない。寒風山においては生息地である大火口の草原に対する灌木の除去などの手入れの後には数を減らした。県北部では牧場、ゴルフ場、空港周辺の草地に少数生息している。
- ◆生存に対する脅威 生息地である平地および山麓部の草原は、植生や土地利用の変化などにより生息環境が悪化している。

(佐藤公生)

チドリ目シギ科

ツルシギ

Tringa erythropus (Pallas, 1764)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：—
環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸のツンドラ地帯で繁殖し、アフリカ、中国南部沿岸から東南アジアおよびインドなどで越冬する。わが国に渡来するものは、シベリア東北部で繁殖する個体群とみられる。
- ◆県内の分布 能代市、八郎潟干拓地、横手市など
- ◆本種の概要 春と秋の渡りの時季に我が国の干潟や河口、水田などに立ち寄る旅鳥であるが、秋の飛来数は極めて少ない。太平洋岸の干潟には大群が飛来していたが、近年極端に個体数が減少した。
- ◆本種の現状 春季は大潟村西部や八郎潟西部承水路に3月中旬から飛来し5月中旬まで見られていたが、近年は著しく数を減らした。秋季の渡りは全国的にも数が少ない。
- ◆生存に対する脅威 個体数減少の原因は不明である。

(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

タカ目タカ科

オジロワシ

Haliaeetus albicilla (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 世界的には、北半球全域に分布している。日本では、北海道で少数が繁殖しているが、本州以南では冬鳥である。
- ◆県内の分布 大館市、能代市、三種町、男鹿市、八郎潟町、潟上市、大潟村、由利本荘市、横手市、米代川流域、雄物川流域、八郎湖、玉川ダムなど
- ◆本種の概要 全長は雄約80cm、雌約95cm、翼開長180～230cm。成鳥は褐色の体で尾が白い大形のワシ類。
- ◆本種の現状 冬鳥として渡来する。県内の主な生息地は八郎潟干拓地と周辺の水田である。また大きな河川沿いに上流に移動し内陸湖沼やダム湖などでも観察されている。厳冬期になると数が少なくなるが、八郎湖の氷が融解し始めると数が増え、氷上にオオワシと共に集まり、休息や採餌する様子が見られる。
- ◆生存に対する脅威 繁殖地での環境悪化が懸念されていることから、越冬地でも保護と環境保全の方策を探る必要がある。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物、国内希少野生動植物種

(西出 隆)

タカ目タカ科

オオワシ

Haliaeetus pelagicus (Pallas, 1811)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 カムチャッカ半島、サハリン北部、朝鮮半島北部で繁殖、冬は南下し、ウスリー地方、日本、朝鮮半島南部に渡る。日本には、主に冬鳥として北海道、本州北部に渡来する。まれに、四国、九州、伊豆諸島、沖縄にも飛来している。
- ◆県内の分布 三種町、秋田市、八郎潟町、潟上市、大潟村、米代川流域、雄物川流域、八郎湖など
- ◆本種の概要 全長は雄約88cm、雌約102cm、翼開長220～245cmの黄色くて大きな嘴の大形のワシ類。冬には海岸、湖沼、大きな川などに生息し、近くの林や地上、氷上、水田の畦などに止まっている。
- ◆本種の現状 県内では八郎潟干拓地やその周辺の水田で、マガンの群れの近くで休息するのが観察される。厳冬期になると一時的に数が少なくなるが、雪融けとともに数が増えはじめ、八郎湖のカモ類の近くの氷上にオジロワシと並んで降りていることが多いが、オジロワシよりも数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 繁殖地での環境悪化が懸念されていることから、越冬地でも保護と環境保全の方策を探る必要がある。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物、国内希少野生動植物種

(西出 隆)

タカ目タカ科

ツミ

Accipiter gularis (Temminck & Schlegel, 1844)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 モンゴル北部からアムール、ウスリー、中国東部、朝鮮半島、サハリンなどで繁殖し、中国南部、東南アジアで越冬する。国内では北海道から琉球諸島まで夏鳥または留鳥として生息する。
- ◆県内の分布 県内一円に広く分布する。
- ◆本種の概要 国内最小クラスのタカ類であり、平地から山地の林で繁殖する。近年都市部での繁殖例が増えているといわれているが、本県での状況は不明である。
- ◆本種の現状 市街地から低山帯にかけて、年間を通じて記録されているものの、個体数は少ない。東成瀬村では繁殖が確認されている。秋の渡りの季節には南下する個体が少なからず確認されている。
- ◆生存に対する脅威 繁殖期の生態についてはほとんど不明であり、生存に対する脅威も良く分かっていない。今後本種の動向を注意したい。

(佐々木均)

タカ目タカ科

ハイタカ

Accipiter nisus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 ヨーロッパ、中近東、シベリア、カムチャツカ、中国東部、ヒマラヤなどに分布する。国内では四国以北では留鳥とされ、九州以南には冬鳥として渡来する。
- ◆県内の分布 県内一円に広く分布する。
- ◆本種の概要 本州中部ではやや標高の高い森林で繁殖するとされている。冬季には山地の林、農耕地、河川敷、住宅地などで見られる。
- ◆本種の現状 能代市ニツ井町のカラマツ林で単立ち雛の観察記録があり、その他の地域でも山地で繁殖していると考えられるが、情報は少ない。冬季には農耕地や住宅地で小鳥を狙う姿が目撃される機会がやや多くなる。また、秋から初冬にかけて渡り個体が観察される。
- ◆生存に対する脅威 一時、農薬の影響により卵殻が薄くなって繁殖成功率が低下したといわれているが、その後、個体数は回復しつつある。

(佐々木均)

キツキ目キツキ科

アリスイ

Jynx torquilla Linnaeus, 1758

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：絶滅危惧種IB類
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシアの温帯、亜寒帯に広く分布する。冬季はインド、アフリカ北部、東南アジアにて越冬する。国内では北海道と本州北部で繁殖し、冬鳥として本州以南の各地へ漂行する。
- ◆県内の分布 小坂町、大館市、秋田市、男鹿市、潟上市、大潟村、横手市など
- ◆本種の概要 樹洞や木の割れ目などの隙間に営巣する。良好な樹洞はコムクドリに奪われ、倒木の割れ目などに営巣することがしばしばである。巣箱をよく利用する。
- ◆本種の現状 県内では旅鳥として記録されていたが、1990年に潟上市で初の繁殖が記録された。1995年以降は大潟村のイタリアポプラの防風林内の枯れ木でかなりの数が繁殖を続けていたが、枯れ木が整備された後は村内や近くの男鹿市内の林地に分散して繁殖している。
- ◆生存に対する脅威 枯木の撤去、下草刈りなどによりアリスイの生息環境が減少した。営巣樹洞をコムクドリに奪われるケースが多い。
- ◆現在の保護対策 研究用巣箱の設置がアリスイの営巣に役立っていると思われる。
- ◆特記事項 枯れ木や地上のアリを食べるキツキの1種であるが、自ら樹木に穿孔することはなく巣穴の修復程度しか行わない。北海道で繁殖するとされてきたが、近年は北東北3県でも繁殖が知られている。

(佐藤公生)

ハヤブサ目ハヤブサ科

チゴハヤブサ

Falco subbuteo Linnaeus, 1758

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 アフリカ、ユーラシア大陸北部で広く繁殖する。国内では北海道と東北地方、長野県で繁殖する。
- ◆県内の分布 鹿角市、小坂町、大館市、北秋田市、能代市、秋田市、五城目町、大潟村、大仙市、横手市など
- ◆本種の概要 全国的には主に北日本で繁殖している個体数の少ない種である。長野県でも繁殖が確認された。
- ◆本種の現状 県内では主に内陸部で少数が局地的に繁殖している。平地の社寺林や屋敷林内の針葉樹、鉄塔などにつくられたカラスなどの古巣を再利用する。
- ◆生存に対する脅威 社寺林や屋敷林で繁殖し、殆どが毎年同じ巣を利用するが立木の伐採や枯死など、営巣状態が不安定である。小鳥やコウモリ、飛翔する大型昆虫を捕食しており、餌動物の減少による生息及び繁殖への影響も懸念される。

(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ハヤブサ目ハヤブサ科

ハヤブサ

Falco peregrinus Tunstall, 1771

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 極地を除くほぼ世界中に生息する。国内では切り立った岩壁があれば、海岸でも山地でも繁殖する。
- ◆県内の分布 県内各地で広く繁殖する。
- ◆本種の概要 全国的には主に海岸の岩壁で繁殖している。近年、都会のビルに営巣した例がいくつか報告されている。鳥類を捕食し、レース鳩の通る岬やカモ類やシギ類の渡来地に頻りに飛来する。
- ◆本種の現状 食物網の上位に位置するため数はもともと多くない。建造物や岩壁が好適な営巣地であるため、そのような環境は限られている。
- ◆生存に対する脅威 観光開発、道路建設、岩石採取、写真撮影、密猟など。
- ◆現在の保護対策 国内希少野生動物種

(佐藤公生)

スズメ目サンショウクイ科

サンショウクイ

Pericrocotus divaricatus (Raffles, 1822)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 沿海州と日本で繁殖し、東南アジアで越冬する。日本国内では、本州、四国、九州、南西諸島などに夏鳥として渡来し繁殖する。樹上で営巣する。
- ◆県内の分布 大館市、藤里町、秋田市、男鹿市、潟上市、大湯村、由利本荘市、大仙市、湯沢市、森吉山、鳥海山、栗駒山など
- ◆本種の概要 全長は約20cmで、体は細く尾羽は長めである。山麓地帯や山地の雑木林、広葉樹林で繁殖し、樹冠部で活動する。巣は10m以上の高い樹上につくり、繁殖期の始めころを除いては、下層部に降りてこない。
- ◆本種の現状 公園や社寺林、村落の林でも繁殖していたが、近年確認されることが少なくなっている。
- ◆生存に対する脅威 森林伐採によって生息環境が消失する危険がある。

(西出 隆)

スズメ目ツバメ科

コシアカツバメ

Hirundo daurica Laxmann, 1769

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 夏季にヨーロッパ南部、中央アジア、ウズリーなどで繁殖し、冬季は中国南部、ビルマ周辺まで南下する。国内では夏鳥として本州、四国、九州に生息しているが、一部、越冬している。
- ◆県内の分布 八峰町、秋田市、男鹿市、由利本荘市、にかほ市など
- ◆本種の概要 夏鳥として渡来し、平地の家屋や神社、寺院などの軒や天井、橋げたの下などに営巣する。小集団で隣り合って営巣することが多い。
- ◆本種の現状 本県では、積雪量の少ない海岸部に夏鳥として渡来し、民家やビルディングなどの軒下に営巣している。近年、生息数が減少している。
- ◆生存に対する脅威 かつて、繁殖地ではスズメに巣を奪われることがたびたび目撃された。

(佐藤磯男)

スズメ目アトリ科

イスカ

Loxia curvirostra Linnaeus, 1758

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸、北アメリカと広く分布するほかアフリカ北西部にも生息している。日本では主に冬鳥として全国に渡来するが、その個体数は多くない。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、秋田市、男鹿市、由利本荘市、横手市など
- ◆本種の概要 全長は約16.5cm。上下のくちばしの先が曲がり、左右どちらかにくちがって、マツなどの種子を採餌する。日本では、北海道と東北、中部地方のマツ林で繁殖が確認されている。冬も含め一年中繁殖は可能で、3月中旬に巢立ちヒナを伴った群れが確認されたことがある。
- ◆本種の現状 県内では冬季に群れで渡来するが、年によって、餌となる針葉樹の実のできぐあいで、渡来数の変動が大きい。
- ◆生存に対する脅威 森林伐採やマツ枯れによる生息環境消失の危険がおきている。

(西出 隆)

カモ目カモ科

ヒシクイ

Anser fabalis (Latham, 1787)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 ロシア極東のアナディル、チュコト半島のツンドラ地帯で繁殖し、冬は中国、朝鮮半島、日本などで越冬する。日本で越冬するヒシクイは、主にカムチャッカ半島西岸沿いの平原で繁殖した群れである。
- ◆県内の分布 北秋田市、能代市、三種町、八峰町、藤里町、秋田市、男鹿市、八郎潟町、井川町、大潟村、由利本荘市、横手市など
- ◆本種の概要 全長は雄約83cmでマガンよりも大きい。冬鳥として北海道以南に渡来し、湖沼、河川、水田などで餌をあさっている。雌雄2羽、若鳥数羽を伴った群れでいることが多く、マガンとともに群でいることもある。
- ◆本種の現状 マガンと同じく八郎潟干拓地周辺に冬鳥として渡来する。マガンの群れとともに集団で生活し、小友沼をめぐらし、大潟村の水田との往復を繰り返す。積雪で採餌が出来なくなると、宮城県や新潟県などに南下するが、とどまって越冬する群れもいる。3月になると越冬地から大群で戻ってきて、3月下旬から4月になると北方へ飛び去っていく。
- ◆生存に対する脅威 少しずつ増加傾向にあるものの、餌場として利用している農耕地の改変による環境の変化が心配される。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物

(西出 隆)

カモ目カモ科

マガン

Anser albifrons (Scopoli, 1769)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸と北アメリカの北極海沿岸およびグリーンランド西海岸のツンドラ地帯で繁殖し、冬季に中国の東海岸、黄河下流域、長江中下流域、朝鮮半島、日本などに渡来して越冬する。
- ◆県内の分布 大館市、北秋田市、能代市、三種町、秋田市、男鹿市、五城目町、八郎潟町、井川町、大潟村、由利本荘市、大仙市、横手市など
- ◆本種の概要 全長は約72cmで冬鳥として渡来する。生息地は局地的で、八郎潟干拓地、宮城県伊豆沼周辺などで越冬する。北海道西部の湖沼にも渡りの時季に大群がみられる。多くは、広い水田や湖沼などで群れで採餌している。ヒシクイとともに大群の場合もある。
- ◆本種の現状 10月になるとマガンの渡来が始まり、その数が日に日に増え小友沼を畔に、八郎潟干拓地周辺との往復が始まる。積雪のため採餌が出来なくなると宮城県の伊豆沼に南下し越冬する。3月には再び越冬地から八郎潟干拓地周辺の水田に戻って大群となり行動範囲が米代川流域に拡大する。
- ◆生存に対する脅威 個体数は維持されているため急激な変化はないと思われるが、採餌場所となる農耕地の環境の変化が心配される。
- ◆現在の保護対策 国指定天然記念物

(西出 隆)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カモ目カモ科

クロガモ

Melanitta americana (Swainson, 1832)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸北部、北アメリカ北部などで繁殖し、冬季は中国沿岸や北アメリカ中部まで南下する。国内では、冬季に渡来し越冬する。
- ◆県内の分布 三種町、八峰町、男鹿市、潟上市、大潟村、由利本荘市、にかほ市など
- ◆本種の概要 北海道では繁殖しているが、本州以南では冬鳥である。潜水して、貝や甲殻類を捕食する。
- ◆本種の現状 県内では冬季に海岸部と八郎湖などで生息が確認されている。
- ◆生存に対する脅威 潜水性カモ類で漁網による捕獲が心配される。急激な変化はないと思われるが、生息場所の環境変化を受けやすいことが考えられる。

(佐藤磯男)

カイツブリ目カイツブリ科

カイツブリ

Tachybaptus ruficollis (Pallas, 1764)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 アフリカ、イギリス、ユーラシア大陸の中緯度以南、日本、インドネシア、フィリピン、ニューギニア、ソロモン諸島などに広く生息する。多くは留鳥であるが北に生息する個体は冬季南へ移動する。
- ◆県内の分布 八郎湖、各地の溜池、河川など
- ◆本種の概要 水草の繁茂する静水に生息し、潜水して小魚などを食べ、水草の間に浮巣を作ることで知られている。寒冷地では、冬季に大部分が南へ移動するが、不凍水域に少数残っているものもいる。
- ◆本種の現状 八郎湖は本種をはじめ水鳥の一大生息地であったが、外来魚であるブラックバスの放流以後、営巣地に釣り人が立ち入って営巣が妨害されたり、幼雛が外来魚に食べられるなど、ほかの水鳥と共に急速に数が減った。外来魚が放流されなかった小さな溜池などでは安定して生息している。
- ◆生存に対する脅威 船に乗った釣り人が巣の近くまで接近するため繁殖が妨害される。また、外来魚によりカイツブリの餌となる小魚の捕食、大きな外来魚による雛の捕食などもある。護岸整備により水草が消失し、生息出来なくなった溜池も多い。
- ◆現在の保護対策 ボランティアによる外来魚の駆除、釣魚の再放流禁止など外来魚への対策が間接的な保護活動になっているが、カイツブリに対する直接的な保護対策はない。

(佐藤公生)

ハト目ハト科

アオバト

Treron sieboldii (Temminck, 1835)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：情報不足種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 インドシナ北部、中国南部、台湾、日本に分布する。国内では九州から北海道まで分布し、北海道と北日本では夏鳥であり、南日本では留鳥である。
- ◆県内の分布 大館市、能代市、藤里町、秋田市、男鹿市、潟上市、由利本荘市、大仙市、仙北市、横手市など
- ◆本種の概要 夏鳥として混交林や広葉樹林に生息し樹上で木の実を食べる。樹上にいる時は保護色のため姿を見つけにくいのが特有のさえずりで存在が知れる。群れて海水や温泉水を飲みに来る海岸や温泉が幾つか知られている。
- ◆本種の現状 県内の山間部や公園などでは、春から初夏にかけてさえずりが聞かれるが、繁殖地や繁殖の様子は知られていない。潟上市天王から男鹿市船越にかけての海岸に現れる群れは、多い時で200羽を超えるが、どこから飛来するかなど全く知られていない。
- ◆生存に対する脅威 混交林、広葉樹林などの伐採。海岸への飛翔コース上にかかる風力発電設備の建設など。

(佐藤公生)

カツオドリ目ウ科

ウミウ

Phalacrocorax capillatus (Temminck & Schlegel, 1849)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：—
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 沿海州、サハリン、日本など、東アジアに分布する。日本では、北海道、本州、九州の海岸や島で繁殖し、冬季に全国の海岸に生息する。
- ◆県内の分布 夏季に象潟海岸で少数が生息している。冬季は本県の海岸部や八郎湖などで越冬している。
- ◆本種の概要 島や海岸の断崖に集団で営巣することが多い。冬季は外洋に面した荒波が打ち寄せる岩礁地帯や港湾内に生息し、潜水して小魚を捕獲する。
- ◆本種の現状 大須郷のウミウ繁殖地で繁殖の記録がある。冬季に沿岸部の港湾や岩礁地域に小群を形成して越冬している。
- ◆生存に対する脅威 個体数は大きく変化していないが、年々飛来数が減少している。どのような原因が脅威となっているかはっきりしないため、注意深く観察していく必要がある。
- ◆現在の保護対策 大須郷のウミウ繁殖地（県指定天然記念物）

(佐藤磯男)

ペリカン目サギ科

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis (Gmelin, 1789)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 南アジアから東南アジア、中国南東部、朝鮮半島、日本に分布し、冬季には南に渡る。日本では、主に北海道、本州、四国、九州および周辺の島に渡来して繁殖する。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、秋田市、八郎潟町、潟上市、大潟村、大仙市、美郷町、横手市、米代川流域、八郎湖など
- ◆本種の概要 全長は約36cm。夏鳥で水辺のヨシ原やマコモ、ヒメガマなど丈の高い草原に生息し繁殖する。数個の巣が集まってコロニーを形成することもある。
- ◆本種の現状 県内では、ヨシ原など丈の高い湿性草原や水田に5月下旬に渡来し営巣する。8月中旬には雛は巣を離れて茂みの中に潜んでいるので、秋になると、いつのまにか姿を消して、渡去する様子がよく分からない。
- ◆生存に対する脅威 生息する場所が水辺の草原なので、人為的な開発や整備による改変の影響を受けやすい。

(西出 隆)

ペリカン目サギ科

ササゴイ

Butorides striata (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 アフリカ、マダガスカル、南北アメリカ、ユーラシア大陸南部および東部、日本、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、オーストラリア、ソロモン諸島などに広く分布する。
- ◆県内の分布 県内一円に少数分布し、つがいで生息する。
- ◆本種の概要 夏鳥として渡来し、水田、湖沼、河原などの水辺で採餌し、雑木林や針葉樹に営巣する。
- ◆本種の現状 男鹿市船越では数つがいで繁殖した例があったが、巣は水辺に近かったり、離れていたりさまざまである。営巣木はスギが多いが、コウヤマキの例もある。
- ◆生存に対する脅威 営巣木の伐採や枝打ち、周辺環境の改変などが繁殖の妨げになる。目立たない鳥であり、生息が気づかれにくいことも災いしていると考えられる。

(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ヨタカ目ヨタカ科

ヨタカ

Caprimulgus indicus Latham, 1790

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：—
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 インド、ネパール、東南アジア、ロシア極東南部、朝鮮半島、中国東部、マレー半島などに分布し、北方のものは冬季に南方へ渡る。国内では、夏鳥として九州以北に渡来する。
- ◆県内の分布 三種町、秋田市、男鹿市、大潟村、大仙市、仙北市、横手市、湯沢市など
- ◆本種の概要 夏鳥として山地の林や森林内の伐採地、草原などに渡来し、地上に産卵して繁殖する。日中は樹木の横枝等で休み、夜間に飛翔しながら昆虫を捕食する。
- ◆本種の現状 かつては、県内各地で普通に夕暮れから鳴き声を確認できたが、全国的に個体数が激減している。秋田市仁別や仙北市などで繁殖の観察例がある。秋田市では空港や娯楽施設の照明に集まる昆虫を捕食する行動が確認されている。
- ◆生存に対する脅威 宅地造成等による森林伐採などが考えられるが、環境変化があまりない地域でも減少しており、どのような原因が脅威となっているかははっきりしない。

(佐々木均)

チドリ目チドリ科

ケリ

Vanellus cinereus (Blyth, 1842)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：—
環境省2014：情報不足



- ◆国内外の分布 内モンゴル、中国東北部、日本などで繁殖。冬は中国南部、東南アジア、フィリピンなどに渡って越冬する。日本では北海道から南西諸島まで記録がある。多くは留鳥だが、積雪地方のものは冬季に暖地へ移動する。繁殖が確認されたのは本州のみである。
- ◆県内の分布 大館市、北秋田市、能代市、三種町、男鹿市、八郎潟町、潟上市、大潟村、大仙市、横手市など
- ◆本種の概要 全長は約35.5cmで雌雄は夏冬とも同色のチドリ類。草原や川原など乾燥した場所に営巣する。水田のやや高い所や畦に巣材を積み上げて巣作りをした例もある。4月～5月に4卵を産み27～30日で孵化する。
- ◆本種の現状 県内全域に記録があるが、その分布は局地的である。
- ◆生存に対する脅威 巣を水田や畦などの地面に作るため、農作業の影響で繁殖を放棄することがある。

(西出 隆)

チドリ目チドリ科

イカルチドリ

Charadrius placidus Gray & Gray, 1863

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ウスリー地方から、モンゴル、中国北部・東北部、朝鮮半島で繁殖し、中国南部からインド北部で越冬する。国内では北海道、本州、四国、九州で繁殖する。南日本では留鳥、北日本では夏鳥、南西諸島では冬鳥である。
- ◆県内の分布 河川の中流から上流域に生息する。冬季、多くは南へ渡るが、河川下流部などでは越冬個体も見られる。
- ◆本種の概要 河川中流から上流の小石が堆積した川原や中州で繁殖する。コチドリに似るが、体はムクドリほどの大きさで繁殖期には夜間もよく響く声で鳴きながら飛ぶ。川原の石に溶け込んだ色彩を持ち、身を伏せて動かずにいると存在が非常に分かり難くなる。
- ◆本種の現状 個体数は多くないが米代川、雄物川、子吉川水系では安定して生息していると思われる。
- ◆生存に対する脅威 洪水による巣や卵の流失、釣り人の立ち入りなど。水位が安定し草が生えると生息に不適となるため、上流でのダムの建設なども生息地の減少につながると考えられる。また、直接的には生息地がダムに沈むことが危惧される。

(佐藤公生)

チドリ目チドリ科

コチドリ

Charadrius dubius Scopoli, 1786

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 夏鳥としてイギリス、ユーラシア大陸、日本に分布する。インド、東南アジア、インドネシア、パプアニューギニア、ソロモン諸島では留鳥。赤道以北のアフリカでは冬鳥である。
- ◆県内の分布 県内一円。砂礫地を好み、川原や港湾などの裸地、造成中の裸地などに夏鳥として渡来する。
- ◆本種の概要 4月初めに渡来し、小石や砂の上にわずかな枯草などを敷いてその上に3から4個の卵を産む。特有の鳴き声で所在が知れるが、外敵が近づくと親鳥は擬傷をして敵の目を引き付け、巣や雛から天敵を遠ざける。
- ◆本種の現状 草の生えていない川原や造成中の宅地、駐車場などの裸地に生息する。渡りの時期は海岸や休耕田などの湿地に渡来する。
- ◆生存に対する脅威 砂礫地や裸地の減少。また造成地などでは工事による繁殖中断などが起きている。川原では人や車両の立ち入り、植物の繁茂などが生息の妨げとなる。カラスによる卵の食害もある。

(佐藤公生)

チドリ目チドリ科

シロチドリ

Charadrius alexandrinus Linnaeus, 1758

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸南部、アフリカ、ジャワ島、オーストラリア、南北アメリカ大陸の主に沿岸部で繁殖する。日本では、北九州以北で繁殖し、その多くは留鳥である。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、八峰町、秋田市、男鹿市、潟上市、大潟村、由利本荘市、にかほ市など
- ◆本種の概要 全長約17.5cmのチドリ類で、海岸の砂浜、河口の中州、埋立地や砂地、大きな川の下流域などの川原に生息し繁殖する。中流域でも生息することもあるが多くはない。冬季には群れとなって行動することがある。
- ◆本種の現状 本県も含め全国的な傾向として個体数が減少している。車輛による営巣地の攪乱、人やペットの接近による繁殖の失敗などもその一因となっている。
- ◆生存に対する脅威 繁殖場所の減少。繁殖するための条件や優先的に保全すべき場所を抽出するための調査を行って、効果的な保全策を考える必要がある。

(西出 隆)

チドリ目シギ科

ヤマシギ

Scolopax rusticola Linnaeus, 1758

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸中緯度地域で繁殖し、冬季は南ヨーロッパから中東、パキスタン北部からインドシナ半島にかけて越冬する。国内では北海道から本州中部、伊豆諸島で繁殖し、西日本、九州、沖縄で越冬する。
- ◆県内の分布 大館市、秋田市、横手市など
- ◆本種の概要 山地の広葉樹林の地上で繁殖する夏鳥である。
- ◆本種の現状 夏は山地の湿地に生息し繁殖するとみられるが、営巣の確認は無い。平地では春秋の移動期にしばしば人家の庭や都市公園などに現れる。
- ◆生存に対する脅威 広葉樹林の保全など、繁殖環境を保全する必要がある。

(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

チドリ目シギ科

タシギ

Gallinago gallinago (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



◆**国内外の分布** ユーラシア大陸の北半分の大部分、北アメリカ大陸の北半分などで繁殖し、冬はヨーロッパ南部、アフリカ、インド、マレー半島、フィリピンなどに渡る。日本には旅鳥または冬鳥として渡来する。記録があるのは北海道、本州、四国、九州などその範囲は広い。

◆**県内の分布** 県内一円に分布する。

◆**本種の概要** 全長は約27cmで嘴は真っ直ぐで長い。雌雄同色で、尾は短い。県内には旅鳥として渡来し、水田、川岸、休耕田、内陸の湿地などに渡来する。活動は主に夕方からであるが、水田など安全な場所では、昼でも餌をとっている。

◆**本種の現状** 県内では、渡りの時季に通過するほか、水田の水際の裸地や草地に生息する。冬には大部分が南下をするが、少数は残って越冬する。

◆**生存に対する脅威** 餌場に適した湿地や水田の減少。

(西出 隆)

チドリ目シギ科

ハウロクシギ

Numenius madagascariensis (Linnaeus, 1766)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** カムチャッカ半島と沿海州の限られた地域でのみ繁殖しオーストラリア周辺で越冬する。日本では主に渡りの時季に通過する旅鳥として広い干潟、入り江や海岸近くの水田に渡来するが、越冬する個体もいる。

◆**県内の分布** 秋田市、男鹿市、八郎潟干拓地周辺、由利本荘市など

◆**本種の概要** 全長は約62cm。長くて下に湾曲した嘴を持ち足と首の長い大形のシギ類。渡りの途中に立ちよる旅鳥で、海岸や近くの水田などに不定期に飛来する。

◆**本種の現状** 県内には、春季と秋季に飛来する。10羽ほどの群れのこともあるが、ほとんどは単独でのことが多い。

◆**生存に対する脅威** 世界では2万羽ほどしか生息していないといわれ、最近では減少傾向にあると考えられている。繁殖地がウスリー地方やカムチャッカ半島に限られているが、その状況が十分に分かっておらず、不明。

(西出 隆)

チドリ目シギ科

アオアシシギ

Tringa nebularia (Gunnerus, 1767)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



◆**国内外の分布** イギリス、ロシア平原、ウスリー地方、カムチャッカ半島などで繁殖し、冬は南に移動しオーストラリアまで渡るものもある。日本では、春秋に通過する旅鳥で、移動途中に海岸や河口の三角州、入り江、内陸の水田や溜池などでも見られる。

◆**県内の分布** 大館市、北秋田市、能代市、秋田市、男鹿市、八郎潟町、潟上市、大潟村、大仙市、横手市など

◆**本種の概要** 全長は約30cmのややそった嘴と長い足の中形のシギ類で雌雄同色。本州では旅鳥として飛来する。

◆**本種の現状** 県内では、水張り休耕田や溜池の岸辺などで見られるが、飛来数が年々減少している。

◆**生存に対する脅威** 餌場に適した湿地や水張り休耕田の減少。

(西出 隆)

チドリ目シギ科

キョウジョシギ

Arenaria interpres (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆**国内外の分布** ユーラシア大陸、北アメリカ大陸の北極圏の沿岸部の海岸に近いツンドラ地帯の地上で繁殖し、冬には赤道周辺に渡って過ごす。日本では旅鳥として渡来する。春は4月～6月、秋には8月～10月に砂浜や砂利の多い海岸、河口の砂泥地、岩礁地帯などで単独から10羽ほどの群れで見られることが多い。
- ◆**県内の分布** 男鹿市、潟上市、由利本荘市、にかほ市、米代川河口など
- ◆**本種の概要** 全長は約21～26cmで嘴が短くやや上に反り、足も短い小形のシギ類。岩の多い海岸や貝類、海藻類におおわれた砂地の海岸、海に近い川の中州や水田でも見られる。石や貝、海藻などを嘴で押しつけて採餌している。
- ◆**本種の現状** 県内では、春と秋に渡りの通過個体が旅鳥として飛来する。春には、田植え前の水田にムナグロなどの群れに10羽ほど混じっていることが多い。秋は単独か数羽で飛来し、渚近くの砂浜で見られるが、群れとなることはない。
- ◆**生存に対する脅威** 海岸の整備、改修、埋立てなどによる生息環境消失の危険性が考えられる。

(西出 隆)

タカ目ミサゴ科

ミサゴ

Pandion haliaetus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆**国内外の分布** 北半球とオーストラリアの海岸、湖や河川に分布する。国内では全国に分布するが、北日本では冬季に個体数が減少する。
- ◆**県内の分布** 県内では局地的に繁殖している。海岸の崖の上や防風林、山地の稜線の大木の樹頂に営巣する。
- ◆**本種の概要** 魚類を餌とする猛禽類であり、水辺と深い繋がりがある。近年では内陸の湖沼やダム湖等にも営巣している。
- ◆**本種の現状** 過去には本種を見ることが少なかった。個体数は少ないものの、近年は増加傾向にある。
- ◆**生存に対する脅威** 餌となる魚の減少と営巣木周辺の伐採や各種開発による改変。

(佐藤磯男)

タカ目タカ科

ハチクマ

Pernis ptilorhynchus (Temminck, 1821)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆**国内外の分布** ヨーロッパからバイカル湖周辺、日本にかけてのユーラシア大陸の中緯度地域で繁殖し、アフリカ、南アジアから東南アジアで越冬する。日本には、夏季に北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する。
- ◆**県内の分布** 県内一円の山林に生息する。小坂町、能代市、男鹿市、にかほ市、東成瀬村、鳥海山麓などでは繁殖が確認されている。
- ◆**本種の概要** 全長は雄が約57cm、雌は約60.5cm、翼開長121～135cmでトビより少し小さい。低山や丘陵のマツ林、二次林、広葉樹林などの樹上に営巣する。主にハチ類の幼虫や蛹を好み、両生類、爬虫類、鳥類も捕食する。
- ◆**本種の現状** 県内では、春の渡来が遅いため、繁殖も遅れて始まるので巣立ちが8月下旬から9月上旬となる。秋季には県内各地で南下する渡り個体が多数観察される。
- ◆**生存に対する脅威** 森林伐採や営巣木の枯死などによる生息環境消失の危険性。

(西出 隆)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

タカ目タカ科

オオタカ

Accipiter gentilis (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 ヨーロッパの大部分、アジアの中北部、チベット高原、日本、北アメリカ大陸などで繁殖し、冬はやや南へ移動するものもある。日本では北海道、本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島、沖縄で繁殖記録がある。
- ◆県内の分布 県内一円に分布する。
- ◆本種の概要 全長は雄が約50cm、雌は約56cm、翼開長105～130cmの長い尾と巾の広い翼をもつタカ類。繁殖期には、山地の林に生息し、秋冬には農耕地や市街地にも出現する。
- ◆本種の現状 全国的には個体数が少ないタカといわれているが、県内では山林、砂防林、農耕地などが多く残っていることから個体数の変化は少ないと考えられている。
- ◆生存に対する脅威 海岸沿いの砂防林や里山のマツ林などで松枯れの発生が増え、営巣木が減少している。

(西出 隆)

タカ目タカ科

サシバ

Butastur indicus (Gmelin, 1788)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 ロシア沿海地方、中国北東部、朝鮮などで繁殖し、中国南部、東南アジアなどで越冬する。国内では本州、四国、九州に夏鳥として渡来し、南西諸島では一部が越冬する。
- ◆県内の分布 県内一円に分布する。
- ◆本種の概要 夏鳥として、水田と里山が一体となった場所に渡来し、カエルなどの両生類やヘビなどは虫類を餌とし、昆虫も捕食する。水田のそばの林内に営巣する。
- ◆本種の現状 全県的に渡来が確認されている。横手盆地から由利本荘市では比較的個体数が多く繁殖が確認されており、三種町でも繁殖記録がある。秋季には県内各地で南下する渡り個体が観察される。
- ◆生存に対する脅威 ほ場整備で用水路のコンクリート化や耕作放棄による水田や里山環境の改変により、餌となる両生類や虫類が減少して、繁殖に悪影響を及ぼしている。

(佐々木均)

フクロウ目フクロウ科

オオコノハズク

Otus lempiji (Horsfield, 1821)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 中国、台湾、朝鮮、東南アジアに広く分布する。国内では留鳥として全国的に分布するが、北日本のものは冬季、暖地に南下するものもある。
- ◆県内の分布 情報が極めて少ない種の一つである。由利本荘市百宅集落付近で繁殖例が知られているほか、能代市二ツ井町では巣箱に営巣した例がある。
- ◆本種の概要 コノハズクより一回りほど大きく、足指が羽毛で被われている。大木の樹洞に営巣し巣箱も利用する。全国的にも平地林や社寺林などの大木が減少しており、繁殖地が狭められていると考えられる。秋の渡り時季の標識調査では大潟村でも記録された。
- ◆本種の現状 営巣木の減少と併せて、広域にわたる広葉樹から針葉樹であるスギへの樹種転換により、餌となる昆虫が減少してその生息に大きく影響していると考えられる。
- ◆生存に対する脅威 大木の伐採と消滅。針葉樹の造林。

(佐藤公生)

フクロウ目フクロウ科

コノハズク

Otus sunia (Hodgson, 1836)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 シベリア東部、朝鮮、中国、東南アジア、ヒマラヤに広く分布する。国内では夏鳥として北海道から九州までの平地から山地の森林に生息する。
- ◆県内の分布 北秋田市、能代市、藤里町、秋田市、東成瀬村などの森林に生息する。標識調査により、秋季に大潟村を通過することが知られた。
- ◆本種の概要 落葉広葉樹の大木の樹洞に営巣する。夜行性であり、かつ枯れ葉や枯れ枝そっくりの体色のために目立たず、発見しにくい。餌は主に夜に飛ぶ昆虫を食する。全国的には大木の自然林が減少しているために、本種の生息環境が狭められていると考えられる。
- ◆本種の現状 県内ではブナ林で繁殖しているが、これまでに相当の面積が伐採されており、その個体数は減少していると考えられる。
- ◆生存に対する脅威 ブナ林などの伐採。
- ◆特記事項 渡りの時季には、よくビルのガラス窓に衝突死することがあり、衝突防止策が必要である。

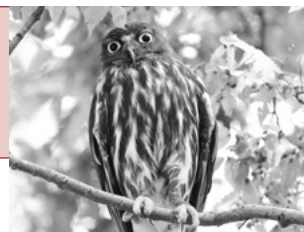
(佐藤公生)

フクロウ目フクロウ科

アオバズク

Ninox scutulata (Raffles, 1822)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 朝鮮、中国東部、東南アジア、インドなどに分布する。国内では全国に夏鳥として渡来する。
- ◆県内の分布 大館市、秋田市、湯沢市などの都市公園や社寺林、自然公園、丘陵地の大きな木のある森などで少数が繁殖する。
- ◆本種の概要 夜行性で、昆虫やコウモリ、小鳥などを捕食する。全国的にも営巣できる樹洞のある大木が減少しているために、本種も個体数が減少している。
- ◆本種の現状 社寺林、都市公園のケヤキの大木などの樹洞に営巣する。
- ◆生存に対する脅威 社寺林や広葉樹の減少。大木の老齢化による危険防止のための伐採。

(佐藤公生)

フクロウ目フクロウ科

トラフズク

Asio otus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸と北アメリカの温帯、アフリカ北部および東部で繁殖し、北方のものは冬季、南方へ移動する。国内では本州中部以北では留鳥、本州中部以南には冬鳥として渡来する。
- ◆県内の分布 秋田市、大潟村、大仙市、横手市など
- ◆本種の概要 ネズミ類を主食としており、他に小鳥も捕食する。屋敷林のカラスなどの古巣を利用して営巣する。冬季には大潟村の松林や大仙市の屋敷林での就罫が確認されている。
- ◆本種の現状 他種の古巣を利用することや、人里近くの大木の減少も影響し、繁殖地が安定していない。また、冬季に就罫する場所も不安定である。
- ◆生存に対する脅威 社寺林、屋敷林、樹洞のある大木の減少等により、繁殖地や冬季の罫に適した環境が失われている。

(佐々木均)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ブッポウソウ目カワセミ科

アカショウビン

Halcyon coromanda (Latham, 1790)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 インド北東部、ネパール、ブータン、バングラデシュ、ミャンマー北部、マレー半島、大スンダ列島、中国北東部および南西部、台湾、朝鮮半島南部に分布する。国内では夏鳥として全国に渡来する。
- ◆県内の分布 大館市、上小阿仁村、能代市、八峰町、秋田市、男鹿市、由利本荘市、仙北市、湯沢市、粕毛川、田代岳、森吉山、鳥海山など
- ◆本種の概要 平地や山地の溪流や湖沼に沿った林内に生息し、樹洞等で繁殖する。
- ◆本種の現状 深山の溪流周辺の林内で確認される。姿や鳴き声に特徴があることから、生息報告は県内各地に及んでいるが、個体数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 森林の伐採。

(小笠原 嵩)

ブッポウソウ目カワセミ科

カワセミ

Alcedo atthis (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ヨーロッパから日本までの温帯域で広く生息する。冬季凍結する地域では暖地へ移動する。
- ◆県内の分布 全県の平野部から低山帯の河川や池沼に生息する。大部分の個体は、冬季に凍結しない温暖な地域へ移動する。
- ◆本種の概要 池沼や河川で水中にダイビングして小魚や水生小動物を捕食する。水辺の垂直な崖に横穴を掘りその奥に産卵する。
- ◆本種の現状 営巣崖のコンクリート化などにより営巣地が減少している。
- ◆生存に対する脅威 営巣崖の護岸工事。護岸工事において環境配慮型ブロックを用いた所では営巣している例もある。
- ◆特記事項 大仙市では市の鳥に指定されている。

(佐藤 公生)

ブッポウソウ目カワセミ科

ヤマセミ

Megaceryle lugubris (Temminck, 1834)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 アフガニスタン北東部からヒマラヤ、タイ北西部、ミャンマー、ベトナム中部、中国南部に分布している。国内では九州以北に留鳥として分布している。
- ◆県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、上小阿仁村、能代市、八峰町、秋田市、由利本荘市、にかほ市、大仙市、仙北市、湯沢市など
- ◆本種の概要 平地から山地の溪流や河川、湖沼、ダム湖などに広く分布し魚を捕食している。1溪流に1つがいが生息するといわれており個体数は少ない。
- ◆本種の現状 県内全域の山地の水辺を中心に広く分布しており、繁殖行動が確認されているが個体数が少なく年々目撃数が減少している。
- ◆生存に対する脅威 営巣崖の護岸工事、ダム建設による溪流消失など、生息環境の減少及び悪化が個体数減少に大きく影響を与えている。
- ◆特記事項 残土置き場で採土跡の断面に営巣した事例があり、生息地では人工崖を作れば営巣することも考えられる。ヤマセミにおいても、カワセミが営巣した環境配慮型ブロックを用いた護岸を実証してみることも必要であろう。

(佐藤 公生)

ブッポウソウ目ブッポウソウ科

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis (Linnaeus, 1766)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 シベリア東部、朝鮮、中国南部、東南アジアなどに広く分布する。国内では夏鳥として本州から九州にかけて飛来する。南方系の鳥であり、北日本では数が少ない。
- ◆県内の分布 湯沢市、白神山地、森吉山麓、鳥海山麓などで繁殖記録がある。
- ◆本種の概要 飛翔中の大形昆虫を捕食するため、大木のある広葉樹の森と空間を必要とする。また、クマゲラなどのキツキ類が開けた樹洞を利用して営巣する。全国的にも減少傾向にある種である。巣箱を利用する。
- ◆本種の現状 県内では局地的に繁殖が確認されているが、個体数は少ない。広葉樹の森が減少したことが影響していると考えられる。営巣地として唯一知られていた鳥海山麓のブナ林は2014年秋に伐採されて消滅した。
- ◆生存に対する脅威 ブナ林などの伐採。
- ◆特記事項 繁殖を確認した時点で、営巣林所有者に保護のために協力を働きかける必要がある。緊急的に、巣箱をかけてみることも必要かつ有用である。

(佐藤公生)

ハヤブサ目ハヤブサ科

チョウゲンボウ

Falco tinnunculus Linnaeus, 1758

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 極地を除くユーラシアからアフリカ、アジアに分布する。国内では本州中部以北で繁殖し、西日本では主に冬鳥である。
- ◆県内の分布 県内一円に分布する。
- ◆本種の概要 農耕地、河川敷の草地、埋め立て地などに生息し、ホバリングして小鳥やネズミ類などを捕らえる。
- ◆本種の現状 県内各地で年間を通じて観察される。本来は自然の崖の窪地を利用して営巣する種とされ、能代市ニツ井町で岩石採取跡地の崖で繁殖した例がある。湯上市、大仙市、横手市、湯沢市の橋梁の隙間や八郎湯町、大湯村などではカントリーエレベーターを、秋田市街地ではビルディングを利用して繁殖している。
- ◆生存に対する脅威 農耕地などの開けた環境を主な採食地としているため、そのような環境は改変に見舞われやすい。

(佐々木均)

スズメ目カササギヒタキ科

サンコウチョウ

Terpsiphone atrocaudata (Eyton, 1839)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 朝鮮、台湾、フィリピンなどで繁殖し、冬季は中国南部、インドシナ、マレー半島、スマトラへ渡る。国内では夏鳥として本州以南に渡来する。
- ◆県内の分布 大館市、北秋田市、能代市、三種町、八峰町、秋田市、男鹿市、五城目町、由利本荘市、横手市など
- ◆本種の概要 平地から低山の針葉樹と広葉樹が混交する林内において観察される。暗い林内を好む。
- ◆本種の現状 さえずりと優雅な体の特徴から各地で確認されやすいが、個体数は少ない。能代市後谷地の海岸砂防林(通称「風の松原」)では、スギが優占する広葉樹との混交林内で繁殖報告がある。
- ◆生存に対する脅威 針広混交林の伐採。生息環境の保全が必要である。

(佐藤磯男)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

スズメ目ヒタキ科

マミジロ

Zoothera sibirica (Pallas, 1776)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 中国北東部からロシア極東南部、サハリンにかけて繁殖し、冬季は中国南部、東南アジアに渡る。国内では夏鳥として本州中部以北に渡来するが局地的である。
- ◆県内の分布 十和田湖、粕毛川、白神山地、森吉山、太平山、薬師岳など
- ◆本種の概要 低山から亜高山帯にかけての林内に生息する。
- ◆本種の現状 落葉広葉樹林、落葉広葉樹と針葉樹が混交する林、谷沿いの暗い林などで確認されるが、局地的で個体数も少ない。
- ◆生存に対する脅威 ブナ林などの伐採。

(小笠原暁)

スズメ目ヒタキ科

コマドリ

Luscinia akahige (Temminck, 1835)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北はサハリン、南千島に分布する。国内では北海道から九州まで夏鳥として渡来する。越冬地は台湾、中国南部である。
- ◆県内の分布 十和田湖外輪山のほか、白神山地、太平山、奥羽山脈、出羽山地などのブナやオオシラビソなど、標高の高いうっそうとした森に生息する。
- ◆本種の概要 林床の茂みに生息するため姿の確認は困難であり、特有のさえずりにより生息が確認されることが多い。全国的には深い森が減少してきており、生息地も狭まっていると考えられる。
- ◆本種の現状 県内ではブナ林の大規模伐採により、本種の生息地が極端に失われた。これ以上の自然林の伐採は避けなければならない。
- ◆生存に対する脅威 ブナ林などの伐採。林道開発。

(佐藤公生)

スズメ目ヒタキ科

コルリ

Luscinia cyane (Pallas, 1776)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 シベリア南部からアムール、サハリン、中国北東部、朝鮮半島で繁殖し、インドのアッサムや東南アジアで越冬する。国内では主に北海道から本州中部に夏鳥として渡来し繁殖するが、四国、九州からの繁殖報告もある。
- ◆県内の分布 白神山地、奥羽山脈、出羽山地などの深山の森林に生息する。
- ◆本種の概要 夏鳥として渡来し、山地から亜高山帯の針葉樹林内や落葉広葉樹林内に生息する。繁殖期は下生えの間を潜行し姿を見せることが少なく、鳴き声による確認がほとんどである。
- ◆本種の現状 県内のほとんどの山地から亜高山帯にかけての針葉樹林、落葉広葉樹林などの下層に生息するが、個体数は多くはない。
- ◆生存に対する脅威 ブナ林、針葉樹林などの伐採。

(佐藤公生)

スズメ目ヒタキ科

コサメビタキ

Muscicapa dauurica Pallas, 1811

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 インド、ヒマラヤ、バイカル湖周辺からアムール、中国北東部、サハリンなどで繁殖し、インドから中国南部、東南アジアで越冬する。日本では夏鳥として、九州以北に渡来し繁殖をする。
- ◆県内の分布 大館市、能代市、三種町、藤里町、秋田市、男鹿市、由利本荘市、横手市、十和田湖、森吉山、八幡平、栗駒山麓など
- ◆本種の概要 平地から山地の雑木林やマツ林、広葉樹林に生息し、大きい樹木のある都市公園や社寺林でも見られる。大木の枝に止まり、そこから虫をフライキャッチングして捕らえる。
- ◆本種の現状 春、秋の渡りの時季には市街地の公園などにも現れるが、その数は減少傾向である。
- ◆生存に対する脅威 森林伐採による生息環境消失の危険。

(西出 隆)

スズメ目アトリ科

ハギマシコ

Leucosticte arctoa (Pallas, 1811)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 シベリア東北部、千島列島、アリューシャン列島等に分布する。国内では冬鳥として北海道から本州中部にかけて渡来するが、一部は北海道で周年生息している。
- ◆県内の分布 秋田市、男鹿市、横手市、東成瀬村、十和田湖など
- ◆本種の概要 崖地や疎林、草地などに群れる。ヌマガヤ、アカザ、オオバコ、ハギ類などの種子を食べる。
- ◆本種の現状 少数から数百羽の群れで見られる。渡来する個体数の変動が大きい。
- ◆生存に対する脅威 落葉広葉樹や疎林の減少。

(佐藤磯男)

スズメ目アトリ科

イカル

Eophona personata (Temminck & Schlegel, 1848)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ロシアのアムール、中国東北部で繁殖し、大陸のものは冬季中国南部へ渡る。国内では留鳥または漂鳥として北海道から九州に生息し、北のものは冬季に暖地に移動する。
- ◆県内の分布 県内一円に分布する。
- ◆本種の概要 平地から山地のマツ林や落葉広葉樹林で繁殖し、冬季は暖地に移動する。
- ◆本種の現状 県内各地の平地から低山帯で観察され、囀りもよく聞かれるが、繁殖例の報告は少ない。秋季には幼鳥を含む群れが平地にも出現することがある。
- ◆生存に対する脅威 松枯れ、森林伐採などによる繁殖環境の悪化。

(佐々木均)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

スズメ目ホオジロ科

ホオアカ

Emberiza fucata Pallas, 1776

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 中国北東部や南部、ヒマラヤ山脈西部、シベリア南東部、モンゴルなどで繁殖し、北方のものは、中国南部やインドシナ北部などに渡り、越冬する。日本では夏季に北海道や本州の草地で繁殖している。冬季に本州南部、四国、九州等で越冬する。
- ◆県内の分布 夏季には県内の高原部や海岸部などの草地に生息している。冬季は南下する。
- ◆本種の概要 平地から山地の草原や河川敷、農耕地に生息し、草の間や低木に枯れ草で巣をつくり繁殖している。
- ◆本種の現状 男鹿半島の寒風山や入道崎の草地、鳥海山麓の草原や湿原、雄物川流域などで繁殖しているが、数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 開発や植生の変化などによって生息適地が減少傾向にあり、生息個体数が少なくなっている。

(佐藤磯男)

スズメ目ホオジロ科

ノジコ

Emberiza sulphurata Temminck & Schlegel, 1848

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 繁殖地としては日本だけが知られている種類で、繁殖が終わると中国南部、台湾、フィリピン北部で越冬する。日本では本州中部と東北地方のごく一部地域だけで繁殖する固有種である。
- ◆県内の分布 鹿角市、小坂町、大館市、能代市、藤里町、横手市、羽後町、田代岳、鳥海山麓、栗駒山麓など
- ◆本種の概要 全長約14cmのホオジロやアオジより小さい黄緑色の小鳥で、目の周囲に細い白輪がでる。雌雄はほぼ同色である。本州のごく一部の地域でしか繁殖しておらず、その個体数は少ない。
- ◆本種の現状 溪流沿いの湿った草原の周辺に生えるハンノキ、カワヤナギなどの林縁に生息している。県内での生息地は極めて限られている。
- ◆生存に対する脅威 個体数が少なく、生息する地域が限られていることから、森林の伐採や湿原の改変などによる生息環境の悪化防止に努める必要がある。

(西出 隆)

スズメ目ホオジロ科

コジュリン

Emberiza yessoensis (Swinhoe, 1874)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 日本列島とユーラシア大陸東部のごく一部に分布している。日本では、本州と九州のごく限られた地域で繁殖する。冬季には、関東以南の東海、近畿、中国地方などの沿岸に生息している。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、秋田市、男鹿市、大潟村など
- ◆本種の概要 全長約14.5cmのスズメ程の大きさの雌雄異色の小鳥。雄の夏羽は頭はすっぽりと黒く、日本で繁殖するのは青森、秋田、茨城、千葉、山梨、長野、熊本の各県で、各県内でも局地的である。
- ◆本種の現状 大潟村周辺では草原や農耕地に生息し、5月～8月に年1～2回の繁殖をしている。繁殖期には、つがいはまたは単独ですごすが、冬や渡りの時季には小群となる。
- ◆生存に対する脅威 大潟村周辺に広く分布するが、農耕地の利用形態の変化により生息地である草地が消失するなど、環境保全対策をする必要がある。

(西出 隆)

スズメ目ホオジロ科

オオジュリン

Emberiza schoeniclus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 アムール、カムチャッカ、サハリン、千島などユーラシア大陸北部で繁殖し、北方のものは冬季に、アフリカ北部、西南アジア、中国南部などに渡って越冬する。日本では東北以北の北海道、青森、秋田で繁殖する。冬季には暖地に移動するほか、冬鳥として渡来するものもいる。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、秋田市、男鹿市、大潟村、由利本荘市、横手市など
- ◆本種の概要 全長は約16cmで雌雄異色。夏羽の雄は、頭と喉は黒く、白い腹からつづく顎線がくいこむ。大潟村の草原のやや丈の高い草のある場所を好む。4月上・中旬に渡来し、雄は枯れ草の穂先に止まって、ゆっくりしたテンポで囀るのが観察される。5月中旬からは繁殖が始まるが、繁殖する個体は少ない。
- ◆本種の現状 大潟村での繁殖地は、大潟草原鳥獣保護区とその周辺に限られた狭い範囲内で、その個体数は少ない。冬季には、大部分が越冬地に渡るが、一部は積雪の少ないヨシ原で越冬する。
- ◆生存に対する脅威 ヨシ原の減少。湿原の消失を防ぐため、生息環境の保全が必要である。

(西出 隆)

キジ目キジ科

ウズラ

Coturnix japonica Temminck & Schlegel, 1849

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：絶滅危惧II類



- ◆国内外の分布 モンゴル北部、バイカル湖、アムール、ウスリー、中国北部などで繁殖し、朝鮮半島、中国南部、インドシナで越冬する。国内では夏鳥として本州中部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬する。
- ◆県内の分布 鹿角市、秋田市、大潟村など
- ◆本種の概要 草原、農耕地、牧草地、河川敷などに生息する。
- ◆本種の現状 大潟村の農耕地等で発見されているが、草地に潜行する習性のため発見が難しく、詳しい生息状況は不明である。
- ◆生存に対する脅威 生態がほとんどわかっておらず、どのような要因が脅威となるのか不明である。

(佐々木均)

カモ目カモ科

カリガネ

Anser erythropus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 シベリア、ヨーロッパの高緯度地方で繁殖し、冬季は南方に渡り越冬する。日本には希に冬鳥として渡来するがその数は多くない。北海道、本州の青森、宮城、秋田、山形、石川、長野、福岡で渡来の記録がある。
- ◆県内の分布 北秋田市、能代市、大潟村など
- ◆本種の概要 全長は約59cm。雌雄同色でマガンに似るが、マガンより小形で、嘴はピンクで小さい。額の白色部分は広く登頂部まで達していて目の周囲が黄色いリングになっている。もともと単独でマガンに混じって渡来していたが、近年になって渡来する数が増えてきている。
- ◆本種の現状 マガンの群れに混じって小友沼に10月～11月に渡来する。積雪のため採餌できなくなると、太平洋側の伊豆沼にマガンと一緒に南下する。春の3月に再び大潟村に戻ってくる。小友沼をめぐらに利用して大潟村と往復するようになるが、その数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 情報が少なく、不明。

(西出 隆)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カモ目カモ科

シマアジ

Anas querquedula Linnaeus, 1758

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ヨーロッパの大部分、ユーラシア大陸中部と広い範囲で繁殖しているほかカムチャッカ半島でも繁殖している。冬はアフリカ中部、インド、東南アジアなどで越冬する。日本には北海道、本州、四国、九州、沖縄などに渡来する。北海道と本州で繁殖した例があるが、一般的には、春と秋に見られる旅鳥で数は少ない。
- ◆県内の分布 能代市、秋田市、男鹿市、潟上市、大潟村、大仙市、横手市など
- ◆本種の概要 全長約38cmの小形のカモ類でコガモよりわずかに大きい。嘴は比較的長く、雄の冬羽は、頭部は褐色味のぶどう色で、目立つ白い眉斑がある。個体数も少ないので観察される機会が少ない。
- ◆本種の現状 春と秋に見られるが、大きな群れをつくることはなくコガモの群れにまじって単独か数羽で水面に浮いている。コガモよりも水に沈んだ姿で観察される。県内では、厳冬期には見られない。
- ◆生存に対する脅威 もともと渡来数が少ないためどのような要因が脅威となるのか不明である。情報収集に努める必要がある。

(西出 隆)

カモ目カモ科

シノリガモ

Histrionicus histrionicus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2014：地域個体群



- ◆国内外の分布 シベリア東部、カムチャツカ半島、北千島、アラスカなどで繁殖するものが多く、冬季に日本周辺、朝鮮半島などに南下しているものと思われる。国内では北海道と本州北部では一部留鳥として周年生息し、繁殖も確かめられている。
- ◆県内の分布 大館市、北秋田市、八峰町、藤里町、秋田市、男鹿市、潟上市、由利本荘市、にかほ市、仙北市、東成瀬村など
- ◆本種の概要 主に冬鳥として飛来し、外洋に面した岩礁地帯に生息している。北海道と本州北部では繁殖が確かめられている。
- ◆本種の現状 県内の日本海沿岸で冬鳥として少数生息する。近年、大館市や秋田市、仙北市、東成瀬村の河川上流部などで繁殖が確かめられているが、観察例は少ない。
- ◆生存に対する脅威 溪流のダム開発。森林の伐採。

(佐藤磯男)

カモ目カモ科

カワアイサ

Mergus merganser Linnaeus, 1758

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシアと北米大陸の温帯から亜寒帯に広く繁殖する。日本には主に冬鳥として渡来し、北海道では道北、道東で少数が繁殖している。
- ◆県内の分布 近年、秋田県内の特に秋田市旭川中流部の添川で数年前より、ほぼ毎年雛を連れたつがいが目撃されているが、数は少ない。他の地域でも繁殖していると思われるが、情報がない。
- ◆本種の概要 越冬地では数羽から数十羽の群れで生活し、広い湖沼や大きな河川の河口で見られ、海にでることは少ない。
- ◆本種の現状 冬季県内の広い湖沼や大きな河川、特に河口で越冬している。ブナ林帯の川や湖沼の岸辺の岩の隙間、樹洞などで営巣しているものと思われるが、状況は良く知られていない。
- ◆生存に対する脅威 ブナ林の伐採、山間部の河川の改修。

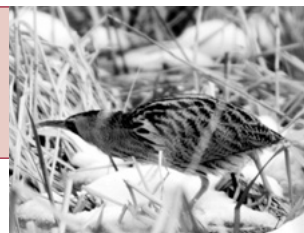
(小笠原暁)

ペリカン目サギ科

サンカノゴイ

Botaurus stellaris (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸の温帯地方などで繁殖し、アフリカ、南アジア、中国東南部などで越冬する。日本では北海道と茨城県、千葉県、滋賀県で繁殖する。冬季には、やや南に移動するといわれているが記録は少ない。北海道では夏鳥。広大なヨシ原の地上に営巣する。
- ◆県内の分布 大潟草原鳥獣保護区、八郎潟西部承水路など
- ◆本種の概要 全長は約70cm。体はずんぐりしていて頸も短くみえるが、頸を伸ばすと相当長い大形のサギ類。県内での目撃例は少ない。大潟草原鳥獣保護区周辺では周年生息していると思われる。
- ◆本種の現状 広大なヨシ原に生息し、開けた場所に出ることも少ない。活動は夜間が主なため姿をみる機会が少なく、その生息状況はよく分かっていない。
- ◆生存に対する脅威 県内での目撃例は少ないので、どのような要因が脅威となるのか不明である。情報収集に努める必要がある。

(西出 隆)

ペリカン目サギ科

ミゾゴイ

Gorsachius goesagi (Temminck, 1836)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：絶滅危惧II類



- ◆国内外の分布 本州以南に夏鳥として渡来し、台湾やフィリピンなどで越冬する。九州や琉球諸島でも少数が越冬する。
- ◆県内の分布 秋田市、大潟村、由利本荘市、横手市、田代岳、八幡平など
- ◆本種の概要 国内には夏鳥として渡来し、低山帯のスギ、ヒノキなどの針葉樹とクリ、ナラなどの落葉広葉樹からなる混交林に生息し、薄暗い林床の斜面で行動することが多い。
- ◆本種の現状 秋田市手形山で繁殖した例が知られているほか、横手市山内の民家の裏山に数年続けて渡来した例もある。春の渡りの時季には秋田市内の公園や横手市の市街地・河川敷等に立ち寄った個体の観察例がある。発見が難しく、詳しい生息状況はわかっていない。
- ◆生存に対する脅威 里山の混交林が繁殖地と考えられ、下刈りの行き届いた林床の斜面を餌場としているため、農業・林業人口の激減によりそのような環境が荒廃していることから個体数の減少が進んでいると考えられる。

(佐々木均)

ペリカン目トキ科

クロツラヘラサギ

Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 朝鮮半島北西部で繁殖し、ベトナムから台湾、朝鮮半島南西部にかけて越冬するが、日本でも少数が越冬する。特に九州の博多湾に多い。世界的な希少種である。
- ◆県内の分布 本県には1987年に潟上市天王に初飛来し、その後たびたび飛来するようになった。能代市の浅内沼や小友沼、三種町、男鹿市の船越水道や水田、八郎潟西部承水路などが主な飛来地である。飛来の時季は主に夏で、幼鳥が飛来する。多くは単独での飛来が多いが時には3羽の事もあり、2013年秋には三種町浜田に同時に5羽の幼鳥が飛来した。
- ◆本種の概要 浅い池沼で平らな嘴を半開きにして頸を左右に振り回し、嘴に触れた魚介類を素早くはさみとって食べる。
- ◆本種の現状 世界的な希少種であり絶滅が危惧されている。知られている繁殖地は北朝鮮にあり詳細は分からない。中国にも繁殖地があるのではないかとみられている。極めて数が少ないにも関わらず、幼鳥が越冬地と反対の北日本に飛来するのも謎である。
- ◆生存に対する脅威 魚介類の有害物質による汚染や減少。

(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ツル目クイナ科

クイナ

Rallus aquaticus Linnaeus, 1758

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸の温帯地帯に広く分布する。日本では北海道、本州北部で繁殖し本州、四国、九州、南西諸島などで越冬する。
- ◆県内の分布 北秋田市、能代市、秋田市、男鹿市、潟上市、大潟村、横手市など
- ◆本種の概要 全長は約29cm。平地から山地の湿地で、単独かつがいで生活する。繁殖期は5月～8月で、営巣は水辺の草むらに作る。夕方活動することが多い。
- ◆本種の現状 ヨシ原や水辺の草の中に生息し、なかなか姿を見せない。1992年に大潟草原鳥獣保護区の草むらでヒナをつれた姿が観察された。
- ◆生存に対する脅威 生息と繁殖に必要な草原、沼沢などが減少している。生息と繁殖の状況を確認しその保全が必要である。

(西出 隆)

ツル目クイナ科

ヒメクイナ

Porzana pusilla (Pallas, 1776)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸の温帯地域、アフリカ南部、オーストラリア、ニュージーランドに分布し、ユーラシア大陸のものはインドシナ、中国南部などで越冬する。日本では北海道、本州北部で繁殖し一部は本州、九州などで越冬する。
- ◆県内の分布 北秋田市、秋田市、大潟草原鳥獣保護区など
- ◆本種の概要 全長約20cmの小さなクイナ。平地の湿地や水田に生息する。
- ◆本種の現状 大潟草原鳥獣保護区で2006年6月の標識調査により捕獲され生息が確認されたが、その後の情報はない。
- ◆生存に対する脅威 県内での観察例が少ないので、生存に対する脅威は良く分かっていない。生息環境の情報収集と保全の必要がある。

(西出 隆)

チドリ目セイタカシギ科

セイタカシギ

Himantopus himantopus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 世界的に広く分布していて、冬には繁殖地から移動するものがあるが、長距離の渡りはしないといわれている。日本には、主に旅鳥か冬鳥として渡来するが、1975年ころから本州の一部地域で繁殖が記録されて以来、北海道から沖縄まで全国的に分布が広がるようになった。
- ◆県内の分布 大館市、三種町、男鹿市、八郎潟町、潟上市、大潟村、由利本荘市、横手市、湯沢市、八郎湖など
- ◆本種の概要 全長は約32cm。脚がピンクで非常に長い。嘴も細くて長い中形のシギ類。県内では、1975年頃は春から夏にかけて単独または数羽で飛来する珍鳥で、その場所も限られていた。
- ◆本種の現状 最近では、飛来する場所が県内の水田地帯に広がりつつあるが、個体数はそれほど増えていない。
- ◆生存に対する脅威 水が張られた休耕田など休息場所の減少。

(西出 隆)

チドリ目シギ科

アオシギ

Gallinago solitaria Hodgson, 1831

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 バイカル湖周辺やヒマラヤ北部、東シベリア、サハリンなどで繁殖し、冬はやや南に移動する。日本には冬鳥として渡来し、山地の溪流沿いの林に囲まれた水田で見られるが、単独でいることが多く、水辺の草の中に潜んでいるので見つけにくい。
- ◆県内の分布 鹿角市、能代市、秋田市、男鹿市、湯沢市など
- ◆本種の概要 全長は約30cm。ジシギ類の中では、いちばん大きく単独でいることが多い。水辺の草の中に潜んでいるので、人が近づくとジェットと鳴いて、流れに沿って飛び去るため、発見するのは難しい。
- ◆本種の現状 県内では、積雪期に沢田などでの記録があるが、その発見は、偶然に確認されることが多く困難である。そのため生息状況については、ほとんど分かっていない。
- ◆生存に対する脅威 山間地の沢田などの生息適地の減少。

(西出 隆)

チドリ目シギ科

ヘラシギ

Eurynorhynchus pygmeus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：絶滅危惧IA類



- ◆国内外の分布 シベリア東端のツンドラ地帯で繁殖し、インド北東部、シンガポール、中国南東部などで越冬する。日本には旅鳥としてごく少数飛来する。
- ◆県内の分布 能代海岸、潟上市江川海岸や秋田市新屋の雄物川河口の砂浜での記録があるが稀であり、近年はほとんど記録されていない。
- ◆本種の概要 スズメ大の小さなシギ類で、平らな嘴を砂や泥の中で左右に動かして採餌する。
- ◆本種の現状 世界的に絶滅の危機にあり、本県への飛来も極めてまれである。
- ◆生存に対する脅威 繁殖地の開発や砂浜の後退。

(佐藤公生)

タカ目タカ科

ハイロチュウヒ

Circus cyaneus (Linnaeus, 1766)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸北部、北アメリカ大陸北部で繁殖し、冬季は南方へ渡る。ヨーロッパでは周年生息する。国内では冬鳥として全国に渡来するが、個体数は少ない。
- ◆県内の分布 冬鳥として渡来し、能代市、男鹿市、大潟村、にかほ市、大仙市などに飛来する。
- ◆本種の概要 農耕地、アシ原、裸地などに渡来するが、個体数は少ない。
- ◆本種の現状 大潟村のカントリーエレベーター構内では糞に集まるスズメ類を、秋田県立大学の農場ではネズミ類を狙っているのが見られる。海岸部のアシ原沿いに船川港まで飛来する。個体数は少なく情報が不足している。
- ◆生存に対する脅威 餌となるネズミ類や小鳥の減少や餌動物の生息地の減少。個体数が少ないこと。

(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

タカ目タカ科

ケアシノスリ

Buteo lagopus (Pontoppidan, 1763)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 ユーラシア大陸の極北部、カムチャッカ半島から千島列島、北アメリカ大陸の北半分で繁殖し冬は南下する。日本には冬鳥として渡来するが、その数は多くない。日本で記録のあるのは、北海道、本州の青森、宮城、秋田、山形、新潟、石川、長野、福岡、沖縄などである。
- ◆県内の分布 男鹿市、大潟村、横手市の草原や農耕地など。
- ◆本種の概要 全長は約55cm。本州では、日本海側の地域で比較的多く、冬季に海岸、原野、農耕地、干拓地などの開けた場所に生息する。
- ◆本種の現状 あまり羽ばたかないで、ゆっくり輪をえがいて飛んでいることが多い。時々空中で停空飛翔していることもある。情報収集に努める必要がある。
- ◆生存に対する脅威 情報が少なく、不明。

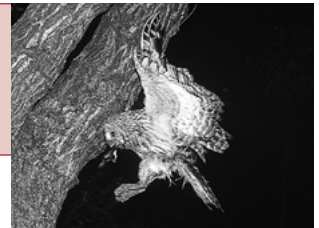
(西出 隆)

フクロウ目フクロウ科

フクロウ

Strix uralensis Pallas, 1771

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 亜寒帯から温帯にかけてのユーラシア大陸に広く分布しているが、日本では、九州以北に留鳥として生息する。
- ◆県内の分布 能代市、三種町、八峰町、秋田市、男鹿市、大潟村、由利本荘市、横手市など。
- ◆本種の概要 全長は約50cm、翼開長は94～102cm。平地から山地の林に生息し、村落付近の神社、寺、都市公園などの大木のある場所に生息している。最近、市街地の近くでは減少している。木の茂みや樹洞の穴を休み場にしていて、夕方から活動を始める。休み場の下には、多くのペリットが落ちている。昼も活動することがある。
- ◆本種の現状 本県では、2月～3月に大木の樹洞、建物の隙間、廃屋の中、タカ類の古巣などに産卵する。巣立ち直後のヒナが拾われて動物園などに持ち込まれることがある。
- ◆生存に対する脅威 営巣木の減少。

(西出 隆)

キツツキ目キツツキ科

オオアカゲラ

Dendrocopos leucotos (Bechstein, 1802)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：—
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 スカンディナヴィア半島南部、ヨーロッパ東部から中国東北部、朝鮮、日本、台湾にかけて帯状に分布し、10亜種に分けられる。日本では4亜種に分けられ、全国に分布する。
- ◆県内の分布 大館市、秋田市、男鹿市、横手市、十和田湖畔、鳥海山麓、田沢湖高原などで目撃記録や繁殖記録がある。アオゲラやアカゲラに比して深山性のキツツキと言える。
- ◆本種の概要 アカゲラより大きく、背に細かい白斑があるのが特徴で、アカゲラに比べて警戒心が少なく動作もゆったりしている。森林に生息し個体数は少ない。
- ◆本種の現状 広葉樹のある森林に生息しており、広葉樹林や混交林の伐採が営巣環境を狭めている。
- ◆生存に対する脅威 森林の伐採

(佐藤公生)

ハヤブサ目ハヤブサ科

コチョウゲンボウ

Falco columbarius Linnaeus, 1758

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北アメリカとユーラシア大陸の主に亜寒帯の広い範囲で繁殖し、中央アメリカや地中海沿岸、西アジアから東南アジア、日本で越冬する。国内では北海道、本州、四国、九州に冬鳥として渡来する。
- ◆県内の分布 能代市、秋田市、大潟村、由利本荘市、横手市、羽後町など
- ◆本種の概要 全長は約31cm、翼開長64～74cmの小形のハヤブサ類。開けた場所に生息し、小さくて飛翔は速く、はばたきを主としている。捕らえた餌は地上で食べる。
- ◆本種の現状 冬季に干拓地、農耕地、港湾敷地、埋立地など開けた地域で最近目撃される機会が多くなっているが、個体数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 記録される個体数が少なく冬期間の行動に不明な点はあるが、積雪による餌不足が心配される。
(西出 隆)

スズメ目キバシリ科

キバシリ

Certhia familiaris Linnaeus, 1758

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北半球の温帯から亜寒帯まで分布する。国内では九州、四国から北海道にかけての森林に生息する。
- ◆県内の分布 十和田湖周辺、森吉山、太平山、栗駒山などのブナ等の自然林に周年生息する。
- ◆本種の概要 南日本では亜高山の針葉樹林、北日本ではブナやオオシラビソなどの森、北海道ではコメツガなどの針葉樹林に主に生息するが、動きが早いことと、目撃数が少ないことから、個体数は少ないとみられる。
- ◆本種の現状 本来、個体数が少ないものかどうか、その生態と併せて良く知られていない。平地では2013年の秋に、秋田市高清水公園で目撃されているので、新たな生息地を求めて移動していることが考えられる。
- ◆生存に対する脅威 自然植生の森の破壊。
(佐藤公生)

スズメ目アトリ科

オオマシコ

Carpodacus roseus (Pallas, 1776)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 中央シベリア、東シベリア、サハリンで繁殖し、冬鳥として本州中部以北に渡来する。
- ◆県内の分布 小坂町、秋田市、男鹿市、五城目町、横手市などで観察撮影されている。渡来は不規則である。
- ◆本種の概要 他のアトリ科の種に比べ体が大きい。成熟したオスはほぼ全身が鮮やかな赤桃色、メスは全身が淡い紅色を帯びた淡褐色である。疎林に生息し、特にヤマハギの実を好んで食べる。
- ◆本種の現状 県内には冬鳥として渡来する。
- ◆生存に対する脅威 不明。
(佐藤公生)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

付属資料

カイツブリ目カイツブリ科

カンムリカイツブリ

Podiceps cristatus (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：留意種

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：該当無し



- ◆**国内外の分布** アフリカ大陸の一部、ユーラシア大陸の中部以南、日本、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドなどに分布する。日本では、冬季に渡来し越冬していたが、近年、東北北部と近畿地方で繁殖が確認されている。
- ◆**県内の分布** 大潟村、男鹿市、潟上市、八郎潟町、三種町、能代市、秋田市、横手市など
- ◆**本種の概要** 日本に生息するカイツブリ目の中で最も大きい種である。流れの緩やかな河川、湖沼、湿原などに生息する。冬季には凍らない湖沼や河口、港湾部、沿岸部などで越冬する。繁殖期には水辺近くに浮巣をつくる。
- ◆**本種の現状** かつては、冬季に渡来し越冬する冬鳥であったが、2004年に初めて八郎湖、小友沼で繁殖した。その後、県内陸部でも繁殖していることが確認されている。
- ◆**生存に対する脅威** 近年、繁殖個体数が増加傾向にあるが、越冬個体数は減少している。生息地の環境変化に影響を受けやすい種なので、その動向に留意する必要がある。

(佐藤磯男)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

鳥類参考文献

鳥類参考文献

- 秋田県. 1971-1997. 秋田県鳥類分布調査 (1)-(27). 秋田県.
- 日高敏隆. 1996. 日本動物大百科 第3巻. 平凡社.
- 日高敏隆. 1996. 日本動物大百科 第4巻. 平凡社.
- 五百沢日丸解説. 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.
- 桐原政志解説. 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.
- 清棲幸保. 1966. 野鳥の事典. 東京堂出版.
- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑 全4巻. 講談社.
- 小林桂助. 1956. 原色日本鳥類図鑑. 保育社.
- 黒田長久. 1986. 動物大百科 第7巻. 平凡社.
- 中村登流. 1986. 検索入門 野鳥の図鑑 陸の鳥 ①・②. 保育社.
- 中村登流. 1986. 検索入門 野鳥の図鑑 水の鳥 ①・②. 保育社.
- 日本鳥学会目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会.
- 小笠原暁ほか. 1973. あきたの野鳥. 秋田県環境保健部自然保護課.
- 小笠原暁・泉祐一. 1985. 鳥類調査. 粕毛川源流部自然環境調査報告書. 秋田県.
- 小笠原暁・高橋一郎・泉祐一. 1973. 男鹿半島鳥類調査報告. 男鹿半島自然公園学術調査報告. 日本自然保護協会.
- 佐藤武視. 1985. 天王海岸の鳥類相について. 秋田県立博物館研究報告 10.
- 佐藤武視. 1986. 小泉瀧公園周辺の鳥類－1976年以降の記録から. 秋田県立博物館研究報告 11.
- 高橋一郎. 1988. 八郎瀧調整池北部の鳥類とその生態. 秋田県立博物館研究報告 13.
- 高橋一郎. 1989. 神室山の鳥類相. 秋田県立博物館研究報告 14.
- 高橋一郎. 1990. 寒風山の草原性鳥類. 秋田県立博物館研究報告 15.
- 高橋一郎. 2001. 太平山山麓落葉広葉樹二次林における鳥類相. 秋田県立博物館研究報告 26.
- 竹下信雄. 1989. 日本の野鳥. 小学館.
- 日本鳥学会目録編集委員会. 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会.
- 佐々木均. 2011. 秋田県立小泉瀧公園及び周辺の鳥類目録. 秋田県立博物館研究報告 36.
- 船木信一. 2002. 秋田市金足女瀧の鳥類相. 秋田県立博物館研究報告 27.
- 船木信一. 2007. 小泉瀧公園の鳥類相. 秋田県立博物館研究報告 32.
- 小笠原暁. 2004. 秋田の貴重猛禽類. 秋田魁新報社.
- 西出隆・船橋功・武田栄悦・佐藤公生. 2005. 秋田県におけるカンムリカイツブリの繁殖初記録. Strix 23.
- 佐々木均. 2013. カンムリカイツブリが横手でも繁殖. 探鳥あきた 56. 日本野鳥の会秋田県支部報.

Reptilia



爬虫類

Red Data Book of Akita Prefecture 2016
Animals I

爬虫類概説

秋田県内に野生している爬虫類はカメ目のイシガメ科2種、有鱗目のトカゲ科1種、カナヘビ科1種、タカチホヘビ科1種、ナミヘビ科6種、クサリヘビ科1種の計2目6科12種である。

環境省が動植物の分布調査結果をまとめるときに使用している「5倍地域メッシュ」では、秋田県全域が548区画に分けられる。本郷(2007)はこれによって爬虫類各種の観察記録をまとめ、次の数値を得た。(数字は記録のある区画数)

イシガメ科(クサガメ2、ニホンイシガメ1)、トカゲ科(ヒガシニホントカゲ22)、カナヘビ科(ニホンカナヘビ95)、タカチホヘビ科(タカチホヘビ7)、ナミヘビ科(シマヘビ109、ジムグリ32、アオダイショウ82、シロマダラ9、ヒバカリ10、ヤマカガシ75)、クサリヘビ科(ニホンマムシ53)。

このうち、イシガメ科の2種(クサガメ、ニホンイシガメ)は人為分布である。秋田市寺内高野の空素沼ではクサガメの日光浴をごく楽に観察できるが、幼体や卵が観察されておらず、放された個体が長年生存を続けているもののようである。これとは別に、南秋田郡の畑の一角で発見された8個の卵のうち4個からクサガメらしい子亀が孵化したとの情報もあるが、野外で繁殖が毎年行なわれているとする記録は県内にない。

またほかにペットのミシシツピアカミミガメや食用種のスッポンを野外で見た、釣れた等の情報もあるがそれらには後続の記録がなく、野生種として扱わない。

ヤモリ科ニホンヤモリも秋田県の爬虫類相に加えない。山形県酒田市や遊佐町では野外で越冬することも知られており、1965年に、にかほ市象潟町で採集されてから秋田市で少なくとも2度(1980、1996)発見されているが、いずれも搬送された荷物といっしょに持ち込まれたのがほとんど見つかったもので、自然繁殖の記録はない。

以下、各種の生息状況等を概説する。

ヒガシニホントカゲ及びニホンカナヘビは日当たりのよい草地、荒地に生息している。県内ではニホンカナヘビの個体数のはるかに多く、ヒガシニホントカゲの生息地はずっと少ない。

タカチホヘビとシロマダラは記録地が少なく、生息地が局限されており生息密度も低く希少であると判断して、情報不足に選定した。水辺の動物を主な餌にしているヒバカリも水田の整備によって影響を受け、それら2種に次いで記録が少ないが、環境調査で発見される割合が高い。

シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヤマカガシとニホンマムシの5種はいずれも県内各地から記録されている。このうちジムグリは物陰に隠れ地中に潜る習性をもつので発見の機会が少ない傾向がある。

爬虫類には忌み嫌う人、無視する人が多く、じっくり観察する人、種を判定できる人が少ない。そのため情報が不足している。都市部では環境の整備によって小動物が減少し、これを捕食していた爬虫類が激減した。しかし爬虫類はすべて南方系で、ぎりぎりの北地で生息している種もある。

拒絶せず、関心を高めるようにしたいものである。シマヘビ、アオダイショウなどは幼体の形態的特徴が成体と著しく異なるため、しばしば種名を間違えられる。また、ニホンマムシは毒蛇であるし、ヤマカガシも深く咬まれたときには毒液を注入される。一般向けの適切な資料の作成と頒布が望まれる。

(本郷 敏夫)

有鱗目タカチホヘビ科

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters, 1869

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 青森県を北限とし、本州・四国・九州の各地に分布し、中国本土からも知られる。列島周辺に散在する離島からの記録はない。北海道では国内外来種とされている。
- ◆県内の分布 秋田市太平山金山滝付近、横手市横手公園資料館、にかほ市象潟町小砂川県境付近、東成瀬村大深沢などで捕獲され、山地のほか平地にもすむことが裏付けられている。その多くは森林に接した場所で、石や朽木の下に潜んでいる。
- ◆本種の概要 大きくなって全長50cmほどの小さな蛇である。①体表の鱗が重ならず、タイルのように敷き詰められている、②背面中央に1本の細い黒条が走っている、③尾の腹面の鱗が対の2枚に分かれず、一枚ずつ並ぶ、などの特徴がある。体色は赤褐色だが、幼蛇は青色を帯びることも多く、背面中央の黒条も目立たない。成長すると黄色が強まり、ホルマリン液に保存すると黄色い液が浸出する。ミミズ類を食し、夜行性で昼は石や朽木の下に潜んでいるので発見例が少なく、珍しいとされる。だが地域、場所によっては、意外に個体数が多いと言う研究者もいる。
- ◆本種の現状 本県内で発見し記録された地点は少ない。環境省分布調査で使用している「5倍地域メッシュ」では秋田県全域が548区画に分けられる。その内、本種が記録されたのは本郷(2007)によると7区画となっている。
- ◆生存に対する脅威 現在知るかぎりでは、生息地が局限されている上、生息密度が低く希少である。本種の実見は、偶然によるもののほかは開発を目的とした調査によるものである。一般人から寄せられる情報が不足なうえ調査不足で、分布の詳しい状況が解明されていない以上、開発、特に林地の開発には留意が必要で、本種への認識を高めつつ情報の収集に努めなければならない。
(本郷敏夫)

有鱗目ナミヘビ科

シロマダラ

Dinodon orientale (Hilgendorf, 1880)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北海道、本州、四国、九州の各地のほか奥尻から大隅までの島々に分布する。わが国の固有種である。
- ◆県内の分布 男鹿市北浦真山、八峰町真瀬川三十釜、仙北市田沢湖神代、東成瀬村椿川板落などの森林をかかえた低山地のほか、大仙市協和下淀川車田では山際の農作業用材保管小屋の中で発見されており、生息地が深山に限らないことが裏付けられている。路上で無傷の死体が拾得された秋田市小泉湯公園は砂丘間低地に位置している。
- ◆本種の概要 全長30~70cm。①背面は桃色を帯びた灰色で、これに幅広い黒褐色の横斑が規則的に並び横縞模様になっている(アオダイショウの幼蛇がこの模様似るため、しばしば誤認される。)、②日中、日の瞳孔が縦長になっている、③上顎の歯が前、中、後の3部分に分かれ、それらの間に隙間がある、などの特徴がある。もともと個体数があまり多くない上、夜行性で目にも触れる機会が少ないと言われる本種だが、八峰町真瀬川三十釜と秋田市小泉公園では日中に発見されている。また男鹿市北浦真山では数年続けて飼猫が捕らえてきたという。
- ◆本種の現状 本県内で発見し記録された地点は少ない。環境省分布調査の「5倍地域メッシュ」では秋田県全域が548区画に分けられるが、その内、本郷(2007)に記録されているのは9区画となっている。
- ◆生存に対する脅威 現在知るかぎりでは、生息地が局限されている上、生息密度が低く希少である。しかも偶然の機会に発見されたもので、分布の詳しい状況が解明されていない以上、開発、特に林地の開発には留意が必要で、本種への認識を高めつつ情報の収集に努めなければならない。
(本郷敏夫)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

爬虫類参考文献

- 千葉克巳. 1997. イチローの置土産. コミュニケーション・ミニ 31:4. 秋田市大森山動物園.
- 本郷敏夫. 1990. シロマダラが男鹿で採集される. 秋田自然史研究 26:22. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫. 1992. シロマダラ. 秋田の自然 24:3. 秋田県自然保護協会.
- 本郷敏夫. 1993. 横手公園でタカチホヘビが採集された. 秋田自然史研究 29:40. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫. 2000. 秋田県両生類爬虫類分布図:1-69. 秋田県環境と文化のむら協会.
- 松山忠. 1965. タカチホヘビ. 生物秋田 9:19. 秋田生物学会.
- 中村健児・上野俊一. 1963. シロマダラ. 原色日本両生爬虫類図鑑:159-160. 保育社.
- 中村健児・上野俊一. 1963. タカチホヘビ. 原色日本両生爬虫類図鑑:142-144. 保育社.
- 大野正男. 1978. 日本産主要動物の種別文献目録(3) シロマダラ. 東洋大学紀要教養課程編(自然科学) 21:79-92.
- 大野正男. 1978. 日本産主要動物の種別文献目録(4) タカチホヘビとアマミタカチホヘビ. 東洋大学紀要教養課程編(自然科学) 21:93-104.
- 酒田東高校生物クラブ. 1966. ヤモリの分布と生態. 日本学生科学選集 I :100-103. 共立出版.
- 千石正一. 1988. ヘビ亜目. 動植物分布調査報告書(第3回) 両生類・爬虫類:182-186. 環境庁.
- 本郷敏夫. 2005. 協和町動植物調査報告書:130-148. 協和町教育委員会.
- 本郷敏夫. 2007. 秋田県両生類爬虫類分布図追補改訂版2007. 秋田両生類友の会.

Amphibia



両生類

Red Data Book of Akita Prefecture 2016
Animals I

両生類概説

県内に野生する両生類は、有尾目サンショウウオ科3種、イモリ科1種、無尾目ヒキガエル科1種、アマガエル科1種、アカガエル科6種、アオガエル科3種の計2目6科15種である。

環境省が動植物の分布調査結果をまとめるときに使用している「5倍地域メッシュ」では、秋田県全域が548区画に分けられる。本郷(2007)はこれによって両生類各種の記録を集計し、次の数値を得た。(数字は記録のある区画数)。

サンショウウオ科(トウホクサンショウウオ216、クロサンショウウオ110、キタオウシュウサンショウウオ98)、イモリ科(アカハライモリ93)、ヒキガエル科(アズマヒキガエル114)、アマガエル科(ニホンアマガエル143)、アカガエル科(タゴガエル93、ニホンアカガエル40、ヤマアカガエル165、トノサマガエル117、ウシガエル28、ツチガエル102)、アオガエル科(シュレーゲルアオガエル104、モリアオガエル152、カジカガエル85)。

両生類の産卵と幼生の発育には水環境が重要で、種によってそれが止水だったり流水だったりする。一方、成体はアカハライモリなどを除けば繁殖期以外は陸上で生活する。ただし両生類は肺のつくりが悪く(キタオウシュウサンショウウオは肺がない)、呼吸の大半は濡れた皮膚で行なわれるから、水辺で生活するか、水辺を離れたとしても湿潤な森林、草むらが必要である。両生類は水からの制約を大きく受ける動物群である。

乳白色のアケビの実の形をしたぶよぶよ寒天質の卵嚢を産むクロサンショウウオと無色でしわのあるバナナ形寒天質の卵嚢を産むトウホクサンショウウオは、共に早春の丘陵から低山、高山までの止水域を産卵場に行っている。その違いを特徴的に示すと、前者は魚類が生息しない池の中央部水底、後者は泉や雪解けのたまり水縁部であり、より止水性の強いのが前者、微流水性とも言えるのが後者である。夏に干上がるような水溜りは、トウホクサンショウウオ幼生には天敵の少ない場所であり、これが生息地の多い一因になっている。餌の不足は共食いによって解決している。幼生の行動は緩慢で、水底に静止していることが多く、その様子からサンショウカジカ(方言)と呼ばれている。

キタオウシュウサンショウウオも低山から高山まで分布が広いが、源流域のしぶきのかかる巨岩の隙間などに産卵しており、卵嚢の発見はむずかしい。孵化した幼生の体は細長く、指に黒い爪があり、溪流の流れの弱い岸の石の間で生活している。

以上3種のサンショウウオについては、1976年の緑の国勢調査で主要野生動物に選定し、生息状況と分布を調査している。1983年には絶滅のおそれのある、または学術上重要と思われる両生類・爬虫類34種(亜種も含む)に選定して調査を継続し、1987年に貴重な両生類に指定している。そのような情勢から生息地点の県内記録は多数蓄積した。一方その後の環境変化による生息地消失も、絶滅を危惧するほどには進行させていない。これは大規模な変化がそれほど多く行なわれていないことのほかに、行動範囲の狭い小動物ゆえの特質もからんでいる。森林の伐採、道路の敷設、圃場整備などが与える直接的影響は大きいが、開発地の隣に新たに生息地を確保するなどの例もあり、冷静な観察が要求される。

アカハライモリは、平地では水田や住宅環境の整備、農薬や洗剤使用の影響等により壊滅的に減少したが、山間部や山地の池沼では大きな変化が認められない。

平地から高山まで分布するアズマヒキガエルと低山までのニホンアマガエルも、調査がゆきわたっていないが、全体的には絶滅を危惧するような変化はない。

習性や生活史が特異なタゴガエルは、秋田県内では注目されたのが遅かったため情報が極端に不足だったが、1978年の緑の国勢調査に並行して県が分布調査対象種に取り上げたことにより調査が進み、県内の低山地一帯に広く生息することが予想できるようになった。

早春に産卵するアカガエル類のうちニホンアカガエルは平地性で、農耕地や住宅環境の整備によって生息場所、産卵場所を失い、著しく減少した。これによりヤマアカガエルと山麓部で競合している例が目立つようになったが、近年は少しずつ各地からの生息情報が集まっており、絶滅の心配はやや薄れている。ただしもともと県北部での記録のない種で生息地が少なく、今回準絶滅危惧に選定した。青森県に生息しないとすれば日本海側における分布の北限地はどこか詳細は不明であり、その解明が期待される。ヤマアカガエルは産卵が高山の池沼まで見られ、分布が広く個体数も多い。

トノサマガエルは稲作と密接な関係をもって分布を広げてきたが、その農業の近代化によって減少した種である。かつては密度の高い大集団を形成して広大な水田地帯を優勢に占拠していたが、圃場の区画整備と乾田化によって生息地が分断され、小型化し点在化した。また農薬使用の影響も大きかった。ツチガエルもこれにほぼ準ずる。本県ではまだ確認されていないが、トノサマガエルと競合するトウキョウダルマガエルが岩手県北上市で分布を広げており、横手盆地への侵入が懸念される。

ウシガエル（食用蛙）は、昭和初期（1927～1933）に養殖を目的として県内広く61以上の農家に約1万5千個体の幼生を配布したが繁殖させることができず、寒冷多雪の秋田では生息できないだろうと考えられていた種である。ところが1975年に南秋田郡の山間に民間人によって半ば戯れに放されたものが、管理が行き届いていない農業灌漑用溜池と八郎湖の調整池、承水路を拠点にして増えつづけ、分布を広げた。その分布拡大は今も続いている上、近年はさらに二次的な人為搬入とみられる遠隔地での繁殖も起こっている。

シュレーゲルアオガエルの生活史は山村の稲作に適應している。成体は夏中は林中にあつて、春、山際の水田が耕起され、水が張られると畦にあるネズミ穴等に産卵する。近ごろは畦にポリシートを貼って水漏れを防ぐ作業が行なわれたり、山間地での農薬使用の影響を受けているが、今のところ絶滅が危惧されるほど問題が進行していない。

モリアオガエルは吸盤が発達していて森にすみ、初夏池の水面に張り出した枝に白い泡状の卵塊を産みつける。雄4～6cm、雌6～8cm。体が大きいと生息するには外周りが藪で内部に風が入りこまないような湿った森林を必要とする。生息するには制限要因の多い本種だが、冬の大量の降雪と夏はフェーン現象の高温によって森林の発達のよい本県では、サンショウウオ3種とともに1976年以降連続して分布調査の対象にされたこともあつて、広く各地で記録されている。近ごろは里山の雑木林の管理が行き届かず、これが本種の生息に有利にはたらいっているようにも見える。

カジカガエルは晩春に河川上流の瀬の大きな石の下に産卵する。幼生は大きな吸盤で石に吸い付いて体を保っている。産卵期以降の成体は水辺を離れて森林内に生息する。本種は1978年の緑の国勢調査において県が主要野生動物に追加して調査を進め、各河川の上流部に広く生息していることがわかった。一時は河川の砂防ダムの建設が過剰気味に行なわれて生息環境の悪化が心配されたが、これの納まった今は安定を取り戻している。

以上、爬虫類両生類を通じて言えることは、人間の生活環境に接して生息する種のみならず人里から離れた場所で生活をしていると思われる種も決して人間の活動と無関係ではない、ということである。かつて人間とくすかに接触しながら生息圏を広げたと見られる事例は多々ある。たとえば高度経済成長期以前の林道の脇には、山の斜面から地下水がしみだして所々滞水している素掘りの浅い溝があつた。現在も路傍のその溝にトウホクサンショウウオやヤマアカガエルやアズマヒキガエル、モリアオガエルなどが産卵しているが、ほかにめばしい場所はない。これらの種はおそらく人間の刻んだ排水溝を基地としてさらに奥地へ分布を広げたとされる。かつては人間の自然利用が穏やかで、それに小動物もうまく適應していた。自然の豊かさはそのようにして維持されてきた。振り返って現在の合理性経済性追求の三面舗装の排水溝では小動物はすがるよすがもない。今後期待されるのは小動物に配慮した開発である。

（本郷 敏夫）

無尾目アカガエル科

ニホンアカガエル

Rana japonica Boulenger, 1879

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧

環境省2014：－



◆**国内外の分布** 青森県と岩手県の一部を除く本州、四国、九州、屋久島、種子島に分布する。八丈島には人為移入。日本国外では中国の中部、南部に分布する。

青森県での記録は1960年代の文献にあるが確実な標本がなく、現在は青森県内に生息しないとの見方が一般的である。このことは、東日本や西南日本ではニホンアカガエルが平地に生息しヤマアカガエルは山地に生息するが、東北日本ではヤマアカガエルが平地にも生息するとの見解とからめて理解されている。

いずれにせよ秋田県のニホンアカガエルは、日本海側における分布の北限地であることに注目したい。

◆**県内の分布** 県内の初記録は、大仙市花館で採集されたとする岡田の総説(1930)である。本種はその後「平地に生息するありふれたアカガエル」との認識のまま経過し、1960年代までは分布を考察するに足る記録がない。しかし籠屋(1970)は鹿角地方に産するカエル類に本種を挙げなかったし、その後収集された記録も、県央・県南部に限られた。現在生息が記録されている最北の地は1979年の能代市小友沼であり、近年の記録としては大潟村(2001)や能代市風の松原(2006)がある。

◆**本種の概要** 早春、山際の水田等に産卵するアカガエル類としては本種のほかヤマアカガエルがいる。ニホンアカガエルの卵塊は弾力があり、ヤマアカガエルの卵塊は粘着性があると言われるが区別しにくい場合もある。また前者の幼生の背部には1対の黒斑が現れるが後者のそれは全体が黒色であるとの違いも指摘されているが、これも常時すべてに判然、とは言えない。成体の特徴として確実なのは、①ニホンアカガエルでは背面体側を走る隆条が鼓膜の後背側でほとんど曲がらないのに対して、ヤマアカガエルでは鼓膜の後背側で外側へ曲がる、②ニホンアカガエルの口先は長く尖るのに対して、ヤマアカガエルは口先が丸い、③ニホンアカガエルの腹面には黒色の斑紋はないが、ヤマアカガエルの多くは下顎の縁に、あるいは腹面に黒斑が見られる、などでありこれらによって区別できる。

秋田県のニホンアカガエルは上に述べた北限地としての存在価値のほか、もう一つ注目すべき問題を抱えている。住田等の研究によって、わが国のニホンアカガエルは東部(一関)と西部(広島)の2種族に分けられているが、秋田個体群の酵素と血液蛋白の組成はそれら2種族とも異なるということが判明している。

◆**本種の現状** 調査はなお不十分であるが、①個体数が減少している、②生息条件が悪化している、の2点により準絶滅危惧と判定した。

環境省分布調査で使用している「5倍地域メッシュ」では秋田県全域が548区画に分けられる。その内、本種が記録されたのは40区画(本郷2007)となっている。ただし初期の記録にはすでに絶滅したと思われるものや、ヤマアカガエルと完全に区別することがむずかしいと言われる卵塊だけで記録し成体が観察されていないものも含まれており、その区画数は19を数える。絶滅したと考えられる地点としては大仙市花館や秋田市保戸野、秋田市千秋中島町などで、その原因は宅地化などの環境改変が挙げられる。現在は、例えば秋田市豊岩石田坂のようにヤマアカガエルの生息密度の希薄な山間草地荒地に進出したものが生存を続けている。一方、干拓前は湖底であった大潟村でも本種が観察されている。

◆**生存に対する脅威** 1960年頃から水田が大型農機に適するよう整理される一方、宅地化と住宅環境の整備が進んで、成体が生息する草むらと産卵に適する水たまりの両方がそろった場所が激減し、壊滅的に減少した。

◆**現在の保護対策** 近年は、耕作を放棄した水田が多くなった。一方、農薬使用量の減少などの影響も出始めたように思われる。成り行きを見極めたい。

(本郷敏夫)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

両生類参考文献

- 広瀬文男・富岡克寛. 1974. ニホンアカガエルとヤマアカガエルの卵塊の比較. 遺伝 28-3:108-111. 裳華房.
- 本郷敏夫. 1970. 秋田県産有尾両生類とそのすみわけ. 生物秋田 14:4-6. 秋田生物学会.
- 本郷敏夫. 1975. シュレーゲルアオガエルとモリアオガエルについて. 生物秋田19:3-6. 秋田生物学会.
- 本郷敏夫. 1974. タゴガエルの記録. 秋田自然史研究 2:1. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫. 1982. タゴガエルの秋田県内生息地. 秋田自然史研究 15:17. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫. 1982. 両生類爬虫類. 真木溪谷自然環境調査報告書:107-128. 秋田県.
- 本郷敏夫. 1988. 秋田県へのウシガエルの移入と定着. 秋田自然史研究 23:1-2. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫・中川信行. 1991. ニホンアカガエルの秋田県内分布. 特に秋田市石田坂における生息状況について. 秋田自然史研究 27:4-6. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫・沖田貞敏. 1996. 秋田県におけるヒノビウス属2種の分布. 生物秋田 38: 20-22. 秋田生物学会.
- 本郷敏夫. 1999. 秋田県の両生類相と分布状態解明の状況. 両生類誌 3:21-27. 新潟両生類研究会.
- 本郷敏夫. 2000. 秋田県におけるニホンアカガエルとウシガエルの生息状況. 千葉中央博自然史研究報告特別号 3:17-21.
- 本郷敏夫. 2000. 秋田県両生類爬虫類分布図:1-69. 秋田県環境と文化のむら協会.
- 井出嘉雄. 1939. 動物. 秋田県総合郷土研究:54-71. 秋田県師範学校・秋田女子師範学校.
- 籠屋留太郎. 1970. 生物学習に利用できる材料の減少. かたかご 8:1-2. 秋田県立花輪高等学校生物クラブ.
- 前田憲男・松井正文. 1989. 日本カエル図鑑:44-47. 文一総合出版.
- 松井正文. 1988. 琉球諸島以外のカエル目. 動植物分布調査報告書(第3回) 両生類・爬虫類:168-171. 環境庁.
- 向山満. 1990. 青森県産カエル類の分布に関する疑問. 採集と飼育 52-5:228.
- 奈良典明. 2000. 爬虫類・両生類. 青森県の希少な野生生物:161-167. 青森県.
- 西岡みどり. 1975. カエル. 遺伝 29-3:52-58. 裳華房.
- 岡田彌一郎. 1930. 日本産蛙総説:91-96. 岩波書店.
- 岡田彌一郎. 1937. 北日本. 東北地方の両生類について. 斎藤報恩会博物館研究報告 12:192. (英文).
- 住田正幸・西岡みどり. 1994. 酵素と血液蛋白の電気泳動解析によって明らかにされたニホンアカガエルの遺伝的分化. 広島大両生研報告 13:137-171. (英文).
- 本郷敏夫. 2007. 秋田県両生類爬虫類分布図追補改訂版2007. 秋田両生類友の会.

Fresh Water Fishes



淡水魚類

Red Data Book of Akita Prefecture 2016
Animals I

淡水魚類概説

1 淡水魚類が生息している場所

本県には、多くの河川や湖沼がある。河川は雄物川、米代川、子吉川の三大河川をはじめ352河川あり、総延長は3,185kmに及ぶ。河口部には海と関係を持つ汽水域があり、上流部には7月でも雪が残る場所もある。湖沼には十和田湖、八郎湖および田沢湖のほか、男鹿半島の目瀧火山群や大沼、板戸沼などの天然湖沼に加え、2千箇所以上ものため池と無数の灌漑用水路や水温が周年一定の湧水池もある。

このような場所に淡水魚や汽水魚が生息している。これを各種ごとに調べてみると、その分布はきわめて限定していることに気づく。それは水温や水質、底質、流速など物理的に、また、産卵や餌料、隠れ場所や被食など生物的、生態的に、それぞれがそれぞれに適応した場所だけに生息することが可能だからだ。ここでは、いくつかの生息場所を見てみよう。

① 雄物川

雄物川は流路延長約1,420kmの県内最大河川で、最上流ではニッコウイワナが生息しており、下流に行くに従い、サクラマス（ヤマメ）、ウグイ、カジカ大卵型などが生息する。支流の上流ではハナカジカが生息している。中・下流の河岸が湾入し、水生植物が繁茂して流れのゆるいワンドには、トミヨ属淡水型、キタノアカヒレタビラやヤリタナゴなどタナゴ類が生息している。一方、オオクチバスやブラウントラウトなどの国外外来魚が在来魚に大きな影響を与えているとともに、最近是国内外来魚のギギが激増している。河口の汽水域にはアカエイ、マアジ、ショウサイフグなどの海産魚も認められている。また河口は、春季にはシロウオ、ニホンイトヨの産卵親魚や、カマキリ、カジカ中卵型の稚魚が遡上する。しかし、これら遡上・降下し海と川を利用する通し回遊魚は、大きく激減している。雄物川に生息する淡水・汽水魚類は、これまでに74種が確認されている。そこには、国内固有種で北限のホトケドジョウ、アカザ、トミヨ属雄物型がいるほか、水系の田沢湖には絶滅したクニマスがいた。

② 小河川

県内には流程がきわめて短く、河口が礫の状態そのまま海に流下する独立河川が少なくない。そこには、カンキョウカジカやルリヨシノボリ、ミミズハゼなどが認められる。河口の流速が遅く砂泥底の小河川ではシロウオ、スミウキゴリ、シマウキゴリなどが生息している。これらの小河川はウグイやジュウサンウグイを除き、コイ科魚類は少ない。

③ 湧水

奥羽山脈の西部には扇状地が分布し、そこには周年13℃前後の湧水とそこから流れる水路があり、水生植物や水生昆虫などを含め、トミヨ属雄物型に代表される特徴のある湧水生態系が認められる。しかし、湧水は平野部に分布していることから、圃場整備や水質悪化等により水生生物は大きな影響を受けており、たとえば、仙北市周辺の地元中学生が1984年に行った調査では31か所の湧水を確認したが、同様の調査を2015年に実施したところ7か所までに激減していた。

④ ため池と水路

完全に干出しないため池にはシナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、ギバチなどが生息し、その水路にはホトケドジョウ、ドジョウ、メダカ北日本集団などがある。しかし、近年は釣りを目的としたオオクチバスが密放流され定着し、生態系にきわめて大きな影響を及ぼしている。また、国外外来魚のカラドジョウが県北から県南まで広範囲に侵入している。

⑤ 八郎湖と船越水道

干拓前の八郎湖は面積がおおよそ22,000ha、平均水深3mの、広さで日本第2位の大きさの海跡湖であった。しかし、1957年からの干拓事業により水道部のショートカットや防潮堤が設置され、完成した1977年には4,730haの淡水が残された。現在、湖内では毎年ワカサギやシロウオが漁獲されているが、オオクチバスによりジュズカケハゼ広域分布種や小型のコイ科魚類は激減している。流入河川の馬場目川には、上流にニッコウイワナやヤマメがいるほか、

下流にはギバチ、カジカ大卵型なども生息している。河口の船越水道は汽水域で砂泥底が広く分布しており、特殊な環境となっている。そこには県内では、ここでしか確認されていないチクゼンハゼとヒモハゼがいる。また、ダイナンウミヘビ、マイワシ、ホッケなど偶発的ではあるが多くの海産魚が確認されている。現在までのところ、八郎湖水域で認められた汽水魚や淡水魚は117種である。

2 淡水魚類の生活型、在来魚と外来魚

これまでに認められた汽水魚や淡水魚は153種である。これを海水と淡水との関係から生活型により分類すると、次のとおり大きく3グループに分けることができる。この生活型の種数と割合を示す。

(1) 純淡水魚：淡水でしか生活できない魚種…… 52種, 34.0%

一生を淡水で生活し、塩分耐性がなく海水で生息できないもの。ヤリタナゴ、ドジョウ、ギバチなどのほか、メダカ北日本集団、トミヨ属淡水型、ジュズカケハゼ広域分布種など

(2) 通し回遊魚：海と川を移動する魚種…… 34種, 22.2%

生活史の中で海水域と淡水域の両方を利用するもので、産卵のために河川から海に降海するニホンウナギ、カマキリがいる。逆に、海から淡水に産卵のために遡上するカワヤツメ、サクラマス、シロウオなどや、海と淡水を往復するアユ、ルリヨシノボリ、スミウキゴリなど

(3) 周縁性淡水魚：海面に生息するが淡水域に出現することもある…… 67種, 43.8%

本来は海産魚であるが、一時的に汽水域や淡水域を利用するもので、スズキ、ボラ、メナダ、マハゼのほか、偶発的に淡水域で確認されたことがあるアカエイ、マイワシ、マサバなど

なお、この魚類相153種には外来魚が含まれている。外来魚とはそこにもともといなかったが、国内や地域に人の活動によって他の地域から入ってきたもので、海外から国内に入った国外外来魚と国内産で県内にいなかったが県外から持ち込まれた国内外外来魚とがある。

国外外来魚はソウギョ、ハクレン、ギンザケ、タウナギ、ブルーギルのほかタイリクバラタナゴ、カラドジョウ、ニジマス、ブラウントラウト、オオクチバス、カムルチーの11種（うち前5種は定着せず）である。国内外来魚はカワバタモロコ、ゼゼラのほか、アブラボテ、ゲンゴロウブナ、タモロコ、ビワヒガイ、モツゴ、ギギ、ヒメマスなど14種（うち前2種は定着せず）である。これらのとおり、県内の外来魚は合計25種で、全体の16.3%に及ぶ。

結局、純淡水魚のうちもともとそこに生息する在来魚は27種で、通し回遊魚34種を合わせても61種である。さらにこの中から、1940年にクニマスを絶滅させている。こうやって見ると、県内の魚種数は比較的多いようだが、実際には、現在、守るべき魚種の少ないことには驚くほどである。

3 淡水魚類の現状

現在、県内に生息している各魚種について、詳細な分布や個体数の推移などの実態は、ほとんど不明である。また、なぜそのように変化したのか、その具体的な理由や環境変化とその実態なども把握されていない。このため、ここでは魚種ごとではなく、「存続を脅かしている要因のタイプ区分」（環境省,2014,一部改変）のいくつかの例について考えてみよう。

① 森林伐採、湖沼開発、河川開発、海岸開発、湿地開発、圃場整備

・河川や湖岸を覆う森林が伐採されると、ニッコウイワナ、ヤマメ、ハナカジカ、カジカ大卵型などは、水温が上昇

する、土砂が流亡する、土砂によって石の下の隙間がなくなり隠れ場所を喪失する、水が濁る、保水力が低下する、樹上からの落下昆虫がなくなり餌料が不足するなど大きな影響を受ける。

- ・ 河川や河口の護岸による河道の直線化は、平瀬・淵の単純化や河床の平坦化により、ほとんどすべての魚類を含め多くの生物の多様性を著しく悪化する。

- ・ 圃場整備は、田んぼだけではなく、周辺の水路や湧水なども改変されたり埋設されたりして、ドジョウ、トミヨ属雄物型など広範囲の魚類に大きな影響を与える。乾田化により一定期間干出されるため、それまで周年生息していた場所が断絶する。特に、河川から水路を経て水田に入り、そこを産卵場所とするコイ、ギンブナ、ナマズなどが利用不能となる。

② 道路建設、ダム建設

- ・ ダムや堰による水量の減少は、河川の水温環境を大きく変化させる。ダム直下の放水における極端な水温低下、逆に流量減少による極端な水温上昇などである。水量の増減がなくなることによりフラッシュ効果がなくなり、下流の礫の隙間がなくなったり、砂泥が堆積したりして礫の浄化ができなくなったりする。また、横断構造物は上流・下流間への移動を妨げる。これらはニッコウイワナ、カジカ大卵型など多くの魚種にきわめて広い範囲で影響を与える。

- ・ 道路関係では、建設中の河川への泥の流下のほか道路に散布される塩などの雨水による流下などの問題がある。

③ 水質汚濁、農薬汚染

- ・ 魚類は基本的には一生を水域内で生息する。その意味で、水質汚濁は、すべての魚類に対して魚種や大きさにより程度は異なるものの影響を及ぼす。また、八郎湖のように富栄養化シアオコが異常繁殖すると、生息魚類は酸欠や透視度の低下による水草の減少など大きな影響を受ける。

- ・ 農薬は基本的にすべての魚類に影響を及ぼす。毒性は急性の場合だけではなく、次世代に影響を及ぼすこともある。しかし、魚毒性試験に関するコイ等若干の資料があるだけで、不明点が多い。

- ・ 淡水性二枚貝はタナゴ類の産卵基質に必須であるが、重金属や農薬に非常に弱く、結果的にタナゴ類が減少することになる。

④ 漁獲、採捕

- ・ 婚姻色が美しいタナゴ類や巣をつくるトゲウオ類など、飼育するために捕獲したり、販売したりすることが少なくない。また、捕獲により、産卵場所や生息場所を破壊することもある。

- ・ 希少種を保護するための法律や条例はあるが、現在のところ対象種は少なく、また、実行するための経費も不足している。

⑤ 外来魚による捕食・競争・交雑、管理放棄

- ・ オオクチバスは密放流などにより広く分布するようになったが、その背景には意図的な積極活動のほか、本種は寿命が長い、産卵数が多い、稚魚まで親魚が保護する、摂餌対象が広範であるなどの特徴がある。現在、さまざまな水生生物が大きな被害を受けているほか、八郎湖などで漁業被害も大きい。閉鎖された小型のため池では、キタノアカヒレタビラ、ゼニタナゴ、シナイモツゴなどが壊滅した事例も少なくない。

- ・ 1970年代以降、国内外来魚であるモツゴが県内の河川、湖沼に分布するようになり、同属で近縁の在来魚であるシナイモツゴと交雑し、後者は絶滅した事例も多い。

- ・ 小型のため池では、管理放棄によりヒシ類が全面に繁殖し底面では枯死し堆積され、酸欠や栄養循環がとどまりシナイモツゴが絶滅したり、ため池自体が埋設したりしている。

⑥ 近親交配

ゼニタナゴやシナイモツゴは小型のため池に孤立して生息しており、その個体数もきわめて少ないことから、奇型の出現や繁殖の低下など遺伝的多様性が低くなることが懸念されている。

4 淡水魚類の保全

淡水魚類は、環境との対応の中で生きている。本来、これらは「普通の魚」で、人間が漁業などで利用し地域住民と魚には親しい関係があった。しかし、その関係は「自然のしくみを基礎とする真に豊かな社会をつくる」こと（生物多様性国家戦略2012-2020）に反して、開発や人間に持ち込まれた外来魚により別の方向へ行こうとしている。

レッドデータブックは、県内に生息する「普通の魚」が「絶滅のおそれのある魚」となり、それがいつの間にか「絶滅した魚」となることがないためのもので、内容的には、県内の分布、本種の現状、生存に対する脅威、などについて述べている。この観点から、淡水魚類の保全のために考慮すべき事項について述べる。

① 種ごとの生活の実態把握

対象とする魚が、何を食べ、いつ、どこで産卵し、普段はどこに生息していて、摂餌や捕食、他の生物との関係はどうなっているのか、季節の変化や発育段階が環境とどのように対応しているのかなどを把握する中で、実際的な保護が可能となる。

② 生活場所の構造的把握と保全

河川には、瀬と淵を基本に、平瀬、早瀬、淵と連続する構造があり、そこにはワンドと呼ばれる湾入部や中州も存在している。これらの要素は、水深、流速、底質などの組み合わせにより、生息魚類にとって複雑で多様な機能を提供し、各魚種はこのような構造に対応して生活している。このことから、生活場所の量的・質的把握とともに、その保全が必要となる。

③ 水系のネットワークと連続性の確保

河川であれば、本川、支川、それに連なる水路などが同じ水系として存在している。また河川は、上流、中流、下流、河口、海面と連続した水域でもある。湖沼やため池においては、湛水域と流入河川、流出河川は一体のものとしてある。湧水とそこから流出する水路も同様である。各魚種は、産卵、稚魚期、摂餌などのさまざまな生活をこのようなネットワークと連続性の中で完結している。ダム、頭首工、落差工、三面張りなど関係性の断絶は致命的な影響を与えることになる。このことを十分に理解し、水系のネットワークと連続性の確保が必要である。

④ 陸域と水域との関係の維持

溪畔林や河畔林、河畔植生などと呼ばれる陸域は、そこに生息する魚類にとっては餌料の供給、待避場の提供、産卵場の形成、土砂の流失防止、水温上昇の抑制などの機能がある。このような陸域と水域との接点（エコトーン）を確保・維持する必要がある。

⑤ 淡水魚類の多様性の保全とモニタリング調査

淡水魚類を保全するためには、種の固有性に留意し、対象種の状況を継続して把握する必要がある。その際は、自然の不確実性を踏まえて予防的に対応し、国、県、市町村とともに、NPO、地域住民などすべての関係者が参加したモニタリング体制の構築が必須である。

(杉山秀樹)

サケ目サケ科

クニマス

Oncorhynchus kawamurae Jordan & McGregor, 1925

秋田県2016：絶滅

秋田県2002：絶滅

環境省2014：野生絶滅



◆国内外の分布 秋田県田沢湖だけに分布していた固有種。

◆県内の分布 秋田県田沢湖だけに分布していた固有種。

◆本種の概要 クニマスは1925年にJordan and McGregor により田沢湖に生息する新種として報告されたが、わずか15年後の1940（昭和15）年に玉川の強酸性を湖内に導入したため絶滅した。田沢湖は雄物川水系にあり、水深423.4mと日本最深の湖で、本種のほかウナギ、コイ、ウグイ、アユ、イワナ、ヤマメ、ギバチなどさまざまな魚種とともに生息していた。約60人の漁業者がおり、本種は主として水深90m前後、水温4度で、全長25～35cm、体重250～400gのものが年間6万尾程度漁獲されていた。1903年（明治36）年にふ化場をつくり採卵親魚の捕獲が行われていたが、その時期は9月から翌年の4月までの長期間に及び、盛期は1～3月であった。

本種はヒメマス（ベニザケの残留型、陸封型）の近縁種であるが、ヒメマスの天然分布域（北海道阿寒川水系の阿寒湖と網走川水系のチミケップ湖）よりさらに南に位置していた。

クニマスは田沢湖が日本海と連続していたにもかかわらず、降海型や残留型とは異なり、スマルトは出現せず、湖内で一生を過ごしていた。

本種の特徴は①体色が黒色であること(the dark color)、②体にも鱗にも斑点がまったくないこと(the lack of spots)、③鰓条骨数が少ないこと、④幽門垂数が少ないことのほか、⑤成熟した雄個体でも鼻曲がりにはならないこと(not hook-nosed)などである（Jordan and McGregor, 1925）。

◆本種の現状 現在の田沢湖はpH5.5前後で、ウグイ以外の生息は不可能である。本種の絶滅時期は特定できないが、田沢湖に玉川から導水したのが1940年1月であることから、この時期であろう。現在、湖内の水質が酸性であるほか、水深の変動に伴う湖岸の崩壊とこのためのコンクリート化、土砂の堆積、流入河川の枯渇など多くの問題がある。

◆特記事項 1930年～1939年に本種の発眼卵が長野県、山梨県、富山県、滋賀県などに移出されていた記録があり、最近、山梨県の西湖において本種が生存しているとの報告があったほか、同本栖湖では本種とヒメマスの交雑の報告があった。

唯一の分布域であった田沢湖では絶滅していることから、本県においては絶滅とする。

（杉山秀樹）

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

コイ目コイ科

ゼニタナゴ

Acheilognathus typus (Bleeker, 1863)

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧IA類



◆**国内外の分布** 日本固有種で、秋田県が分布の北限である。関東地方や青森県を除く東北地方を主体に1都11県に分布していたが、山形県、新潟県、群馬県、栃木県、千葉県、東京都、埼玉県、神奈川県、神奈川県の1都7県で絶滅した。現在も生息が確認されているのは秋田県、岩手県、宮城県、および福島県のきわめて限定された範囲である。

◆**県内の分布** 本県では八郎潟や雄物川など大型の湖沼や河川に生息していたが、現在は県南の小型のため池や秋田市内の沼など数箇所では認められている。最近、雄物川水系の中流で繁殖していることが確認された。

◆**本種の概要** 全長8cm程度で、大型個体は10cmを超える。髭はなく、鱗はきわめて小さい。産卵期が秋で、二枚貝に産卵する。オオクチバスなど外来魚による直接的、間接的脅威が大きい。生息環境として二枚貝が安定して生息しているとともに、外来魚が侵入しない場所が必要である。

形態：口の角に髭はなく、産卵期は9月から10月である。鱗はきわめて小さく、タナゴ亜科全体の中で特異である。背鰭は大きく、各鰭条に沿って黒色であるが、中間に無色の部分があるため縦に太いすじが認められる。腹鰭の前縁は白色が明瞭である。側線上方肩部に濃い青色の斑紋が認められる。雄の婚姻色は頭部および体側面は紫紅色で、鰓蓋から体側後方にかけて鮮紅色ないし茜色を示す。雌の産卵管は黒色で、伸長すると尾鰭を超える。

生態：秋季にはヌマガイ、タガイ、イシガイなどの比較的小型の二枚貝に産卵する。卵は濃い黄色の米粒形をしており、貝内に産卵された卵は5日前後で孵化するが、そのまま貝の中で生育し、翌春5月下旬から6月に稚魚が浮出する。貝から浮上した稚魚は、6月に全長15～20mmとなる。遊泳力は弱く、抽水性の水生植物の間で生育する。その後成長は条件により大きく異なるが、7月に20～30mm、9月に50～60mmと急激に成長し、9月下旬には成熟する。一部は60～80mm程度となり、再び秋季に産卵する。成長の悪いものは年内に成熟せず、翌年になる。産卵は9月中旬から始まり、9月下旬にピークとなり、10月中旬には終了する。餌は主としてアオミドロなど緑色系状藻類で、春季から夏季には驚くほど大量に摂餌する。

◆**本種の現状** 八郎潟の干拓前には生息していたが、干拓後、昭和40年代には絶滅したと推察される。横手市の西沼で1984年に生息を確認したが、公園の整備事業にともない池を干出させたことにより絶滅した。

県南では本種が確認されたため池もあったが、オオクチバスの侵入により絶滅した場所がある。このほか、池沼・河川の改修・圃場整備による埋め立て、ため池の管理放棄による水質悪化とヘドロの堆積による二枚貝の減少も影響が大きい。そのほか、二枚貝幼生が寄生するハゼ科魚類のオオクチバスによる食害、アメリカザリガニによる小型二枚貝の食害、コイによる二枚貝の食害などによる本種の産卵基質となる淡水二枚貝の減少が懸念されている。

タイリクバラタナゴの侵入と競合、観賞魚業者やマニアの捕獲による被害も大きい。

県内で生息しているのは数箇所であるが、いずれも危機的状況にある。

◆**生存に対する脅威** ため池の埋立・改修、オオクチバスの放流、観賞魚業者の採捕のほか、ニシキゴイの放流、タイリクバラタナゴ、アメリカザリガニ、ウシガエルの分布と生息増加などによる本種の存続が懸念される。

◆**現在の保護対策** 福島県では県条例の特定希少野生動物により捕獲、飼育が禁止されている。岩手県では花巻矢沢地区が県の天然記念物に指定されている。

本県や宮城県では保全池の造成、NPOによる保護活動、調査・研究などが行われている。

◆**特記事項** 状況に応じて、確実な場所で飼育するなど種の存続を図る必要がある。

(杉山秀樹)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

コイ目コイ科

シナイモツゴ

Pseudorasbora pumila pumila Miyadi, 1930

秋田県2016：絶滅危惧IA類
 秋田県2002：絶滅危惧種IA類
 環境省2014：絶滅危惧IA類



◆**国内外の分布** 日本固有種で、本州の青森県を除く関東以北と中部地方の一部に分布する。最近では、日本海側は秋田県、山形県、新潟県、太平洋側は岩手県、宮城県、福島県、中部地方の長野県に生息する。

◆**県内の分布** 県北部、中央、県南部の池沼を主体に生息する。

◆**本種の概要** **形態**：最大全長8cm程度で、有孔鱗が体前方に0～5枚ある。近縁種のモツゴは有孔鱗が肩部から尾部まで連続する。両種を比較すると本種は頭部が大きく、尾柄が高く、体幅が厚い。背鰭及び尾鰭の外縁が尖らず丸みがあり、尾鰭の湾入は浅い。また、体色は黒褐色で銀白色の金属光沢を持たないなどの点で、モツゴと区別できる。4～5月になると、雄は頭部から各鰭まで黒色の婚姻色を呈し、頬や吻などに白色の追い星を発現する。一方、雌の体色は鮎色になり、体側に黒色の縦縞が現れる。なお、濃尾平野に生息するウシモツゴ *Pseudorasbora pugnax*は、体側に黒色縦帯を欠いていることから識別可能である。

生態：産卵期は4～5月で、その時期の雄は全体的に強く黒色となり、頭部に大型の追い星を発現する。産卵は倒木の下面、石の側面など比較的安定した基質で行われ、雌は一層（円状）に卵を産み付け、雄は孵化まで保護する。およそ10日で孵化し、数日で微小な甲殻類を捕食するようになる。1年ないし2年で成熟し、雄は雌よりも大型になる。寿命は2～3年であると推測される。

生息環境：ジュンサイなどの植物が覆う池沼などの止水域や、流れの緩やかな水路などに生息するが、大型の池沼より灌漑用の小さなため池などに多く見られる。底質は腐食質に富み、透明度は比較的低く、富栄養化された水域に多く認められる。キタノアカヒレタビラやジュズカケハゼ広域分布種と同所的に認められることもある。

◆**本種の現状** 関東では1950年代に絶滅したと考えられている。山形県では1960年代後半、秋田県では1970年代後半までに、多くの生息場所で絶滅した。秋田市男湯では1978年には本種の生息が確認されていたが、その後オオクチバスが放流され、2000年には本種は確認されなくなった。現在も認められている生息場所は、他の水域から隔離された小型のため池で、モツゴやオオクチバスなどが侵入しない、きわめて限定された地域である。

本種が生息するため池では、個体数が比較的多く、同所的に生息している魚種はギンブナ、ドジョウ、メダカなど数種である場合が少なくない。なお、理由は不明であるが、10年間程度の間に個体数が大きく激減したり、姿が見えなくなったりした事例もある。

◆**生存に対する脅威** モツゴが侵入することにより雑種が出現し、雑種が不稔であることから数年でモツゴに置き換わる事例が多く認められている。由利本荘市のため池では、モツゴが確認されると短期間に雑種が出現し、2013年には完全にモツゴに置換している。そのほか、オオクチバス・ブルーギル等外来魚の侵入、ため池の改修、ため池の管理放棄による生息環境の悪化などによる影響も大きい。横手市のため池では、2014年にオオクチバスの密放流が行われたことにより全滅している。また希少になったことで、観賞魚として業者の採集事例もある。

◆**現在の保護対策** 大森山動物園内の塩曳潟では、本種を含め他の希少魚とともに保全対策が行われている。

◆**特記事項** 本種が生息している場所にモツゴが侵入すると、雑種が出現し、多くの場合は数年後には本種が絶滅しモツゴに置換される。雑種は、側線有孔鱗数のほか、体幅や鰭の形状などが様々に出現する。

(木村青史)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

トゲウオ目トゲウオ科

トミヨ属雄物型

Pungitius sp. 2

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧IA類



- ◆**国内外の分布** 日本固有種で、本州東北地方の秋田県雄物川水系と山形県最上川水系の限定された一部にのみ分布する。
- ◆**県内の分布** 雄物川水系の扇状地に位置する仙北市、湯沢市、大仙市、美郷町および横手市の湧泉およびそれと連続する水路を中心に分布している。河川では、雄物川本川および玉川の湧水があるワンドや湧水が豊富な水系のごく一部など限定された場所にわずかに認められている。
- ◆**本種の概要** **形態**：本種の全長は6cm程度で、背部に9本前後の棘を持つ。トミヨ属淡水型と形態的に似ており一部地域では同所的に分布する地点もあるが、両種の識別は比較的容易である。トミヨ属淡水型は、鱗膜は透明で体色は銀白色が強く、体側は緑色の不規則な雲状斑が目立つのに対し、本種の背鱗棘は低く、背鱗およびしり鱗の鱗棘膜は黒色で、体色は一様に灰黒色ないし灰緑色である。なお、本種の棘鱗膜が黒色であるという特徴は全長20mm程度の小型個体や雌においても認められ、産卵期において雄は黒色が強まり、全身がほぼ真っ黒になる。鱗板数は生息場所により変異に富み、33枚前後で連続しているもの、途中で欠け不連続のもの、体後方だけに5～8枚前後を有するものなどが認められている。
- 生息環境**：生息池では、水温は年間10.0℃～20.0℃の範囲で変動するが、湧水自体は年間を通じて13℃前後と安定しており、きわめて清澄な水質である。湧水量は積雪量の変化などによりきわめて変動が大きく、5～8月の灌漑期と比べ、非灌漑期の翌1～3月は積雪の影響を受けて大きく減少する例が多い。水生植物の存在は重要で、営巣支柱としての利用や外敵からの隠れ場所のほか流速緩和効果も認められる。構成種としてはスギナモ、コカナダモ等の沈水植物、ミクリ属、セキショウなどの抽水植物が認められる。本種と同所的に生息する魚種はドジョウのほかスナヤツメ、アブラハヤなどで、その量も少ない。
- 生態**：産卵期間は3月から7月と長期に及び、4月から6月が盛期であることが多い。巣は直径3cm程度で、岸から30cm以内、水深30cm以下、流速5cm/秒以内に多く認められる。巣の基質は直立植物のほか、枯れ枝やヤナギ類の根なども利用される。当歳魚は12月には35mm前後に成長し、翌春には産卵する。一部の個体は65mm程度になり2～3歳まで生残すると推察される。摂餌対象はトビケラ目、ワラジムシ目（ミズムシ）、ハエ目（ユスリカ）、ヨコエビ目、ミジンコ目などのほか、本種の卵などである。
- ◆**本種の現状** 基本的には、湧泉単位で産卵場所ごとに生息している。圃場整備や河川工事などにより湧泉や水路が消滅しており、仙北、雄勝地方では大規模な圃場整備事業が実施され、湧水の枯渇や水路の改修など本種に大きな影響を及ぼしている例が少なくない。
- ◆**生存に対する脅威** 本種は湧水域に生息するため、河川の改修、圃場整備、井戸等地下水の過剰使用による湧水量の減少や枯渇、水質の悪化やコイによる水生植生の破壊などで生息箇所と生息個体数が激減している。この状態が継続した場合には、存続が困難であると考えられる。
- ◆**現在の保護対策** 秋田県横手市の湧泉3か所は1998年に秋田県指定天然記念物になったほか（平成10年3月20日付け）、圃場整備事業に関連して保全池や保全水路の整備による保護の取り組みが行われている。
- ◆**特記事項** 本種の分布は山形県の一部地域と本県雄物川水系の一部地域に大きく2か所に分かれる。また、鱗板も地域により対応しており、前者のものは「変異型」と呼ばれるており、後者は「鱗板連続型」と「鱗板不連続型」に分かれる。トミヨ属に関しては分類学的な調査が遅れており、保護に当たっては遺伝的な多様性に配慮する必要がある。

(杉山秀樹)

トゲウオ目トゲウオ科

ニホンイトヨ

Gasterosteus nipponicus Higuchi, Sakai & Goto, 2014

秋田県2016：絶滅危惧IA類
 秋田県2002：絶滅危惧種II類
 環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



◆**国内外の分布** サハリンから日本海沿岸域、北海道沿岸域および利根川水系以北の太平洋沿岸域に生息する。

◆**県内の分布** 雄物川（秋田市）、米代川（能代市）、八郎湖、西目川（由利本荘市）など。

◆**本種の概要** 本種は背鰭の前に鋭い棘が3本あり、その前方の2本は強大である。腹鰭にも1対の強大な棘があり、臀鰭前方にも1本の棘を持つ。大型の鱗板は尾柄部にかけて連続するが、肛門直上の鱗板から急激に大きさが小さくなっている。また尾柄部隆起骨が鱗のように膜状である。本種はすべてが遡河回遊型で、大河川の河口域や八郎湖の船越水道などで遡上期の親魚が普通に認められ、釣りの対象にもなっていた。しかし、近年はいちじるしく個体数が減少しており、確認することが困難である。

4月上旬になると産卵のために海から河川に遡上し、4月中旬から5月中旬にかけて産卵する。その際、雄は流れの緩やかな水深の浅い砂泥底に営巣し、雌を呼び込み産卵させる。5月下旬から6月に3cm前後の稚魚が降海する。河口から1km程度までの範囲に出現することが多いが、まれに、大河川では20km以上も遡上することがある。

◆**本種の現状** 八郎湖では、1980年代までは河口から数百mで定置網による漁獲や、その周辺の湿地で釣りが行われていた。しかし、2000年ころから激減し、2010年以降は姿が全く認められなくなった。雄物川では、2000年代初めまで河口から約1kmの間で釣りが行われていたが、そのころから本種が釣れなくなり、釣り人も皆無となった。

八郎湖における1988～2008年までの漁獲量は、増減はあるものの、1991年の498kgをピークに、以下、毎年、順に39kg、21kg、35kg、3kgと漸減し、2003年以降の漁獲量は全く認められていない（漁獲量は八郎湖増殖漁業協同組合による。漁獲場所は沿岸から湖内に遡上する定置網により漁獲したもの）。山形県最上川や新潟県信濃川においても、本県と同様の状況で最近は全く確認されていない。

本種は遡河回遊型であることから、海から河川への遡上通路とともに、遡上後の産卵場所に至る通路及び産卵適地が必須である。しかし、河口堰の建設、河口域から中流域での河川改修、排水の流入による水質悪化などにより、遡上数は激減している。また、激減した状況では、漁獲や釣り・採集も大きな影響を与えている。

◆**生存に対する脅威** 大部分の河川で、生息数がいちじるしく減少している。特に、営巣は河川内ではなく、ワンドや流入する支川や水路で行われることが多いことから、河川改修によりこれらとの交流が遮断されると大きな影響を受ける。また、遡上力が弱いことから、下流部に床固めや落差工ができるなど個体群が絶滅するおそれがある。

原因は、河口堰の建設、河口域から中流域での河川改修、排水の流入による水質悪化などによるものである。

◆**特記事項** 十和田湖に生息しているのはイトヨの陸封型で、自然分布ではなく青森県十和田市相坂から移殖されたと考えられている。

（杉山秀樹）

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

コイ目ドジョウ科

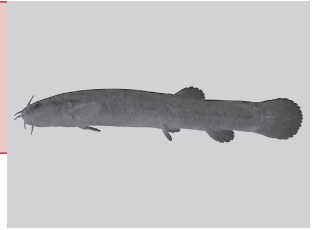
ホトケドジョウ

Lefua echigonia Jordan & Richardson, 1907

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧IB類



◆**国内外の分布** 日本固有種で、青森県を除く東北地方から三重県、京都府、兵庫県に分布。

◆**県内の分布** 秋田市、にかほ市、大仙市、仙北市に生息する。

◆**本種の概要** **形態**：本種は、1年で雄は全長40～50mm、雌では50～60mmに成長し、最大では全長約90mmにまで達するものもいる。雌の方がやや大きく、大半は1年で成熟し寿命は約2年である。体は全体的に円筒状で太く短く、頭部は縦扁し尾部は横扁しており、尾鰭の先端はまろく突出する。鱗は大きく楕円形で、体色は黄褐色や茶褐色、赤褐色などで雌雄差はない。口は吻端の下側にあり、髭は4対で3対は上唇にあり1対は鼻孔が発達したものである。

生態：他のドジョウ類より浮き袋が発達していることから、中層部を遊泳することが多い。雑食性でカゲロウ目、ユスリカ科の水生昆虫やプランクトン（小型甲殻類など）、藻類（緑藻や紅藻・黄緑藻、ラン藻等）などの他、小型のエビや稚魚も食する肉食傾向の強い雑食性である。本種は、10～27℃の範囲が好適水温であるが、水温の変化にともない夏季に分散していたものが秋季～冬季の水温低下時には湧水域に移動し越冬する傾向にある。普段は単独で行動するが産卵期には蟻集し、5月下旬～6月上旬に数尾の雄が1尾の雌を追尾するかたちで水草や枯れ草等に直径1.2～1.4mmの球形で粘着質の卵を産み付ける。卵は2～3日で孵化する。

生息環境：生息地の多くは、比較的水深の浅い、丘陵地や平野部の小川、水田脇の小水路などの緩流域で、ドジョウと同所的に認められることが多い。湧水が存在する砂泥底に多く生息するが、砂礫底でも認められる。産卵基質や避難場として利用する植生は、ヨシ帯より低茎の草本群落を好む傾向が強い。

◆**本種の現状** 日本海側では秋田県が分布の北限となる。県南部の沿岸部では認められていたが、最近になって、雄物川水系の秋田市の湧水池や仙北市の小河川でも局部的に確認された。県内では、丘陵地に面した水田に隣接する砂泥底の小水路を主な生息場としている。水田水域との関わりが大きいことから、農薬などの汚染水の影響を受けやすい環境にある。県内の生息地は局所的に分布しており連続性がなく、各生息地における生息数も激減し生息基盤は脆弱な状況にある。

◆**生存に対する脅威** 水田に隣接する水路や細流などに多く生息するため、圃場整備に伴う水路のコンクリート化、湧水の枯渇、移動経路の分断、農薬使用などにより激減した。各地域個体群が局所的に点在することから小規模な工事等でも容易に消滅する危険性が大きい。また、カラドジョウなどの外来種の侵入も大きな脅威となる。

◆**現在の保護対策** 2002年に秋田淡水魚研究会により、由利本荘市内の生息地において緩流域の創設や泥上げ作業をするなど、保全のための水路整備が行われた。

◆**特記事項** 県内全域では、生息実態が十分に把握されていない。湧水のある小河川、水路等に着目した生息分布調査による現状の把握が必要である。保全を目的としたビオトープや生物多様性保全施設などにより守られた事例もあることから、県内でも早急に積極的な取組が望まれる。

(草薙利美)

ナマズ目アカザ科

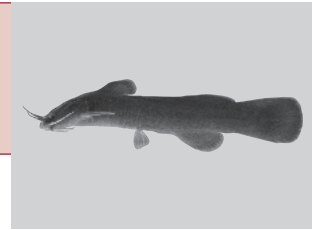
アカザ

Liobagrus reini Hilgendorf, 1878

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：絶滅危惧II類



◆**国内外の分布** 日本固有種で太平洋側は宮城県、日本海側は秋田県雄物川以南、四国、九州

◆**県内の分布** 雄物川水系、子吉川水系

◆**本種の概要** **形態**：成熟全長は、雄で全長約60mm以上、雌で全長約70mm以上と推察される。体色は暗赤色から赤褐色と変異があり、鱗はなく、頭部は縦扁し、側線は不完全で胸鰭の上方にだけ存在する。口髭は4対で前鼻孔部に1対、上顎に1対、下顎に2対あるが、そのうち下顎前部の口髭は左右に広く離れている。低くて長い脂鰭があり、その後端は尾鰭に連続し尾鰭の後端はやや丸く突出している。胸鰭と背鰭の第1鰭条は肥大し鋭い棘になっており、そこには毒腺があり刺されると痛い。二次性徴の発現は、雄では頭部に確認され、頭上部の肉質部が盛り上がるだけでなく、頬部の肉質も外側に膨らむ。雌は腹部が膨満する。

生態：比較的速い流れの大きな石の下や側面に潜み、石の間を泳ぎ、主にカゲロウ目およびトビケラ目などの水生昆虫などを摂食する。夜に活動することが多いが、濁水時には昼間でも活動する。産卵期は主に6～7月で、水温20℃では8～9日で孵化し、雌がそれを保護する。産卵は、石の開口部が下流側ないし側面に位置し、表面流速が1m/秒程度の瀬で行われ100～120個の卵塊を石の下に産着させる。卵黄は黄色で粒状構造をもつ。外側をゼリー状の物質がとりかこんでいる。

生息環境：比較的清涼な水域で、主に河川の中流域から上流域にかけての平瀬や早瀬に生息するが、流れのある水路でも認められる。転石や浮石が多く、河床との空隙のある礫底を好むなど、物理的環境条件が制限されることから生息場が限定される。仔稚魚期など遊泳力に乏しい期間では、外敵からの隠れ場所や採餌場として岸際の緩流域を好み、水深が浅く、抽水植物の繁茂した環境に多く生息する。

◆**本種の現状** 雄物川が分布の北限となるが、雄物川本川での生息数はきわめて少ない。玉川や桧木内川、その周辺の礫底の水路でも生息条件の狭小化から、生息個体数は漸減している。県内で、これまで生息が認められた水路や小河川では、生息域の連続性がなく、きわめて局所的であり生息基盤は脆弱である。以前、雄物川の一部上流域では、アカメロと称され食用とされた時期もあったが、今では生息数の激減からその習慣は消滅した。

◆**生存に対する脅威** 間隙の大きい礫底を好み生息することから、河川改修工事などによる土砂の堆積や河床の平坦化に伴い、礫サイズの均等化や固定化によって礫の間隙が消滅することから、産卵場や生息場が激減している。また、河川に流出する農薬などの汚染水による直接的影響や、餌料となる水生昆虫の減少といった間接的影響も一因と考えられる。

◆**特記事項** 雄物川水系桧木内川が分布の北限と思われるが、本来群れをなして行動する種ではなく、夜行性であり、漁業者による混獲も少ないことから、明確な生息域や個体数の動向についての実態が十分に把握されていない。また、子吉川水系については情報が不足している。

(草薙利美)

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

カワヤツメ

Lethenteron camtschaticum (Tilesius, 1811)

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：—

環境省2014：絶滅危惧II類



◆**国内外の分布** 国内では、北海道、日本海側では島根県以北、太平洋側では茨城県以北の本州。国外では、スカンジナビア半島～朝鮮半島、アラスカ北極海沿岸～アラスカ湾西部、カナダ・マッケンジー川水系、アリューシャン列島

◆**県内の分布** 米代川水系、雄物川水系、子吉川水系および中小河川

◆**本種の概要** **形態**：ヤツメウナギ類は、脊椎動物の中においても原始的な仲間であり、1対の眼と、鰓穴が7対あることが八目鰻と呼ばれる由来である。成魚は、全長で50cm以上となり、体は細長く、円筒形で体の背部は暗青色で第2背鰭の前部と尾鰭の先端は黒い。口は吸盤状で顎を持たない。体表には鱗がなく、粘液質で滑りがある。背鰭は前後に2つあり胸鰭・腹鰭はない。ヤツメウナギ目の幼生はアンモシーテス幼生と呼ばれ、眼が皮下に埋没し、体色は褐色で口に歯はない。

生態：昼間は礫下などに潜み、暗夜になると活発的に行動する。アンモシーテス幼生期は、止水域の砂泥底に潜ってデトリタスなどの有機物を摂食し成長する。幼生期は、河床有機物の多い環境を選択的に利用する。2~3年で銀毛化し降海する。海面では、吸盤状に発達した口で大型魚などの体表に吸着し、筋肉や赤血球を溶かして液化した体液を吸食し成長する。海に降り数年間の海洋生活後に産卵のために河川を遡上する。河川では餌を摂らずに河岸等の隙間に潜み生活する。春季に河川の中流～上流で平瀬の砂礫底にすり鉢状の産卵床を造り、1尾の雌に数尾の雄がまとわりつく様に産卵し、その後一生を終える。

生息環境：遊泳能力の弱いアンモシーテス幼生期には、川岸の水深の浅い砂泥底やその周辺の河岸植生などが重要となる。成魚期では、上流や支川への移動性の確保や大きな淵と連続した、適当な礫径が存在する平瀬の産卵場が必要である。水路等では、農薬の影響が懸念されるほか、良好な水質維持や河川での適水温、豊富な水量等の条件も重要である。

◆**本種の現状** 本種は食用として重要性が高い存在であったが、1980年代から漸減し現在では県内の3大河川等でわずかに認められるに過ぎない。しかも、以前のものと比較し、個体サイズの小型化が著しい。各漁協では、第五種共同漁業権の内容魚種として本種の放流事業が行われていたが、最近では漁獲量が激減しほとんど放流できていない状況である。なお、県内の店では、本種の県外産が活魚で販売されることがある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修による河岸のコンクリート化や直線化に伴う有機物の堆積場や成魚の生息場、隠れ場、産卵場等の激減。さらに、生活排水等による水質変化も影響を及ぼす可能性がある。また、大・中河川においては、頭首工の新設や河道改変などによる遡上阻害の影響も大きい。

◆**特記事項** これまで、北海道、山形県、秋田県男鹿半島および他の東北地方の数河川から、本種の矮小成熟個体が確認されている。これは、変態後に海へ降りることなく、また寄生生活も行っていないグループと考えられており、今後の研究課題となっている。このように、本種に関する食性や淡水・海洋生活についての基礎的情報は不足しており、今後蓄積していく必要がある。

(草薙利美)

コイ目コイ科

ヤリタナゴ

Tanakia lanceolata (Temminck & Schlegel, 1846)

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：準絶滅危惧



◆**国内外の分布** 国内では、北海道、宮崎県、鹿児島県、沖縄を除く全国。国外では朝鮮半島

◆**県内の分布** 米代川水系、雄物川水系、馬場目川水系、子吉川水系

◆**本種の概要** **形態**：他のタナゴ類と比較して、体高は低いが、全長は10cmを超えるものもいる。口髭は一对で、比較的長く眼径よりやや短い程度となる。タナゴ類に多い肩部の暗色斑はなく、背鰭の条間膜に鰭条に平行した紡錘形の暗色斑があることなどが特徴である。雄は、普段は銀白色をしているが、産卵期に入ると体側の前半部が赤色を帯び、特に胸鰭の上方部は赤色が強くなる。また、吻先に発現する白い追い星は左右に分かれ、背面は緑青で腹側は黒くなる。

生態：県内では、流水域の小河川や細流、河川につながる水路などに生息しており、溜め池等の止水域や中・大河川ではそれほど多くない。雑食性で付着藻類や小型の底生動物などを主に食する。産卵期は、5～6月で雄がイシガイ科の二枚貝に雌を誘導し、雌は産卵管を伸ばしてイシガイの鰓内に数十粒の紡錘形の卵を産み付ける。受精後は、4日程度で孵化し、全長15mm程度で鰭の条数が整い、全長23mm程度で鱗が完成する。成長は、1年で2～4cm、2年で6～8cmに達し、全長3cm程度で成魚としての行動をとる。

生息環境：県内では、比較的流れのある水域で水草の豊富な砂礫底に多く見られる。河川での生息場は、流心よりは、岸際の緩流域で構造物の廻りや水草が繁茂する箇所が多く認められる。また、本種と産卵母貝である二枚貝の生息域のほとんどが河川中・下流域である。

◆**本種の現状** 生息地のため池に放流されたオオクチバス等の魚食性外来魚による捕食や、ため池の管理放棄による産卵母貝の消滅、圃場整備に伴う水路工事による産卵母貝の消滅や餌生物の減少、河川では河床の泥質化などにより、本種の生息環境は著しく悪化している。また、雄物川水系の国内外来魚のアブラボテと同所的に生息する地点では雑種の形成が確認されており、遺伝的汚染が懸念される。

◆**生存に対する脅威** ため池の管理放棄や河川改修による砂礫底から砂泥底への変化、水路の直線的コンクリート化による生息に適した環境の消失、魚食性外来魚の放流等が最大の脅威となる。また、タイリクバラタナゴに駆逐されて漸減している事例も認められる。

◆**特記事項** 本種の産卵には、イシガイ科の二枚貝が必要であることから、二枚貝の減少の影響も著しい。さらには、マニアや業者などによる乱獲も減少要因である。全国でのタナゴ類保全に向けた先進的事例を参考にした対策が望まれる。

(草薙利美)

コイ目コイ科

キタノアカヒレタビラ

Acheilognathus tabira tohokuensis Arai, Fujikawa & Nagata, 2007

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆**国内外の分布** 本州東北部の日本海側に分布する。秋田県を北限とし、山形県から新潟県まで、および福島県西部の阿賀野川支流に分布する。同属亜種のアカヒレタビラおよびミナミアカヒレタビラとは分布域が重ならない。
- ◆**県内の分布** 雄物川と同川水系のため池に多く生息し、米代川水系のため池にも多く分布していた。また、県南部にもわずかながら生息している。
- ◆**本種の概要** 肩部には濃緑色の暗色斑があり、雄の背鰭の外縁は赤色である。雄の臀鰭の外縁部が強い赤紅色になり、さらにその外縁部が白色になる場合が多い。腹鰭の外縁部は白色で、腹部は喉から臀鰭にかけて黒色になる。本種の髭の長さは眼径の4分の1以下で、近縁のアカヒレタビラと比較すると明らかに短い。卵形はアカヒレタビラが中楕円形であるのに対し、本種の長径は短径の2.0～3.3倍で長楕円形である。
- 産卵期は、秋田県では4月中旬に産卵が始まり、5月中旬をピークに7月上旬まで。二枚貝のイシガイやその他のドブガイ属貝類の貝内で受精する。小川などでは、マツカサガイやヨコハマシジラガイにも産卵する。これらの二枚貝のグロキディウムは、秋田県ではトウヨシノボリの鰭に寄生することが多い。貝内で孵化した仔魚の大きさは7mm程度で、浮出した後に岸寄りで生育する。翌春には成熟し産卵する。
- 本種は、シナイモツゴ、ゼニタナゴなどと分布が重複している場合が少なくない。二枚貝を産卵基質とするため、イシガイ、マツカサガイなどが生息できる環境の維持が重要である。
- ◆**本種の現状** 秋田県では1960年代までは広く分布していたが、1980年代にオオクチバスが侵入してから激減し、近年は絶滅した場所も多い。現在は、横手市、秋田市、北秋田市などのいくつかのため池に生息しているだけである。
- ◆**生存に対する脅威** 池沼やため池の管理放棄や改変、圃場整備に伴う二枚貝が生息する水路の消失のほか、八郎湖のようにアオコによる水質汚濁で二枚貝が激減したり、マニアや業者の捕獲による影響も認められている。1990年代以降は、ため池においてオオクチバスによる捕食によって絶滅した事例が多く認められる。
- ◆**現在の保護対策** 本種を目的とした保護対策は行われていないが、シナイモツゴやゼニタナゴを保全する中で、本種も対象とされている場合もある。
- ◆**特記事項** 2007年にタビラ属4亜種が記載され、本亜種名 *tohokuensis* は東北地方に分布していることに基づいている。

(杉山秀樹)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カサゴ目カジカ科

カマキリ

Cottus kazika Jordan & Starks, 1904

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2014：絶滅危惧II類



◆**国内外の分布** 日本固有種で、本州の茨城県、青森県以南、四国、九州に分布するが、主として秋田県以南から山口県までの日本海に分布する。

◆**県内の分布** 雄物川水系、米代川水系、子吉川水系、男鹿半島および県北部、県南部の独立した小河川などに分布する。

◆**本種の概要** **形態**：体色は灰褐色（生息場所により体色を変えることができる）で鱗はなく、体側に2～3本、尾柄に1本の黒褐色の横帯があり、腹部は白色である。頭部が大きく縦扁し前鰓蓋骨には1対の強大な棘とその下部に3対の小さい棘を持つ。最上部の棘は先端が鋭く上部に曲がっている。腹鰭は分離し、軟条は15～19本でその先端は分岐している。産卵のため降海する繁殖期の雄は腹鰭に星形の突起があり、口周辺、内部には赤色の婚姻色が出現する。国内の淡水性カジカ類で最も大型で、全長25cmを超える。

生態：降下回遊魚で、県内では産卵のために11～12月にかけて成熟した個体が降海し、1～2月頃に沿岸の礫や岩礁などで産卵する。雄は孵化するまで卵の保護をする。孵化した稚魚はしばらく沿岸部の海域で生活する。県内では5月下旬～6月上旬頃に3cm程度に成長し、河川に遡上する稚魚が河口域に出現する。河川での稚魚は、水生昆虫を主に餌として成長する。未成魚から成魚になると主に小魚等を餌とするようになる。概ね2年で成熟し降海する。雌は産卵を終えると、雄は卵が孵化するまで保護し、寿命を終える。

生息環境：孵化した浮遊期の仔魚から稚魚までは沿岸の海域で成長する。その後、河川へと遡上する。河川では水質が良好で比較的大きな礫が存在する浮き石で礫底の水域を好んで生活する。遊泳力は弱い、下流から中流にかけて堰など遡上阻害物のない雄物川では、河口より60km以上上流の大仙市まで遡上が確認されている。

◆**本種の現状** 県内では比較的広く分布するが、生息する個体数は少ない。生息場所が限定され環境の変化にも弱く、河川改修工事による環境の変化、横断構造物による遡上の阻害（遡上不可能な魚道）、土砂の堆積による礫底の沈石化などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。特に県内の単独小河川では河口からすぐの場所に遡上を阻害する落差工等の横断構造物が存在する河川が多く、生息域が限られ、わずかな環境の変化でも大きな打撃となる。近年、県内の河川で生活できる場所が少なくなっており、生息数の減少が著しい。

◆**生存に対する脅威** 河口域の改変、河川改修による生息環境の変化（河床の平坦化など）、沿岸の開発工事（特に産卵場となる岩礁、礫底の箇所）、移動阻害、水温上昇、水質汚染、アユ、サケ漁による混獲、漁獲など。

◆**特記事項** 下流～河口域での横断構造物の設置、改修にあたっては魚道の付帯が不可欠である。また、付帯する魚道については、本種のように遊泳力の弱い魚類も移動可能な措置を検討する必要がある。このような措置は生息域の拡大や生息個体数の維持および増加に繋がる。

一般的には「あゆかけ」の名前で知られているが、その語源は前鰓蓋骨の棘でアユを引っ掛けて捕食するということから来ている。ハタハタが沿岸に接岸する12月にさし網で本種が混獲されることもある。

河川では「うみかじか」などと呼ばれている。

（熊谷雅之）

カサゴ目カジカ科

ハナカジカ

Cottus nozawae Snyder, 1911

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



◆**国内外の分布** 日本固有種で、北海道全域、本州では青森県、秋田県、山形県、新潟県および岩手県の一部の河川に不連続に分布する。

◆**県内の分布** 雄物川水系、米代川水系の小支川に分布する。

◆**本種の概要** **形態**：本種は上下に扁平した体型で、体色は淡褐色から茶褐色を呈する。体側には4個の暗色斑紋があり、前鰓蓋骨後縁には3対の棘がある。前鰓蓋骨最上棘は先端が太く、若干上方へ湾曲し鋭くなっている。胸鰭の軟条数は13～15本で、成魚では胸鰭上部の数軟条の先が分枝している。腹鰭には数本の横斑がある。また、他のカジカ属と異なり、下顎の側線感覚器官系の5番目の開孔は左右に各2個ある。

生態：本種は河川で生活史を終結する純淡水魚である。県内では5月上旬～6月上旬に主に平瀬で比較的大きな礫が散在する場所の浮き石の礫下に縄張りを持ち、大型の個体は雌を複数回呼び込み産卵させる。雄物川水系では河岸に横穴を掘り産卵する特異な産卵形態を持つ個体群の生息が報告されている（熊谷ら2013）。産卵後は雄が孵化するまで卵を保護する。孵化した仔魚（全長8～9mm程度）はすぐに小礫の隙間に入り底生生活をする。卵黄を吸収すると移動・分散して水際の浅瀬で水生昆虫の幼生などを餌とし成長する。肉食性が強く成長すると水生昆虫、小魚等を主な餌とする。雌の多くは2年程度（全長8cm前後）、雄は2～3年程度（全長9cm前後）で成熟し、数年間にわたって繁殖を繰り返す。寿命は2～5年程度で県内では大型の個体は全長15cm前後に達する。最近の研究によれば、北海道に生息するものと本州に生息するものとは、遺伝的に大きく相違していることが明らかとなった。本種は塩分耐性を持たないことから、本県における分布は、氷河期の遺存と考えられている。

生息環境：県内での分布は、雄物川水系と米代川水系に限定され、同属のカジカ大卵型が生息する河川ではカジカ大卵型の生息域より上流域に生息する。また、同所で出現する場所ではカジカ大卵型が早瀬、本種は平瀬で生活し、ある程度の棲み分けがされている。本種は冷水性魚類であり、生息場は夏季でも水温上昇の少ない山地渓流域および上流域の平瀬、湧水がある河川の平瀬などの水際の礫下やえぐれた場所等を好み生活の場としている。

◆**本種の現状** 生息範囲は狭く、きわめて限定され、生息環境も限定される。このため河川工事などによる河畔林の伐採、護岸のコンクリート化、湧水環境の変化などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修、土砂の流入、堆積による礫底の沈石化および底質の平坦化、河畔林伐採、湧水環境の悪化および枯渇による水温上昇、上流域での砂防堰堤建設による生息場の分断、乱獲など。

◆**特記事項** 近年、生息環境の悪化や生息域の縮小などにより個体数が減少している。河川での湧水環境の変化は本種のみならず多様な生物に与える影響が大きく、湧水量の維持、確保が重要である。また、砂防堰堤等の横断構造物建設、改修工事にあたっては移動経路等の確保が個体群維持にとって重要である。

(熊谷雅之)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カサゴ目カジカ科

カジカ中卵型

Cottus sp.

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆**国内外の分布** 日本固有種で、北海道南部、本州の青森県から山口県の日本海側、愛媛県の加茂川、九州の有明海に注ぐ河川に分布する。
- ◆**県内の分布** 雄物川水系、米代川水系、子吉川水系、男鹿半島および県北部、県南部の独立した小河川などの河口から下流域に分布する。
- ◆**本種の概要** **形態**：本種は底生生活に適応した縦扁した体型をしている。体色は淡褐色から暗褐色まで変異に富んでいる。体側には4～5個の黒褐色の横帯があり、前鰓蓋骨の後縁に1対の棘がある。眼から前鰓蓋骨棘へ向かって2本の暗色帯があり、眼の後背面と第1背鰭下に暗色帯がある。腹鰭は淡色で顕著な斑紋がない。第1背鰭8～9棘、第2背鰭1棘17～20軟条、胸鰭の軟条は全て分岐せず、軟条数は13～16である。本種と近縁種のカジカ大卵型及びカジカ小卵型は形態的に酷似しているが、胸鰭条数の違いにより区別できる。カジカ大卵型は胸鰭軟条数12～14、カジカ小卵型は胸鰭軟条数15～17である。産卵形態としては近縁種のカジカ大卵型とほぼ同じであるが、卵径を比較すると本種の方が幾分小さい。
- 生態**：本種は両側回遊魚である。県内では3月下旬～4月下旬頃にかけて主に河川下流域の瀬の石下に雄が縄張りを持ち、雌を呼び込み産卵させる。産卵後は雄が孵化するまで卵を保護する。孵化後、本種の仔魚は浮上して川を流下し海に入りそこでしばらく浮遊生活を送る。雄物川河口および子吉川河口では5月中旬～5月下旬頃に2cm程度に成長した稚魚が出現し河川へ遡上する。河川に入ると主に水生昆虫などを餌として成長する。雌は2年程度、雄は2～3年程度で成熟し繁殖を行い、数年間繰り返す。寿命は2～5年程度である。本種が出現する河川は限定されており、ある程度の母川回帰性があると推察される。
- 生息環境**：県内では河口付近の礫底の清澄な水域での出現が多いが、雄物川水系では河口より10km以上上流の秋田市河辺まで遡上が確認されている。河川では主に下流域から河口の早瀬および平瀬の浮き石の礫底や水際のえぐれた場所などで、底生生活をしている。
- ◆**本種の現状** 生息場所が限定され、生息数もきわめて少なく、生態的に不明な点が多い。河口部や河川中～下流域の河川改修による環境の改変、海から河川への移動阻害、水温の上昇などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 河口部および河川改修による生息場の悪化、減少、河川構造物による移動阻害。近縁種のカジカ小卵型の人為的な移入による種間競争。
- ◆**特記事項** 県内ではまだ報告例はないが、近縁種のカジカ小卵型が対馬海流の影響を受け、北方に分布を拡大していることから、今後の状況に留意する必要がある。本種の生息維持には、河川から河口を経て海へと続くネットワークが必要不可欠であり、移動経路の確保が重要である。

(熊谷雅之)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

スナヤツメ北方種

Lethenteron sp. 1

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



◆国内外の分布 北海道及び本州中部以北。

◆県内の分布 雄物川水系、米代川水系、子吉川水系、県南部の独立小河川など。

◆本種の概要 一生を淡水域で過ごし、塩分耐性を持たない。湧水地帯など比較的清潔な場所を好み、幼生は流れの緩やかな泥底の暗い場所に生息し、デトリタス等を摂餌して成長する。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、眼はなく、口も漏斗状をしている。3～5年で変態・成熟し、眼が生じ、吸盤状の口が形成されるが、カワヤツメなどのように降海し寄生生活に移行することなく、変態後も産卵まで河川内で摂餌せずに過ごす。産卵は初夏に、砂礫底に産卵床を造って行われる。成魚の全長は10cm程度。県内では南方種と区別せずに「すなめぐり」と呼ばれることが多い。

◆本種の現状 河川改修などに伴う、湧水地帯、カバーのある泥底の暗所、砂礫底といった生息域や産卵適地の消失などが、個体数の減少を招いている。特に、湧水地帯のように不連続に存在する生息適地については、大幅な環境変化が生じた場合、そこに分布する個体群が絶滅する可能性が高い。

◆生存に対する脅威 河川改修、森林伐採等による生息環境の悪化、産卵適地の減少。

◆特記事項 本種は、かつてはスナヤツメ *Lethenteron reissneri* と分類されていたが、その中には遺伝的に異なる二つの種（スナヤツメ北方種、スナヤツメ南方種）が含まれることが明らかになり、独立した種となったものの一つである。秋田県にはその両種が、場所によっては同所的に分布していることが確認されている。ただし、両グループは遺伝学的手法によらないと分類できないことから、県内における詳細な分布状況や、生殖的隔離機構を含む生態的な差異等については不明である。これまでに県内においてDNA分析により同定された両種の個体数は合計100以下と少ないものの、両種を合わせても生息箇所数は多くなく、生息地によっては個体数の減少が認められることから、憂慮すべき状況であることに変わりはない。なお、以上の事情から、ここでは両種を区別せずに記述している。

（掲載写真は、DNA分析により同定した個体である。）

（水谷 寿）

ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

スナヤツメ南方種

Lethenteron sp. 2

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



◆国内外の分布 本州、四国、鹿児島県、宮崎県を除く九州、朝鮮半島。

◆県内の分布 雄物川水系、米代川水系、子吉川水系、県南部の独立小河川など。

◆本種の概要 一生を淡水域で過ごし、塩分耐性を持たない。湧水地帯など比較的清潔な場所を好み、幼生は流れの緩やかな泥底の暗い場所に生息し、デトリタス等を摂餌して成長する。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、眼はなく、口も漏斗状をしている。3～5年で変態・成熟し眼が生じ、吸盤状の口が形成されるが、カワヤツメなどのように寄生生活に移行することなく、変態後も産卵まで摂餌することなく過ごす。産卵は、砂礫底に産卵床を造って初夏に行われる。成魚の全長は10cm程度。県内では北方種と区別せずに「すなめぐり」と呼ばれることが多い。

◆本種の現状 河川改修などに伴う、湧水地帯、カバーのある泥底の暗所、砂礫底といった生息域や産卵適地の消失などが、個体数の減少を招いている。特に、湧水地帯のように不連続に存在する生息適地については、大幅な環境変化が生じた場合、そこに分布する個体群が絶滅する可能性が高い。

◆生存に対する脅威 河川改修、森林伐採等による生息適地の減少、産卵適地の消失。

◆特記事項 本種は、かつてはスナヤツメ *Lethenteron reissneri* と分類されていたが、その中には遺伝的に異なる二つの種（スナヤツメ北方種、スナヤツメ南方種）が含まれることが明らかになり、独立した種となったものの一つである。秋田県にはその両種が、場所によっては同所的に分布していることが確認されている。ただし、両グループは遺伝学的手法によらないと分類できないことから、県内における詳細な分布状況や、生殖的隔離機構を含む生態的な差異等については不明である。これまでに県内においてDNA分析により同定された両種の個体数は合計100以下と少ないものの、両種を合わせても生息箇所数は多くなく、生息地によっては個体数の減少が認められることから、憂慮すべき状況であることに変わりはない。なお、以上の事情から、ここでは両種を区別せずに記述している。

（掲載写真は、DNA分析により同定した個体である。）

（水谷 寿）

コイ目コイ科

ジュウサンウグイ

Tribolodon brandtii (Dybowski, 1872)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
 秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
 環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



- ◆ **国内外の分布** 国内では、富山湾以北の本州日本海側。国外ではサハリン、アムール川、朝鮮半島東岸。
- ◆ **県内の分布** 米代川、雄物川、子吉川、西目川
- ◆ **本種の概要** 本種は以前、マルタとして分類されていたが、吻が長い、側線鱗数が多い、塩分耐性が弱い、などの相違点や遺伝的に他の地域個体群とは異なることから区別された。体の側面は銀白色で側線鱗数は他のウグイ属よりもやや多い。産卵期に発現する婚姻色は、雌・雄ともに明瞭となり、上顎直後から尾柄部まで側線の下方に沿う縦条1本となる特徴を有する。また、本種はすべてが遡河回遊性で、成魚は汽水域や沿岸海洋域に生息する。
- ◆ **本種の現状** 県内で認められる本種の多くは大河川に集中しており、小河川の河口部に出現するものは、その河川で産卵している可能性は低いものと推察される。雄物川の上流域では、毎年伝統的に行われるウグイの「瀬付き漁」の際に捕獲されることがあるが、その数は激減しており確認範囲も狭い。
- ◆ **生存に対する脅威** 海岸開発や河口周辺の開発等による、河川への遡上阻害、また、河川改修による、底質環境の改変はダメージが大きく、河床の固定化による産卵場の減少、コンクリート護岸や直線化による生息場の減少などが懸念される。
- ◆ **特記事項** これまで、マルタの2型（マルタ・ジュウサンウグイ）については、形態的、生態的、遺伝的に不明な点が多く、中村守純（1969）は、東京湾や茨城県に生息するマルタは吻が短く側線鱗数が少なく、塩分耐性がやや強いとして2種の可能性を示唆していたが、天野・酒井（2014）により、それぞれが別種であることが明らかになった。
 分布域は、マルタは大船渡から多摩川までで、ジュウサンウグイは青森県追良瀬川から北海道、日本海周辺である。

（草薙利美）

コイ目コイ科

エゾウグイ

Tribolodon sachalinensis (Nikolsky, 1889)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
 秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
 環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



- ◆ **国内外の分布** 国内では北海道全域と本州日本海側の青森県から新潟県、本州太平洋側では、青森県から福島県。国外では、ロシア連邦の沿海地方、サハリン。
- ◆ **県内の分布** 雄物川水系、米代川水系
- ◆ **本種の概要** 体長は20～30cm程度で、希に40cmまでに成長する。成熟体長は最小で、雄で9cm程度、雌で12cm程度である。食性は雑食性で比較的低層を遊泳する。産卵期の雄は、婚姻色の桃赤色が背鰭と尾鰭以外の鰭の基底部、頬、しり鰭周辺から尾柄腹面に発現する。雌は、眼下部にのみ発現するか全く出ない。また、雄は頭部と背面に小さな追星が出るが、雌の婚姻色は全く発現せず、吻端が扁平に突出するなどの特徴を有する。本種は、塩分耐性を持たないことから海に降りることはなく、河川の中～上流域の緩流域を好み生息する。産卵行動は、雌が河床に突入し放卵、同時に多数の雄が群がり放精する。
- ◆ **本種の現状** 本種の生息域が比較的上流であることから、ダムや河川工事等にもなう生息環境の変化から個体数の減少や生息域が縮小している。また、砂防堰堤工事にもなう、河川の分断化や支川の孤立化により、遺伝的多様性が失われ絶滅のリスクが高まるものと推察される。雄物川水系の中河川では、湧水量が著しく減少し、時折発生する枯渇現象により、ここ数年で激減した。さらに、河川工作物等により水域が変わったことにより、アブラハヤとの交雑個体が認められるようになった河川もある。
- ◆ **生存に対する脅威** 河川改修による湧水の減少、河川の分断化。
- ◆ **特記事項** 雄物川水系、米代川水系ともに生息域が限定されていることから、河川の分断化を避け魚道等を付設するなど配慮が必要である。
 また、本来、本種とアブラハヤが異所的であるにもかかわらず、人為的に同所することがないよう留意する必要がある。

（草薙利美）

- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 淡水魚類
- 陸産貝類
- EX
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ナマズ目ギギ科

ギバチ

Pseudobagrus tokiensis Doderlein, 1887

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 日本固有種。本州の太平洋側は青森県から神奈川県まで、日本海側は秋田県から福井県まで分布する。日本海側では、米代川水系が分布の北限。
- ◆県内の分布 米代川水系、雄物川水系、子吉川水系、県内池沼など。
- ◆本種の概要 体色は茶褐色から黒褐色で鱗はなく、幼魚には黄色味を帯びた明らかな斑紋がある。上顎が下顎より突出し、上顎に2対、下顎に2対、計8本の髭があり、胸鰭と背鰭には鋭い棘がある。ギギによく類似するが、尾鰭の後縁が深く2叉せず、単に浅くくぼむ点などで区別される。
河川の中流域から上流域下部の清涼な流水域に生息する。石の下、石垣の間隙、ヨシの間や倒木の下に潜み、夜間に活動して小魚や水生昆虫などを捕食する。産卵期は6～8月で、石の下面などに卵を産み付ける。
池沼に生息しているものについては、生態に不明な点が多い。
- ◆本種の現状 生息環境及び産卵環境ともに礫河床に依存しているため、河道の拡幅工事、掘削工事及び護岸工事などの河川改修工事に伴う影響を受けやすく、生息地は減少傾向にある。
米代川水系では、本流を中心に広く生息し、個体数も多かったが、河川改修工事などによる環境変化により生息場所が減少傾向にある。また、子吉川水系及び雄物川水系においては、生息場所が局所的であり、個体数も少ない。
池沼における本種の生息地は、特定外来種のオオクチバスの生息分布の拡大に伴い減少傾向にある。
- ◆生存に対する脅威 河床及び河岸の改変、水質汚濁、ギギ及びオオクチバスの分布拡大。
- ◆特記事項 近年、雄物川水系では、本来は本州中部以西、四国、九州東部に分布する同属のギギの生息が確認され、その生息数が増加傾向にあるため、種間競争等による本種への影響が懸念される。また、池沼においては、オオクチバスによる食害の影響が懸念される。

(今野清文)

トゲウオ目トゲウオ科

トミヨ属淡水型

Pungitius pungitius (Linnaeus, 1758)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



- ◆国内外の分布 北海道、青森県の日本海側および太平洋側、秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、福井県、ロシアのオホーツク海側、中国。
- ◆県内の分布 十和田湖、雄物川水系、米代川水系、八郎湖など。秋田市以南の沿海市町村には分布していない。
- ◆本種の概要 本種の全長は6cm程度で背部に9本前後の棘を持ち、トミヨ属雄物型と形態的に似ているが、本種の鰭膜は透明で、体色は銀白色が強く、体側には緑色の不規則な雲状斑を持つものが多い。生息するためには、水温25℃以下で抽水植物などの水生植物が生育し、流れがゆるく安定した場所が必要である。
産卵期間は3月から7月と長期に及ぶが、4～6月が盛期である。植物の茎、枯れ枝、根の間などを利用して直径3cm程度の巣をつくり、その中に産卵する。
- ◆本種の現状 鹿角市、北秋田市などでは、本種の鱗板が連続するものと不連続なものが同所的に出現することがある。本種は雄物川および米代川では、河川内の湧水のあるワンドを主体に散在しているが、生息個体数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 河川改修による、ワンドや中洲の変化により湧水が枯渇したり、流れの緩やかな安定した場所が減少したりして本種に大きな影響を及ぼしている。また、圃場整備や水質悪化などにより生息場所が大きく減少している。
- ◆現在の保護対策 横手市では本種とトミヨ属雄物型が同所的に生息していることから、県の天然記念物に指定されている。また鹿角市の生息地は、市の天然記念物指定を受けている。
- ◆特記事項 本種は生息場所ごとに変異があり、保護に当たっては遺伝的な多様性に配慮する必要がある。なお、従来、鱗板の配列から、連続しているものをトミヨ、不連続のものをイバラトミヨと分類していたが、遺伝学的研究により「トミヨ属淡水型」、「トミヨ属汽水型」、「トミヨ属雄物型」の3種に分類されている。

(杉山秀樹)

ダツ目メダカ科

メダカ北日本集団

Oryzias sakaizumii Asai, Senou & Hosoya, 2012

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 兵庫県以北の本州日本海側及び青森県。
- ◆県内の分布 米代川水系、雄物川水系、子吉川水系で確認されているほか、八郎湖、小泉瀧など湖沼や、池沼、細流に生息しているが、内陸部での確認例は比較的少ない。また、近年、確認される生息域のほとんどはため池や水路で、大河川を始めとした河川における確認例はほとんどない。
- ◆本種の概要 平野部の池沼、用水路、水田などの止水または半止水域に生息する。一生を淡水域で過ごす塩分耐性もあり、河口域で見られる場合もある。自然の水域における寿命は1～2年である。水温18℃以上の水温帯で産卵し、高水温の環境下では年に数回産卵する。動・植物プランクトンや、浮遊する小型の水生動植物を摂餌する雑食性で、最大全長は4cm程度である。
- ◆本種の現状 水田の基盤整備や河川改修などに伴う水路のコンクリート化などにより、生息適地の減少が著しく、農薬や生活排水などによる水質悪化の影響も大きい。また、確認される水域のほとんどは小規模で不連続であることから、それぞれの分布域における個体群の存続も厳しい状況にある。また、水域によってはオオクチバスなどの魚食性の外来種による被害も深刻である。加えて、様々な品種を含む産地不明の「メダカ」が、観賞用として販売されていることから、遺伝的攪乱が起きるリスクも極めて大きい。
- ◆生存に対する脅威 ため池・水路の改修などによる生息適地の減少。水質の悪化。オオクチバス等魚食性外来魚による被害。「善意の放流」による遺伝的攪乱。
- ◆特記事項 国内のメダカについては、遺伝的研究から、本県を含む本州北部日本海側等に分布する“北日本集団”とそれ以外のミナミメダカ*O. latipes*とに分けられることが明らかになった。さらに、これまで同種とされていた、中国大陸と朝鮮半島に分布するメダカも、それぞれ別種とされた。
(水谷 寿)

カサゴ目カジカ科

カンキョウカジカ

Cottus hangiongensis (Mori, 1930)

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類
秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類
環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



- ◆国内外の分布 日高地方以北の太平洋側を除く北海道、本州の青森県、秋田県、山形県、岩手県、新潟県、富山県、朝鮮半島東岸、沿海州に分布する。
- ◆県内の分布 県北部及び県南部の独立した小河川に分布する。
- ◆本種の概要 本種は前鰓蓋骨の後縁に1対の棘があり、体側全体に緑褐色の小さい斑点が散在し、腹鰭には数個の暗色斑がある。県内での分布は、小河川の河口付近で浮き石の礫底と清澄な水域を持つ場所に限定され、大河川には生息していない。塩分耐性を持ち、県内での産卵は4月上旬～4月下旬頃に下流域から河口の礫下で行われる。孵化した仔魚は浮上しすぐに流下し海に入る。海域で浮遊生活を送り、全長2cm程度に成長すると河川に遡上する淡水性両側回遊魚である。河川では早瀬や水際の礫の隙間などで主に水生昆虫、小魚などを摂餌し生活する。雌は概ね2年、雄は2～3年で成熟する。本種が生息するには、河口付近が礫底の瀬であることが必須である。種名の「カンキョウ」は朝鮮半島に由来するものである。
- ◆本種の現状 生息場所が限定されているほか、県内の生息場となっている小河川の多くは、河口より数百メートル程度の箇所に落差工等の構造物が存在するため遡上が阻害されており、分布域も極めて狭い範囲となっている(遡上の阻害がなければ河口より約3km程度上流へ移動する)。そのため河口付近の河川改修工事などによる環境の改変で壊滅的な打撃を受ける可能性が高い。
- ◆生存に対する脅威 河口部の河川改修、河岸のコンクリート化、土砂の流入、堆積、水質の悪化。同属で生態が類似するカジカ中卵型との競争。
- ◆特記事項 本種の生息には、河川から河口を経て海へと続くネットワークが必要不可欠であり、移動経路の維持が重要である。
本種が出現する河川は限定されており、ある程度の母川回帰性があると推察される。
(熊谷雅之)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カサゴ目カジカ科

カジカ大卵型

Cottus pollux Günther, 1873

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 本種は日本固有種である。本州、四国、九州に分布する。
- ◆県内の分布 三大河川およびその支流、独立した中河川などの中流域から上流域に分布する。

小河川では分布しないことも多い。

- ◆本種の概要 本種は前鰓蓋骨後縁に1対の棘があり、胸鰭軟条は12～14で先端は分岐しない。また、腹鰭には顕著な斑紋はない。形態が酷似する近縁種のカジカ中卵型と異なり、本種は河川で生活史を終結する純淡水魚である。県内では河川を中心に分布域も広く、河川の中流から上流域の早瀬を好み、主に比較的大きな石の下を生活場所としている。県内では3月下旬～5月上旬頃（渓流域では6月下旬頃まで認められる）に早瀬の比較的大きな浮き石の下に雄がなわばりを持ち、雌を複数回呼び込み産卵させる。産卵後は孵化するまで雄が卵を保護する。孵化した仔魚は、卵黄を吸収するまで産卵床の石下の小砂利の隙間に入り生活する。卵黄吸収後の稚魚は分散する。6月下旬頃になると、2cm程度に成長した稚魚が早瀬水際の浅瀬等で遊泳する姿が見られる。県内では本種およびハナカジカを総称し「カジカ」と呼んでいる。県南部の山間地などでは、捕ったカジカを串に刺し、屋内で干しておき正月の雑煮や年越しそばの出汁に使っていた。その当時は正月近くになると干したカジカと米などを交換していたくらい重宝された食材であり、現在でも地元で親しまれている魚である。

- ◆本種の現状 県内でも分布域は広いが、河川改修などによる河川環境の変化、森林伐採、護岸のコンクリート化、湧水の減少等による生息場の減少に伴い生息数も減少傾向にある。

- ◆生存に対する脅威 土砂の流入、堆積による河床の沈石化、河川改修による河道の単純化、水質悪化、水温の上昇、乱獲。

- ◆特記事項 県内の河川では河床が平坦で沈石が進んでおり、石の隙間で生活する本種の生息域は減少している。また、本種の産卵場は孵化仔魚が一時期間生活するため、産卵床となる石の下に小砂利が堆積し隙間が形成されていることが重要であるが、そのような繁殖に適した場所も減少傾向にある。

(熊谷雅之)

スズキ目ハゼ科

スミウキゴリ

Gymnogobius petschiliensis (Rendahl, 1924) Stevenson, D.E., 2002

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



- ◆国内外の分布 北海道日高地方から九州の屋久島まで。国外では朝鮮半島から記録がある。

- ◆県内の分布 主として、男鹿半島の独立河川、真瀬川、水沢川、奈曾川など沿岸の中・小河川の河口周辺に生息する。

- ◆本種の概要 全長12cm程度で、ウキゴリ属近縁種のウキゴリとシマウキゴリでは第1背鰭後端に1黒色斑点を有しているが、本種はこれを持たない。5～7月に平たい礫の下面に産卵を行い、孵化後降海し、夏季に2cm前後の稚魚が河川に遡上してくる。その後、河川の流れの緩やかな岸辺などで生活し、10cm程度まで成長するが、近年、中・小河川での河川改修などにより生息数が減少している。海から河川への遡上通路の確保とともに、生息場所となる下流域の安定した環境が重要である。ごくまれに、大河川の中流域で確認されることがある。

- ◆本種の現状 稚魚は河口から河川へと遡上するが、上流へは移動せず、岸よりのヨシ帯など流れの緩やかな場所に生息する。

- ◆生存に対する脅威 小河川では、河口域から1km程度までの範囲に出現することが多いが、河口部が改変されたり、下流部に床固めや落差工ができたりすると、個体群が激減、絶滅するおそれがある。

- ◆特記事項 県内のいくつかの独立小河川では、河川性のウキゴリ属3種が同時に認められている。

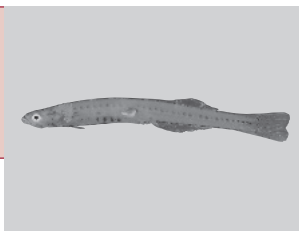
(杉山秀樹)

スズキ目ハゼ科

シロウオ

Leucopsarion petersii Hilgendorf, 1880

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 北海道南部から九州南部、朝鮮半島
- ◆県内の分布 子吉川、雄物川、米代川、衣川、西目川
- ◆本種の概要 第1背鰭がなく、体に鱗がない。体は透明で内臓が見える。雌の体側下方には1列の暗色点が並ぶ。食用として漁獲される。浅い海域でプランクトンを捕食しながら生息し、春に（4月下旬～5月中旬）産卵のため群れで河川に遡上する。遡上後は、汽水域上限から淡水域にかけての石の下に産卵室を作り、石の裏側に長径3mmほどの細長い水滴形の卵を産み付ける。2週間ほどで孵化した仔魚はすぐに川の流れて海へ下る。寿命は約1年。
- ◆本種の現状 産卵環境は河川の汽水域上限から淡水域にかけての礫河床に依存しているため、河床環境の変化の影響を受けやすく、産卵環境は減少傾向にある。米代川や雄物川などの河口では、毎年シロウオの遡上期に四つ手網漁が行なわれており、漁獲量は年によって増減がみられるものの、年々減少傾向にある。衣川や西目川でも漁獲されているが、漁獲量は米代川同様に年々減少傾向にある。
- ◆生存に対する脅威 河床の改変、水質汚濁、海域との連続性
- ◆特記事項 米代川（能代市）では、地元の食文化に根付いている。

（今野清文）

スズキ目ハゼ科

ミミズハゼ

Luciogobius guttatus Gill, 1859

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北海道～西表島、朝鮮半島、中国
- ◆県内の分布 米代川、雄物川、子吉川河口でも認められているが個体数は少ない。八峰町、男鹿市、由利本荘市などの独立小河川の河口域に分布する。
- ◆本種の概要 体は円筒形で細長く、尾部は側扁し、頭部は縦扁する。第1背鰭はなく、胸鰭上部に1本の遊離鰭条がある。海岸や河口などの汽水域に生息し、石の下や砂利の間に潜んでおり、ゴカイ類やヨコエビ目などの底生動物を捕食している。産卵期は春で、石の下などに産卵する。孵化した仔魚は一旦海へ下りるが、全長1cm位に成長した後、再び河口の汽水域に戻って生活する。県北部、県南部および男鹿半島の小さな独立河川の河口近くの礫の下でわずかながら認められている。河川では、河口域から数百m程度までの範囲に出現することが多く、まれに、淡水域の緩やかな瀬の礫の下で認められることもある。
- ◆本種の現状 生息環境及び産卵環境ともに河口域の礫の下であるため、河口域における河床環境の変化により致命的な影響を受けるおそれがある。県内では比較的多くの河川で河口域の礫の下にわずかながらみられるが、いずれの河川も生息場所は極めて局所的であり、個体数は少ない。生息環境である河口域の礫河床が減少していることから、生息数も減少傾向にある。
- ◆生存に対する脅威 河口域における河床の改変、水質汚濁
- ◆特記事項 河口域の石や砂利などの間隙は、本種の重要な生息環境及び産卵環境であるが、いずれの生息地も河床の隙間がなくなり平坦化しており、生息環境、産卵環境ともに減少傾向にある。本種は複数種からなることが明らかにされていることから、同定の際に留意する必要がある。

（今野清文）

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

スズキ目ハゼ科

ヒモハゼ

Eutaeniichthys gilli Jordan & Snyder, 1901

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 日本国内では、青森県から沖縄県にかけての太平洋（瀬戸内海を含む）、日本海、東シナ海（有明海、八代海を含む）に分布する。国外では、朝鮮半島・渤海・黄海に分布する。
- ◆県内の分布 船越水道
- ◆本種の概要 吻は突出し、吻端には上唇上縁を画する溝がない。第1背鰭より前方の背側と胸鰭基部上方の体側には鱗がない。体側に1黒色縦帯が走る。河口の砂底質の石や空き殻の下に生息する。砂底では、甲殻類や無脊椎動物が作った生息孔を生息場として利用しており、砂底の表面に付着する珪藻類や小型の底生動物などを捕食する。産卵期は5～8月頃と推定されている。
- ◆本種の現状 県内における生息場所は極めて局所的であり、船越水道の河口域以外に生息は確認されていない。また、生息環境である砂質の干潟の面積も小さいため、河川改修工事等による影響を受けやすく、河床環境の変化が生じた場合は、短期間で個体群が絶滅するおそれがある。
- ◆生存に対する脅威 埋め立てや河道掘削による河床の改変、河口堰の建設、水質汚濁。
- ◆特記事項 本種は国内の生息場所により、複数の個体群が存在する可能性がある。県内では船越水道の河口域のみで生息が確認されている魚類であり、生物地理学の観点からも重要と考えられる。

(一関晋太郎)

スズキ目ハゼ科

チクゼンハゼ

Gymnogobius uchidai (Takagi, 1957)

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：—

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆国内外の分布 日本固有種である。北海道から宮崎県にかけての太平洋（瀬戸内海を含む）、秋田県から鹿児島県にかけての日本海、東シナ海（八代海を含む）に分布する。
- ◆県内の分布 船越水道
- ◆本種の概要 下顎下面には数個の肉質突起があり、そのなかの1対は長い。体側には暗色横斑があり、前部のものは長い。尾鰭下部には斑紋がない。河口の砂底質に生息し、甲殻類や無脊椎動物が作った生息孔にみられる。産卵期は宮城県では4月中旬～6月中旬と推定され、卵は甲殻類の生息孔の壁面に1層の卵塊をなして産み付けられる。1年で成熟し産卵後間もなく死亡する。
- ◆本種の現状 県内における生息場所は極めて局所的であり、船越水道の河口域以外に生息は確認されていない。また、生息環境である比較的きれいな砂底質の面積も狭いため、河川改修工事による影響を受けやすく、河床環境の変化が生じた場合は、短期間で個体群が絶滅するおそれがある。
- ◆生存に対する脅威 埋め立てや河道掘削による河床の改変、河口堰の建設、水質汚濁。
- ◆特記事項 本州の日本海側では生息地が局在化しており、県内においても生息地は船越水道の河口域に限られている。船越水道における本種の生息範囲は狭く、個体数も少ない状況にあるため、河川改修の際は、底質の変化に留意する等、十分な配慮が必要である。

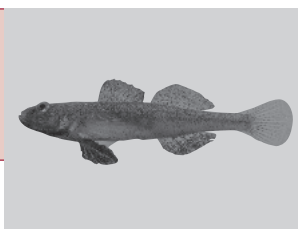
(一関晋太郎)

スズキ目ハゼ科

ビリンゴ

Gymnogobius castaneus (O'Shaughnessy, 1875)

秋田県2016：準絶滅危惧
 秋田県2002：準絶滅危惧種
 環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、屋久島、サハリン、朝鮮半島
- ◆県内の分布 子吉川（由利本荘市）、雄物川（秋田市）、米代川（能代市）、八郎湖船越水道
- ◆本種の概要 本種は同属のジュズカケハゼに似ているが、頭部の眼上感覚管が開孔していることで区別される。雌には婚姻色が現れる。
 主に河口域の河岸に近い流れの緩やかな軟泥域に生息し、ゴカイ類、ヨコエビ目、水生昆虫などの底生動物や藻類などを捕食する。産卵期は北海道の戸切地川では5月中旬～6月下旬と推定され、産卵は河口域の河岸近くの軟泥域に掘った産卵孔内に行なう。孵化した仔魚は海に下り、浮遊生活を送り全長2cm以上に成長した稚魚が6～7月にかけて河川に遡上する。
- ◆本種の現状 生息環境及び産卵環境ともに河口域の流れの緩やかな軟泥域であるため、河口域における河床環境の変化により致命的な影響を受けるものと推察される。
 県内では、大河川の河口域を中心に僅かながら生息が確認されていたが、近年ではほとんどみられなくなっており、河口域における流れの緩やかな軟泥域の環境が安定していないと個体数は著しく減少するものと考えられる。
- ◆生存に対する脅威 埋め立てや河道掘削による河床の改変、水質汚濁
- ◆特記事項 本種と近縁種のジュズカケハゼとの形態差が明確にされるまで、両者は混同され、ビリンゴとして扱われてきた。

（今野清文）

ウナギ目ウナギ科

ニホンウナギ

Anguilla japonica Temminck & Schlegel, 1846

秋田県2016：情報不足
 秋田県2002：—
 環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 北海道南部以南の日本各地及び朝鮮半島からベトナムに至る東アジア。
- ◆県内の分布 未成魚が放流されている八郎湖では稀に漁獲されるが、それ以外では近年の確認例はない。
- ◆本種の概要 河川内では稚魚期から成魚期までの4～15年を過ごし、成熟後は降海シグナム島及びマリアナ諸島西側沖の海域で産卵するとされる。日本にはレプトセファルス（葉形仔魚）の形態で黒潮により輸送され、シラスウナギに変態して河川へ遡上する。一部に河川に遡上せず一生を海域で過ごす個体もいる。底生動物、魚類などを捕食する肉食性で、特に夜間に活発となる。一方、昼は石垣や石の隙間、土手の穴、泥底などに潜ることが多い。大型の個体は全長1m以上に達する。
- ◆本種の現状 現在、県内において分布が確認されているのは、少なくとも1971年以降には継続的に放流が行われている八郎湖及びその関連水域のみである。
- ◆生存に対する脅威 河川整備等による日中の隠れ場所の消失や餌料環境の変化などの生息環境の悪化、横断工作物等による移動障害などが、個体数の減少に繋がっている。また、資源状況が悪化した近年においては、シラスウナギや成熟個体の過重な採捕が、個体数の急激な減少に拍車をかけている。
- ◆現在の保護対策 県内では対策事例はない。
- ◆特記事項 環境省レッドリスト（2013）では、漁獲量データを基にした3世代の減少率が72～92%と高いこと等から、情報不足から絶滅危惧IB類に格上げされている。また、2014年には、国際自然保護連合（IUCN）により絶滅危惧IB類の指定を受けている。これらのことから本種を漁獲対象とする各県においては、シラスウナギや下りウナギなどの漁獲を制限する事例が増えている。

酸性水導入以前の田沢湖や1970年代までの八郎湖ではウナギ漁を行っていた記録があるほか、潟上市には1970年に八郎湖で採捕された大型個体の標本が保存されている。これらのことから、何らかの理由で県内の河川には近年になってニホンウナギが遡上しなくなったと推察されるが、ごく少数の遡上については否定できないこと、資源状況や海洋条件次第では以前のように来遊する個体数が増える可能性があること等から、今後も注視する必要があるとして、情報不足とした。

（水谷 寿）

- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 淡水魚類
- 陸産貝類
- EX
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

コイ目コイ科

ウケクチウグイ

Tribolodon nakamurai Doi & Shinzawa, 2000

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2014：絶滅危惧IB類



- ◆国内外の分布 新潟県・福島県（阿賀野川水系）、新潟県・長野県（信濃川水系）、山形県（最上川、赤川）、秋田県（子吉川）。
- ◆県内の分布 子吉川水系芋川で、1991年1月20日に全長461mm、体重1,840gの個体が確認されただけである。
- ◆本種の概要 ウグイ属の他の種と比較して体が大きく、全長83cm、体重3.9kgの記録がある。下顎前端が上顎前端よりも前方に突出しており、吻はいわゆる”受け口”になっているため、国内のウグイ属他の3種と識別は容易である。幼魚および未成魚も”受け口”で、上下の唇の先端部は黒色である。4～5月の産卵期には、鰓蓋から体側中央部を通り尾柄までと、眼の後部から体側下部を通り臀鰭に向かう太い2本の黒色縦条が出現する。また、縦条下部の腹側や吻は赤色となる。信濃川の河口で未成魚が採捕された記録があり、塩分耐性を有している可能性が高い。子吉川水系の採捕個体も他県から降海した個体が遡上した可能性がある。
- ◆本種の現状 県内での確認個体は1尾であり、再生産は不明である。この採捕個体が、本種の北限の記録である。
- ◆生存に対する脅威 詳細は不明であるが、個体数はきわめて少ないことから、瀬の産卵場の消失、河川改修やダム建設による移動阻害、遊漁などにより大きな影響を受けると推察される。
- ◆特記事項 福島県と新潟県の阿賀野川水系で1963年に確認・報告され、新種として記載されたのは2000年である。子吉川における本種の確認記録は、本種の生態や移動能力を反映していると推察され貴重である。なお、本種は個体数が少ないことに加え、ウグイおよびジュウサンウグイの稚魚や親魚と混獲される可能性があり、留意する必要がある。

（杉山秀樹）

コイ目ドジョウ科

ドジョウ

Misgurnus anguillicaudatus (Cantor, 1842)

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：—

環境省2014：情報不足



- ◆国内外の分布 日本各地、中国大陸、台湾島、朝鮮半島に分布する。
- ◆県内の分布 県内の小～大河川の中流～下流域、八郎湖、水路、ため池などに広く分布する。
- ◆本種の概要 本種は体が細長くほぼ円筒形をし、尾鰭基部上部に暗色斑がある。口は小さく下向きで、口髭は上唇に3対、下唇に2対の計5対ある。本種と近縁種で形態的にもよく似ている国外外来魚のカラドジョウがいるが、本種と比べてカラドジョウは口髭が長い、尾鰭基部上部の暗色斑がない、尾柄高が高いなどの相違がある。しかし、両種とも形態の変異が多く識別が困難な場合も少なくない。本種は県内のほぼ全域に生息し、河川では主に中流～下流の流れの緩やかな泥底やえぐれた場所、水生植物帯などで生活し、主に泥の中にある有機物や小動物を餌としている。水温の上昇や環境の変化にも強く、泥底で多少の水分があれば生息は可能である。また、他の魚種と異なり、水中の溶存酸素量が減少しても水面まで上がり、口から空気を吸い腸から酸素を吸収する腸呼吸をすることより、他の魚種が生活できないような場所でも生息が可能となる。県内では5月～7月頃に水田や湿地、河川敷のたまりなどの浅瀬で雄が雌の腹部に巻きつくようにして産卵する。
- ◆本種の現状 県内では、広範囲に分布し生息個体数も多いと推察されるが、河川や水路と水田が不連続となったり、圃場整備などによる水路の三面コンクリート化により繁殖場所が減少傾向にある。また、国外外来魚である近縁種のカラドジョウの分布域の拡大により、在来種が減少する可能性がある。
- ◆生存に対する脅威 河川、水路の改修、河川や水路から産卵場となる水田への移動阻害、農薬、家庭排水、工業排水による水質への影響、外来種の分布や生息数の拡大
- ◆特記事項 県内ではカラドジョウは米代川水系および子吉川水系で生息が確認されている。雄物川水系では未確認であるが、カラドジョウの分布域や生息数については現在のところ詳細が不明であり、生息実態の把握が必要である。

（熊谷雅之）

ナマズ目ナマズ科

ナマズ

Silurus asotus Linnaeus, 1758

秋田県2016： 情報不足

秋田県2002： —

環境省2014： 該当無し



- ◆ **国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、中国大陸、朝鮮半島、台湾島に分布する。
- ◆ **県内の分布** 雄物川、米代川、子吉川とその水系、湖沼、用水路などに分布する。
- ◆ **本種の概要** 本種は大きく扁平な頭部と幅広く大きい口と長い口髭が特徴的である。口髭は上顎と下顎に各1対の計4本ある。仔魚期は下顎にもう1対あり、計6本の口髭を持っているが成長するにつれ消失する。背鰭は小さく、胸鰭には鋭い棘がある。概ね3年で40cm程度まで成長する。県内では大～小河川の中流～下流域に生息しているほか、湖沼、水路にも生息し生息域は広範囲である。河川では流れが緩く水深の比較的深い淵で生活している。夜行性で昼は水際のえぐれた場所や水生植物の隙間などの物陰に潜み、夜になると水面近くの小魚やカエルなどを捕食する。県内では6～7月に水田、河川ではワンド、湖沼などでは岸際の泥底の浅瀬などで夜間に産卵が行われる。数尾の雄が1尾の雌の身体に巻き付くようにして産卵させる。卵は黄緑色でゼリー状の物質に包まれている。産卵期になると群れで活発に移動する。特に、この時期の雨の日は活発で、比較的流れの速い魚道でも身体をくねらせながら遡上する姿も見られる。
- ◆ **本種の現状** 本種の主な産卵場所は水田や天然の水路などで、河川と水路、水田との不連続化により繁殖場所が減少傾向にある。また、圃場整備による水路のコンクリート化、落差工による移動阻害などで生息域の縮小、再生産の悪化などにより生息数が減少している。近年では河川、水路等で大型の成熟個体は見られるものの当歳魚はほとんど見られなくなった。
- ◆ **生存に対する脅威** 河川改修による淵の消失、水路、河岸のコンクリート化、水路から産卵場となる水田への移動阻害
- ◆ **特記事項** 本種を維持するためには河川から水路や水田などへ続くネットワークの確保が重要で、また、水路の三面化を避けて底泥質を確保し、水生植物等が生育できる環境の整備などの配慮が必要である。
県内には江戸時代後期ごろに移入されたものと推察されるが、明治以前に移入された種は在来種に位置づけられている。

(熊谷雅之)

サケ目サケ科

ニッコウイワナ

Salvelinus leucomaenis pluvius (Hilgendorf, 1876)

秋田県2016： 情報不足

秋田県2002： —

環境省2014： 情報不足



- ◆ **国内外の分布** 本州北部から関東、中部、北陸および山陰東部の一部に分布する。本種のほか、本州中部相模川以西に分布するヤマトイワナ、中部地方に分布するゴギなどがあるが、これらの分布境界は不明確である。
- ◆ **県内の分布** 米代川、雄物川および子吉川の3大河川、馬場目川、白雪川などのほか、ダムや湖沼に分布する。なお、本種は昔から滝の上など本来の分布域よりも上流に放流されることもあり、本来の天然分布範囲が不詳であることも少なくない。
- ◆ **本種の概要** 全長60cm以上になるが、普通は30cm前後。色彩変異が大きく、体側にクリーム色、薄い赤などの有色斑とともに白色斑も有するが、斑紋の輪郭は不明瞭なものが多い。また、頭部背面に白色斑を認めるものもあるが、吻端にまでは及ばない。水温20℃以下の河川の最上流に生息し、水生昆虫や魚類を摂餌する。産卵期は9～11月で、川幅の広い本流よりは支川や狭い枝川を好み、産卵床は流れが緩い砂礫河床に造られることが多い。本種は、有色斑を持つ個体が海域で確認された事例はない。
- ◆ **本種の現状** 近年は、漁業協同組合による人工種苗放流が行われている一方、釣り人は山奥に入り、大型個体を多く釣る傾向になっている。同時に、河川開発や森林開発により本種が生息し産卵する環境がきわめて悪化している。
- ◆ **生存に対する脅威** 森林伐採や道路工事による土砂の堆積、ダム建設や河川開発による生息場所の消失、ブラウントラウトの侵入による雑種の出現、過大な釣獲圧などにより激減している。
- ◆ **現在の保護対策** 在来個体群を保全するため、漁業協同組合が禁漁区に設定する取り組みも行われている。
- ◆ **特記事項** 県内の1水系では、狃頭(頭部が正面から潰れたように見える)個体群が認められている。

(杉山秀樹)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ダツ目サヨリ科

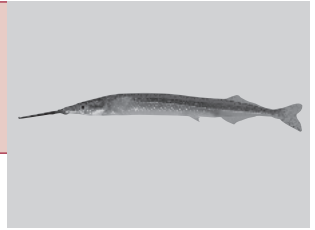
クルマサヨリ

Hyporhamphus intermedius (Cantor, 1842)

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：—

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 朝鮮半島、黄海、台湾、インド・西部太平洋に分布する。国内では青森県以南の本州から九州の汽水域に分布する。
- ◆県内の分布 船越水道および八郎湖内に分布する。河川では米代川河口で確認されている。
- ◆本種の概要 本種は全長20cm程度と小型で、下顎の先端は赤味がなく、汽水域ないし淡水域に生息する。これに対して、サヨリは全長40cmを超え、県沿岸の岩礁域に広く生息し、下顎の先端は赤色である。船越水道では両種が確認されたこともある。
本種は八郎湖内の大渦橋周辺で6月から7月に完熟した雌個体が採捕されたことがある。また、6月に沈水性植物の葉や茎に付着卵が確認されたり、同時に、岸よりの表層で稚魚が採捕されたりして、生活史には不明な部分が少なくない。
- ◆本種の現状 船越水道および米代川河口部は汽水域であり、八郎湖内は淡水域であるが、いずれも護岸化されており水生植物が貧弱で減少している。本種の卵は水生植物に付着し、稚魚はその周辺で成育することから、今後の動向に留意する必要がある。
- ◆生存に対する脅威 表層で動物プランクトンを摂餌することから、八郎湖内のアオコの発生は大きな影響を及ぼすと推察される。
- ◆特記事項 干拓前の八郎湖では本種を「しょぶ」と呼び、漁獲され食用に利用していた。

(杉山秀樹)

スズキ目ハゼ科

シマウキゴリ

Gymnogobius opperiens Stevenson, 2002

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 福井県、茨城県以北の国内。ロシア東部、朝鮮半島。
- ◆県内の分布 米代川、雄物川、子吉川水系のほか、八峰町、男鹿市、由利本荘市などの独立小河川の、中・下流域に分布。
- ◆本種の概要 形態的にはウキゴリ、スミウキゴリに似ている。水生昆虫の幼虫などの底生動物や魚類の仔稚魚などを捕食する肉食性であり、春季に石の下面などに産卵する。近縁のウキゴリよりは小型で、全長10cm程度である。ウキゴリと同所的に確認されることがあるが、その場合、本種は平瀬などの流れのある場所に、ウキゴリは淵などの流れの弱い場所にそれぞれすみ分けている。
- ◆本種の現状 生息域は河川の中・下流域で、人為的な環境変化が生じやすい場所であり、実際に明らかに環境が悪化している生息地も認められる。また、本種を含むウキゴリ、ヨシノボリ類などの両側回遊性魚類の存続にとっては、河川内のみならず、汽水域、沿岸域のそれぞれの環境が良好であることが求められ、さらに、降下、遡上が容易にできるようにそれらの連続性も不可欠な要件となる。
- ◆生存に対する脅威 河川改修による直線化、平坦化、遡上阻害など。
- ◆現在の保護対策 本種の保護に特化した対策は講じられていない。
- ◆特記事項 分布範囲は広いと考えられるものの、実態を十分には把握できていない。確認した生息地については、いずれも個体数密度は低く、特に成熟個体が少ない。また、生活圏は河川内から汽水域、沿岸部と広範囲に渡り、それらの場所は環境の改変も行われやすい場所である。これらのことから、環境条件の変化によっては容易に絶滅のおそれが生じる可能性があり、今後の情報収集も必要と考えられること等から、情報不足とした。

(水谷 寿)

スズキ目ハゼ科

クロヨシノボリ

Rhinogobius brunneus (Temminck & Schlegel, 1845)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：絶滅危惧種IB類
環境省2014：該当無し



- ◆ **国内外の分布** 本州の秋田県・千葉県以南、四国、九州、南西諸島。現在のところ、男鹿市が本種の分布の北限。
- ◆ **県内の分布** 男鹿半島の小河川。秋田県では、1998年に海に滝状に注いでいる男鹿半島の小河川で確認され、その後2001年に近隣の別水系でも確認された。
- ◆ **本種の概要** 産卵は春季に石の下面などに行われ、4～5日で孵化した後、すぐに降海する。2cm程度になると河川に遡上し、小型の水生昆虫や付着藻類を摂餌して成長する。全長は8cm程に達し、多くは2年で成熟するとされる。分布の中心である西南日本においては、流程が数kmの小規模河川の中・上流域に多く生息し、特に淵を好むという。
本県では、小河川の遡上できない工作物直下の礫の下面で確認された。
- ◆ **本種の現状** 本種を含むヨシノボリ類や多くのハゼ科魚類のように稚魚期に川へ遡上し、生息や産卵に礫を必要とする魚種にとっては、河川改修等による河床の平坦化、アーマーコート化や横断工作物による遡上阻害などは、個体群の維持に壊滅的な打撃を与える可能性がある。
- ◆ **生存に対する脅威** 河川改修に伴う生息適地の減少や遡上阻害など。
- ◆ **特記事項** 本種が確認されたのは2地点のみであるが、それらの場所においても2002年以降は確認されていない。また、確認された場所も、一般的に本種が好むとされる生息環境とは異なる場所と考えられた。確認時点でも分布域は極めて限定的で、個体数も少なかったことから、その後絶滅した可能性も否定できないが、分布の中心は黒潮影響域である西南日本であることなどから、本県で確認された個体については、対馬暖流により南方から輸送された稚魚が偶発的に遡上したものである可能性も否定できないため、情報不足とした。

(水谷 寿)

スズキ目ハゼ科

チチブ

Tridentiger obscurus (Temminck & Schlegel, 1845)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：絶滅危惧種IB類
環境省2014：該当無し



- ◆ **国内外の分布** 本州及び九州。国外では朝鮮半島。
- ◆ **県内の分布** 米代川、雄物川、子吉川等大河川や船越水道の河口域。中小河川の河口域から数百m程度上流までの水域。
- ◆ **本種の概要** 形態的にはヌマチチブによく似ているが、ヌマチチブが広範囲に分布しているのに対し、本種の生息域は汽水域を中心とした狭い範囲に限定される。また、ヌマチチブは陸封型が多くの水域で認められるのに対し、本県では本種の陸封型は認められていない。産卵期は春季から夏季、転石の下、石垣の隙間などに雄が産卵室を作り、産卵後も雄は孵化まで卵を守る。雑食性で、底生動物や魚類の仔稚魚などの他、藻類なども摂餌する。全長は8cm程度で、寿命は概ね1年とされる。
- ◆ **本種の現状** 生息が確認された河川数は少ないうえ、大型の個体が1～2尾採捕される程度と1地点における採集数は少ない。生息域は汽水域とその周辺の狭い範囲に限定されるが、これらの場所は自然の状態でも地形的な変化が起こりやすい不安定な場所である。従って、特に小河川の河口部においては、地形の急変や、床固めや横断工作物設置などの人為的な改変により個体群が絶滅するおそれがある。
- ◆ **生存に対する脅威** 河川改修等に伴う、特に河口部における床固めなどの改変や、横断工作物の設置等は、個体群にとって致命的である。
- ◆ **特記事項** 1972年に本種から分離され別種となった同属のヌマチチブは本種に比べて広範囲に分布し、個体数も多い。このことから、過去の記録を含め、同定については留意する必要がある。

(水谷 寿)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

スズキ目ハゼ科

ルリヨシノボリ

Rhinogobius sp.CO

秋田県2016：地域個体群

秋田県2002：地域個体群

環境省2014：該当無し



- ◆**国内外の分布** 韓国済州島。国内では日本海側の北海道、本州、太平洋側では千葉県以南、四国、九州、南西諸島に分布する。
- ◆**県内の分布** 両側回遊型は、男鹿半島や県南部の沿岸の小河川に生息する。陸封型は三ノ目潟（男鹿市）に限られる。
- ◆**本種の概要** 頬にルリ色の小斑点が散在し、尾柄基部に「ハ」の字型の黒色斑がある。ただし、頬の小斑点は不明瞭な個体も少なくない。本種の両側回遊型は河口域が瀬で海に流入する河川に多く、全長10cm程度になり、流れの速い場所の岩の下部に生息する。本種の陸封型が生息する三ノ目潟は、水深29mの孤立した砂底の小湖である。この陸封型個体群は両側回遊型と同様、頬にルリ色の小斑点と尾鰭基部に太い黒色斑があるが、小型で成熟する。
- ◆**本種の現状** 本種の陸封型個体群が生息する場所は閉鎖されているため、何らかの理由により容易に壊滅的な影響を受ける可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 近隣の池沼にオオクチバスが生息している。
- ◆**特記事項** 三ノ目潟の形成年代は、約20,000～24,000年前と推察されている。本種の陸封型個体群の存在は、全国的にもきわめて稀である。

(杉山秀樹)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

付属資料

サケ目シラウオ科

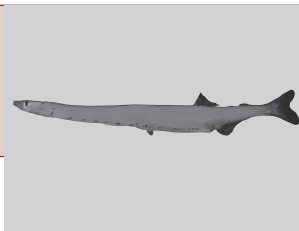
シラウオ

Salangichthys microdon (Bleeker, 1860)

秋田県2016：留意種

秋田県2002：—

環境省2014：該当無し



- ◆国内外の分布 北海道、本州、九州の沿岸部、サハリン、沿海州、朝鮮半島東岸に分布する。
- ◆県内の分布 雄物川、米代川、子吉川の河口、八郎湖などに分布する。
- ◆本種の概要 本種は他の多くの魚類と違い、成魚になっても体が透明である特徴を持つ。主に河川の河口付近（汽水域）を生息場とし、小型の甲殻類や仔魚を餌として成長する。本種の成熟した雄の臀鰭基底の上部には吸盤状の鱗が一行に並んでいる（鱗数16～18枚）が、雌にはない。雄はこの鱗を使い雌に吸着して産卵させる。寿命は1年で産卵を終えると死亡する。産卵期になると汽水域から河川などへ遡上する。県内では4月下旬～5月中旬にかけて河川などに遡上し産卵する。河川での産卵場の詳細は不明であるが、八郎湖では水深1m前後の礫底（径の小さい礫が堆積する場所）もしくは締まった砂底で産卵する。本種の卵は大きさが1mm程度で卵門からのびる十数本の糸状の付着糸が着いていることが特徴である。八郎湖では地方名「しろよ」と呼ばれ、毎年9月～10月頃に船びき網などで漁獲されている。
- ◆本種の現状 シラウオ漁獲量は大きく変動しているが、特に、2008年27トンとピークに以降、順に19トン、18トン、17トンと漸減し、さらに2012年には5トンと激減し、翌年の2013年は1.7トンと過去最低となった。この状況は2014年においても2.1トンと同様で、何らかの対応が必要である。
- ◆生存に対する脅威 河口部の改修、土砂の流入、堆積、移動経路の障害、過度な漁獲
- ◆特記事項 八郎湖内では水質の悪化や泥などの堆積が進行しており産卵場が減少傾向にある。本種と名前がよく似ているシロウオは、腹鰭が吸盤状になっているハゼ科魚類であるが、本種は背鰭後方に脂鰭を持つサケ目魚類である。

（熊谷雅之）

サケ目サケ科

サクラマス(ヤマメ)

Oncorhynchus masou masou (Brevoort, 1856)

秋田県2016：留意種

秋田県2002：—

環境省2014：準絶滅危惧種



- ◆国内外の分布 国内では、北海道全域、神奈川県と山口県以北の本州および大分県と宮崎県を除く九州に分布する。カムチャツカ半島、ロシア連邦沿海州、中国東北部、サハリン、朝鮮半島および東南部の沿岸・河川
- ◆県内の分布 渓流域を有する河川
- ◆本種の概要 本種は、孵化後1～2年の河川生活の後に海洋生活を送る降海型と、河川で一生涯を過ごす河川残留型が存在する。本県においては両型が存在し、雄の多くが河川残留型に、また、雌の多くが降海型になる。繁殖期以外の斑紋等の特徴として、河川残留型では背部は薄い褐色で、側線部は薄紅色で朱点は存在しない。体側部には、8～10個のパーマークを有する。降海型は、体側部のパーマークが消滅し銀白色となり、背鰭及び尾鰭先端が黒くなる。産卵は、9～10月に渓流域内にある淵尻の礫底で行われる。
- ◆本種の現状 本種は漁業・遊漁資源、観光資源として重要な存在である。しかし、その資源量は減少しており、原因として河川の直線化・平坦化、遡上を阻害する河川工作物などによる生息域の減少などがあげられる。また、他県産で河川残留型になりやすい性質を有する稚魚が放流されており、交雑による生態の変化も懸念されている。
- ◆生存に対する脅威 河川の直線化・平坦化、河川工作物等による生息場所の喪失
- ◆現在の保護対策 河川工作物に対する魚道の設置、在来個体群由来の種苗放流
- ◆特記事項 降海型について、資源増殖と遺伝的多様性の維持を目的として、県内河川に遡上したサクラマスを親魚としたふ化放流事業が行われている。しかし、県内河川ごとの在来の残留型については対策が講じられていない状況にある。

（草薙利美）

スズキ目ハゼ科

ジュズカケハゼ広域分布種

Gymnogobius sp. "Widely-distributed species"

秋田県2016：留意種

秋田県2002：—

環境省2014：準絶滅危惧



◆国内外の分布 関東、北陸以北に広く分布。

◆県内の分布 八郎湖、十和田湖などの湖沼、米代川、雄物川、子吉川水系を始めとした各河川の中・下流域、ため池やその周辺の水路などに分布。

◆本種の概要 形態的にはピリンゴによく似ているが、ピリンゴが孵化後海に下り、河川へ遡上した後も感潮域、河口域に生息するのに対し、本種は一生を淡水域で暮らす。産卵期は春で、雄は泥底に巣穴を掘って雌に産卵させ、卵を守る。砂泥底の場所に生息していることが多く、着底しているよりは遊泳していることが多く、水生昆虫など小型の動物を摂餌する。

八郎湖周辺では「なっとうごり」と呼ばれ、漁獲したものは鮮魚や佃煮などで販売されている。

◆本種の現状 遊泳生活をすることからオオクチバスの捕食対象となりやすい。また、河川改修等により産卵適地でもある砂泥底がなくなることは、本種の個体群維持にとって致命的となる。なお、本種が生息する小規模なため池等は、シナイモツゴ等も同所的に生息していることが少なくないため、水域自体を保全すべき対象と考えると対策を講じる必要がある。

◆生存に対する脅威 オオクチバスによる食害

◆現在の保護対策 一部の水域においてはオオクチバスの駆除が行われているものの、本種の保全に特化した取り組みではなく、また、オオクチバスが定着している水域は依然として多いため、問題の解決には至っていない。

◆特記事項 篠崎・後藤1999によると、環境省レッドデータブックで「ジュズカケハゼ鳥海山周辺固有種」として「IA類」に指定されているコシノハゼ *Gymnogobius nakamurae* が県内に分布しているとされているが、詳細は不明であり、ジュズカケハゼ旧4種群のうち、確実に県内で確認できるものは、本種のみと考えられる。

本種は八郎湖では漁獲対象種であるが、環境省レッドリスト(2013)では準絶滅危惧である。また、ため池などの県内の小規模な生息地の多くについては情報が不十分なことから、留意種とした。

(水谷 寿)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

淡水魚類参考文献

- 天野 翔太・酒井 治己.2014.降海性コイ科魚類ウグイ属マルタ2型の形態的分化と地理的分布.水産大学校研究報告 63(1):17-32.
- Arai,R・Akai,Y.1988.*Acheilognathus melanogaster*, a senior synonym of *A. moriokae*, with a revision of the genera of the subfamily Acheilognathinae (Cypriniformes, Cyprinidae). Bull.Natn.Sci.Mus.,Tokyo,Ser.A,14 (4):199-213.
- Asai,T・Senou,H・Hosoya,K.2011.*Oryzias sakaizumii*,a new ricefish from northern Japan(Teleostei: Adrianichthyidae).Ichthyological Exploration of Freshwaters 22(4):289-299.
- 後藤 晃・森 誠一(編・著).2003.トゲウオの自然史—多様性の謎とその保全.北海道大学図書刊行会.
- Goto,A.1988.Reproductive behavior and homing after downstream spawning migration in the River Sculpin, *Cottus hangiongensis*.Japanese Journal of Ichthyology 34(4):488-496.
- 樋口 正仁・後藤 晃.1994.イトヨの集団構造と分化のプロセス.川と海を回遊する淡水魚—生活史と進化(後藤 晃・塚本 勝巳・前川 光司 編).東海大学出版会: 114-127.
- 樋口 正仁・兵藤 則行・佐藤 雍彦・野上 泰宏・河野 成実.2011.ミトコンドリアDNA分析による信越地方産イトヨの遺伝的手段構造.日本水産学会誌77(6):1098-1100.
- Higuchi,M・Sakai,H・Goto,A.2014.A new threespine stickleback, *Gasterosteus nipponicus* sp. nov. (Teleostei: Gasterosteidae), from the Japan Sea region.Ichthyol Res 61:341-351.
- 今井 千文・酒井 治己・新井 崇臣.2008.コイ科の希少種ウケクチウグイの耳石Sr:Ca比解析による河川型生活史の検証.水産大学校研究報告 57(2):137-141.
- 石鍋 寿寛.1996.ゼニタナゴ *Acheilognathus typus* (Bleeker, 1863). 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III)(水産庁 編).日本水産資源保護協会:173-180.
- Iwata,A・Hamada,K.1986.A Dwarf Male of the Arctic Lamprey, *Lethenteron japonicum* from the Assabu River, Hokkaido, Japan.Bull. Fac. Fish.Hokkaido Univ 37(1):17-22.
- Jordan, D. S・Hubbs, C. L.1925.Record of fishes obtained by David Starr Jordan in Japan,1922.Memoirs of the Carnegie Museum 10(2).
- 環境省.2015.レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生動物—4 汽水・淡水魚類.株式会社ぎょうせい.
- 加納 光樹・斉藤 秀生・洲上 聡子・今村 彰伸・今井 仁・多紀 保彦.2007.渡良瀬川水系の農業水路におけるカラドジョウとドジョウの出現様式と食性.水産増殖 55(1):109-144.
- 川那部 浩哉・水野 信彦・細谷 和海(編 監修).2001.山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版.山と溪谷社.
- 北村 淳一.2008.タナゴ亜科魚類:現状と保全.シリーズ・Series日本の希少魚類の現状と課題.魚類学雑誌55(2):139-144.
- 小西 蘭.2010.シナイモツゴ:希少になった雑魚をまもる.シリーズ・Series 日本の希少魚類の現状と課題.魚類学雑誌57(1):80-83.
- 河野 光久・三宅 博哉・星野 昇・伊藤 欣吾・山中 智之・甲本 亮太・忠鉢 孝明・安渾 弥・池田 怜・大慶 則之・木下 仁徳・児玉 晃治・手賀 太郎・山崎 淳・森 俊郎・長濱 達章・大谷 徹也・山田 英明・村山 達朗・安藤 朗彦・甲斐 修也・土井 啓行・杉山 秀樹・飯田 新二・船木 信一.2014.日本海産魚類目録.山口県水産研究センター研究報告(11):1-30.
- Katano,O・Nakamura,T・Yamamoto,S・Abe,S.2005.Summer daytime habitat and population density of the torrent catfish, *Liobagrus reini*, in the Urano River. Ichthyol Res 52:50-56.
- Kawase,S・Hosoya,K.2015.*Pseudorasbora pugnax*,a new species of minnow from Japan,and redescription of *P. pumila* (Teleostei: Cyprinidae). Ichthyological Exploration of Freshwaters 25(4):289-298.

- Konishi, M · Sakano, H · Iguchi, K. 2009. Identifying conservation priority ponds of an endangered minnow, *Pseudorasbora pumila*, in the area invaded by *Pseudorasbora parva*. *Ichthyol Res* 56:346-353.
- Kumagai, M · Sugiyama, H · Goto, A. 2013. Polymorphic spawning-nest types in a local population of the fluvial sculpin, *Cottus nozawae* (Teleostei: Cottidae). *Ichthyol Res* 60:396-400.
- 道津 喜衛. 1957. チクゼンハゼの生態・生活史. *魚類学雑誌* 6(4-6):97-104.
- 宮地 傳三郎 · 川那部 浩哉 · 水野 信彦. 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版. 保育社.
- 守山 拓弥 · 柿野 亘 · 水谷 正一. 2010. 地下水を水源とする保全池における冬期のホトケドジョウの分布パターン. *魚類学雑誌* 57(2):161-166.
- 向井 貴彦 · 渋川 浩一 · 篠崎 敏彦 · 杉山 秀樹 · 千葉 悟 · 半澤 直人. 2010. ジュズカケハゼ種群: 同胞種群とその現状. シリーズ・Series 日本の希少魚類の現状と課題. *魚類学雑誌* 57(2):173-176.
- Moreira, A.L · Taylor, E.B. 2015. The origin and genetic divergence of “black” kokanee, a novel reproductive ecotype of *Oncorhynchus nerka*. *Canadian Journal of Fisheries and Aquatic Sciences* 72(10):1584-1595.
- 中坊 徹次 編. 2000. 日本産魚類検索 全種の同定 第二版. 東海大学出版会.
- Nakabo, T · Nakayama, K · Muto, N · Miyazawa, M. 2011. *Oncorhynchus kawamurae* “Kunimasu,” a deepwater trout, discovered in Lake Saiko, 70 years after extinction in the original habitat, Lake Tazawa, Japan. *Ichthyol Res* 58:180-183.
- 中村 智幸 · 岸 大弼 · 徳原 哲也 · 久保田 仁志 · 亀甲 武志 · 坪井 潤一. 2012. 在来溪流魚 (イワナ類, サクラマス類): 利用, 増殖, 保全の現状と課題. シリーズ・Series 日本の希少魚類の現状と課題. *魚類学雑誌* 59(2):163-167.
- 中村 守純. 1969. 日本のコイ科魚類: 日本産コイ科魚類の生活史に関する研究. 資源科学研究所.
- 酒井 治己 · 新井 崇臣 · 今井 千文 · 杉山 秀樹 · 佐藤 仁志 · 田 祥麟. 2004. ルリヨシノボリ *Rhinogobius* sp. CO の自然陸封個体群. *魚類学雑誌* 51(2):175-180.
- 酒井 治己 · 齊藤 貴行 · 竹内 基 · 杉山 秀樹 · 桂 和彦. 2007. 東北地方におけるコイ科エゾウグイとアブラハヤの属間雑種. *水産大学校研究報告* 55(2):45-52.
- 酒井 治己 · 宮内 亮哉 · 竹田 大地 · 樋口 正仁 · 後藤 晃. 2013. イトヨ *Gasterosteus aculeatus* 日本海型と太平洋型の鱗板形態と分布. *日本生物地理学会会報* 68:57-63.
- 佐藤 正人 · 鷺尾 達. 2014. 米代川水系阿仁川支流における冬季のサクラマス幼魚とイワナの定位場所および定位点. *水産増殖* 62(2):147-154.
- 佐藤 正人 · 渋谷 和治. 2015. 米代川から放流されたサクラマスの回遊経路の推定、成長速度および回帰魚の母川選択率. *水産増殖* 63(3):283-290.
- 勝呂 尚之. 2005. 谷戸の代表種ホトケドジョウ. 希少淡水魚の現在と未来-積極的保全のシナリオ (片野 修 · 森 誠一 編). 信山社:50-60.
- 鈴木 寿之 · 渋川 浩一 · 矢野 維幾. 2004. 決定版 日本のハゼ. 平凡社.
- Sakai, H · Amano, S. 2014. A new subspecies of anadromous far eastern dace, *Tribolodon brandtii maruta* subsp. nov. (Teleostei, Cyprinidae) from Japan. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A*, 40(4):219-229.
- 杉山 秀樹. 1984. 秋田県における淡水魚類相とその特徴. *日本水産学会東北支部会報* 32:93-97.
- 杉山 秀樹. 1985. 秋田の淡水魚. 秋田魁新報社.
- 杉山 秀樹. 1997. 淡水魚あきた読本. 無明舎出版.
- 杉山 秀樹. 1999. 秋田県雄物川水系におけるアブラボテの繁殖. *秋田自然史研究* 39:10-14.
- 杉山 秀樹. 2000. 田沢湖 まぼろしの魚 クニマス百科. 秋田魁新報社.
- 杉山 秀樹. 2005. オオクチバス駆除最前線. 無明舎出版.
- 杉山 秀樹. 2006. 東北地方における希少淡水魚類-現状と温暖化の影響-. *月刊海洋* 38(3):221-227.
- 杉山 秀樹. 2012. 大瀧村の魚類. 豊かな大地の多様な生きものたち: 大瀧村生物調査報告書:51-57.
- 杉山 秀樹. 2013. クニマス・ハタハタ秋田の魚 100. 東北出版企画.

- 杉山 秀樹.2013.八郎瀧の干拓にともなう魚類相の変遷.八郎湖流域管理研究 2:59-68.
- 杉山 秀樹・佐藤 正人.2000.秋田県男鹿半島におけるクロヨシノボリの分布.秋田自然史研究40:38-41.
- 杉山 秀樹・佐藤 正人.2006.男鹿市周辺河川の魚類相.平成16年度秋田県水産振興センター事業報告書:315-323.
- 杉山 秀樹・森 誠一.2009.トミヨ属雄物型：きわめて限定された生息地で湧水に支えられる遺存種の命運.シリーズ・Series 日本の希少魚類の現状と課題.魚類学雑誌56(2):171-175.
- 杉山 秀樹・木村 青史.2014.八郎瀧から60年、漁業に何が起きたか.八郎湖流域管理研究3:53-58.
- 高田 啓介.1987.トミヨ属魚類の遺伝学的分化.日本の淡水魚類－その分布、変異、種分化をめぐって(水野 信彦・後藤 晃 編).東海大学出版会:134-143.
- 竹花 佑介・北川 忠生.2010.メダカ:人為的な放流による遺伝的攪乱.シリーズ・Series日本の希少魚類の現状と課題.魚類学雑誌57(1):76-79.
- 多紀 保彦・酒井 治己・桂 和彦・河野 博.1994.ウケクチウグイ.日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料.水産庁:342-348.
- 田中 晋.1982.東北・北陸地方におけるイバラトミヨとトミヨの形態の変異.魚類学雑誌 29(2):203-212.
- 田辺 信吾・杉山 秀樹.2003.アカザの産卵床と河床構造.日本水産学会大会講演要旨集2003:81.
- 田辺 信吾・杉山 秀樹.2008.秋田県皆瀬川におけるアカザの成熟と二次性徴.日本魚類学会年会講演要旨41:82.
- 寺町 茂.2004.ホトケドジョウの生息地とその保全のために.環境保全学の理論と実践 4 森 誠一(監修・編集).信山社サイテック:44-59.
- Tsuruta,T・Goto,A.2006.Fine scale genetic population structure of the freshwater and Omono types of nine-spined stickleback *Pungitius pungitius* (L.) within the Omono River system, Japan. *Journal of Fish Biology* 69:155-176.
- 山本 祥一郎.2015.ヒメマスー複雑な移殖の歴史をもつ水産重要種.シリーズ・Series日本の希少魚類の現状と課題.魚類学雑誌62(2):195-198.
- 山崎 裕治・後藤 晃.2000.ヤツメウナギ類における系統分類と種分化研究の現状と課題.魚類学雑誌 47(1):1-28.
- 山崎 裕治・稲葉 修.2004.只見川上流のカワヤツメ.魚類学雑誌51:187-188.
- Yamazaki,Y・Yokoyama,R・Nishida,M・Goto,A.2006.Taxonomy and molecular phylogeny of *Lethenteron* lampreys in eastern Eurasia.*Journal of Fish Biology* 68 (Supplement B):251-269.

Land Snails



陸産貝類

Red Data Book of Akita Prefecture 2016
Animals I

陸産貝類概説

秋田県の陸産貝類研究の始まりは、明治42年に山形の大滝五百太氏が発表した、「奥羽産陸上介類」(介類雑誌第3巻第3号) だろうと思われる。氏は本県の東成瀬、男鹿、十二所などを採集して回り、17種を記録している。しかしその後、我々の力不足のせいか、そのうちの4種は再採集できていない。

その後、昭和12年、黒田徳米博士・鳥羽源蔵氏共著の「*Euhadra decorata*とその諸型について」や、昭和15年発行の「南秋田郡誌」などの発表がある。

昭和16年頃、田添健治氏という医師が、男鹿の陸貝を研究していたということを聞いたが、南方で戦死されたとのことで、研究結果は残されていない。

昭和18年には、西村正氏・渡部景一氏共著「男鹿半島貝類目録」が発表されている。

昭和22年、西村・渡部両氏の採集したミチノクマイマイが、吉良哲明氏によって新亜種として発表され、昭和24年には黒田博士が「夢蛤」(謄写刷)に、ニシムラギセルと新称し、西村正氏採集のキセルガイを発表している。

昭和30年、雄勝郡高松岳より三好功一氏によって、新種ミヨシギセルが発見され、昭和54年湊宏博士によって正式に記載されたが、模式産地が岩手県の国見温泉となっている。

その後、西村氏は「十和田の陸産貝類」「県内より知られた新貝類について」「秋田県陸産貝類目録」「秋田県陸産貝類研究史」など、多くの研究文を発表した。

また、昭和36年、筆者が秋田駒ヶ岳で採集したものが波部忠重博士により「カワグチレンズガイ」と命名され、学会誌に発表された。その後、筆者は「生物秋田」や「秋田自然史研究」などに数編の報文を発表し、平成12年「秋田県の陸産貝類」と題して「秋田県環境と文化のむら」から、県内陸貝の概要をまとめた冊子を出版した。本県の陸産貝類の調査は大変遅れているが、近年、各市町村で動植物調査がさかんに行われるようになり、いずれ県内の陸貝相も次第に明らかになってゆくものと思われる。

本県は、亜寒帯に近い温帯に位置している。また、いわゆる日本海側気候帯に属しており、気温の日較差が年間で冬に最も小さく、降水量の年変化が大きく、日照時間の年変化が極端に小さい日本海側気候の特色をはっきり示している。さらに、日本海を流れる海流の影響などから、本県の気候は、海岸部と内陸部で降雪量、気温などに大きな違いがある。一般に陸貝の生息に適した地域は、温暖多湿の土地、広葉樹林の多い場所などがあげられ、全県的にみて海岸部が内陸部よりいくらか個体数が多いように考えられる。また、本県東部の内陸部の大部分を占める奥羽山系には、山地性の陸貝が数種みられる。全般的にみて本県は、陸貝類にとって必ずしも良い生活環境とはいえないようである。

秋田県の陸産貝類の生息種数や個体数は他県にくらべてやや貧弱である。しかし、奥羽山系の一部の和賀山塊などでは、稀産種が数種確認されており、また県内一箇所では確認されていないハコダテヤマキサゴや、南限と考えられるエゾコギセルの生息なども確かめられている。これらは共に個体数が極めて少なく、生息地も県内では今のところ和賀山塊に限られている。この山塊は山が深く、陸貝研究者の入ったことのない地域が大部分なので、今後の調査次第では、新たな種が発見されるものと思われる。その他、ミヨシギセル、カワグチレンズガイ等本県に関係深く、秋田・岩手の両県でしか記録されていない陸貝も生息している。

和賀山塊と共に今後の調査が特に必要とされる地域としては、十和田湖畔があげられる。この地域にはスカシベッコ

ウ、ヒメコハクモドキなどの県内稀産種が生息しているが、観光地であるため、土地開発や施設の建設などにより、その生存が危惧されている。また、スジキビなどの微小貝類の調査と、県北部の陸産貝類の分布状態の確認がまだ進んでいない状態である。

また、本県で確認された特異な分布様式を示している種としては、本県北部から青森県にかけての日本海側にみられるミチノクマイマイ、太平山のヤママメタニシ、秋田市千秋公園周辺のナミコギセルなどがあげられる。

陸産貝類はその行動半径（移動性）が狭いため、山地や里ごとに種が違うなど、特殊な分布を示すものが多い。また、乾燥に弱く、森林の開発などによる林床の変化により、絶滅することが考えられる種もある。そのため、樹木の伐採や林の下草刈り等は、陸貝の生息に影響のないように、十分配慮した計画のもとに実施されるべきものと考えられる。

本書では、県内で絶滅のおそれのある陸産貝類を守るための第一歩として、ここに数種を挙げたが、これらの種を保護することだけでいいのではなく、これを足がかりとして自然界全体の保全を図ってゆかなければならないと思われる。陸貝は特に、自然環境の変化や人間のもたらす影響に大きく左右されるので、今日まで、ある種は絶滅の危機にさらされ、また、既にその確認が困難になった種もいくつか数えられるようになった。

我々の身の回りにも、いまだ正確な情報を得ることができず放置されている種が、相当数あることが予測される。これら未記録種の分布状態を把握することと、地域生態系の確認調査を早急に行う必要があるものと考えられる。

現生の生態系を保つために、民間と自治体などが協力しあって、調査研究を進めてゆくことが望ましいと思われる。

（川口洋治）

アマオブネ型目ヤマキサゴ科

ハコダテヤマキサゴ

Hemipoma hakodadiense (Hartmann, 1890)

秋田県2016：絶滅危惧IA類
 秋田県2002：絶滅危惧種IA類
 環境省2014：絶滅のおそれのある地域個体群



- ◆国内外の分布 青森県・秋田県以北、佐渡島、北海道、択捉島。
- ◆県内の分布 1965年に湊宏博士が湯沢市泥湯付近で死殻1個を採集したとの記録があったが、その後確認されていなかった。1990年に和賀山塊の生保内川支流オソダテ沢で生貝が確認された。現在県内で生息が確認されているのは、ここ1か所のみである。
- ◆本種の概要 北海道には広く分布しているが、本州での分布記録は極めて少なく、4～5か所が確認されているにすぎない。ブナ林中の地上の落葉中に見られるが、個体数が少ない。
- ◆本種の現状 本県では生息範囲が極めて限定されている。
- ◆生存に対する脅威 森林地域の開発などにより、絶滅が危ぶまれる。
- ◆特記事項 1属1種であり、極めて希少な種なので保全に留意が必要である。

(川口洋治)

新生腹足目イツマデガイ科

ヤマメタニシ

Fukuia integra Pilsbry, 1924

秋田県2016：絶滅危惧IA類
 秋田県2002：絶滅危惧種IA類
 環境省2014：絶滅危惧I類



- ◆国内外の分布 秋田県（日本海側）以南～島根県、伊吹山、箱根、天城山。
- ◆県内の分布 太平山皿見内口。現在県内では、ここ1か所のみ。
- ◆本種の概要 秋田県がこの種の北限である。県内では太平山以外では記録がなく、分布が限定されている。個体数は極めて少ない。ヒメアオキの葉を好んで食べ、落葉の下や、夏期には低木の葉の裏などに見られる。
- ◆本種の現状 分布範囲が極めて狭いが、県内では太平山皿見内口に似た環境のところのほかにもあるので、今後の調査により分布地域が新しく見つかる可能性もある。
- ◆生存に対する脅威 生息環境の悪化。飛び石状の分布状態で、生息数も極めて少ないので、登山などによる周辺地域の環境悪化が心配である。
- ◆現在の保護対策 生息地付近は太平山県立公園に指定されている。

(川口洋治)

異鰓目キセルガイ科

エゾキセル

Pictophaedusa monelasmus (Pilsbry, 1900)

秋田県2016：絶滅危惧IA類
 秋田県2002：絶滅危惧種IA類
 環境省2014：絶滅危惧I類

- ◆国内外の分布 北海道南部、青森県（下北半島）、秋田県の一部。
- ◆県内の分布 大仙市太田町薬師岳滝倉。現在本県では、ここ1か所のみ。
- ◆本種の概要 本県の生息地以外に下北半島以南の分布は知られておらず、この生息地が南限である。ブナの古木などの樹表に付着しているコケ類の間などに生息している。大木に付着生息していることもある。
- ◆本種の現状 極めて特異な分布様式を示している種で、個体数も極めて少なく、本県では貴重種といったと思われる。
- ◆生存に対する脅威 森林伐採などによって生存場所を失うおそれが懸念される。
- ◆現在の保護対策 生息地は真木真昼県立自然公園に指定されている。

(川口洋治)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

異鰐目ナンバンマイマイ科

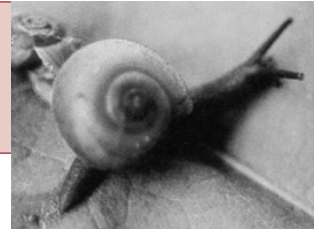
イワテビロウドマイマイ

Nipponochloritis oscitans iwatensis Sorita, 1986

秋田県2016：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2014：情報不足



◆国内外の分布 岩手県、宮城県、秋田県。

◆県内の分布 男鹿半島寒風山、和賀山塊朝日沢。

◆本種の概要 東北3県にのみ生息が確認されていて、本県では2か所のみで確認されている。山中の朽木に付着していたり、高湿度の落葉下などに多い。

◆本種の現状 現在のところ、県内では男鹿、和賀山塊での生息確認があるのみで、他に記録がなく個体数も大変少ない。

◆生存に対する脅威 個体数が少ない。観光開発（男鹿）。

◆現在の保護対策 寒風山は男鹿国定公園に指定されている。

(川口洋治)

異鰐目ベッコウマイマイ科

スカシベッコウ

Bekkochlamys serenus (Pilsbry & Hirase in Hirase, 1908)

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：準絶滅危惧



◆国内外の分布 青森県、秋田県、関東地方の一部。

◆県内の分布 十和田湖畔（和井内・水無沢）、八峰町水沢川上流。本県では、この2か所で確認されているのみで、他での生息は確認されていない。

◆本種の概要 本種はベッコウマイマイ属とタイワンベッコウ属の中間的な特徴の生殖器形態をしている。関東地方で数ヶ所生息が確認されているが、東北では青森・秋田の県境付近でのみ記録されている。サワグルミ林などにみられ、林間の落葉の下に棲む。終日、太陽光線のあたらないような所に生息しているので、周囲の森林の保護も重要である。

◆本種の現状 個体数が極めて少ないが、十和田湖畔は国立公園として保護されているので、当面は問題がないと思われる。

◆生存に対する脅威 森林開発（十和田湖畔）。

◆現在の保護対策 十和田湖畔の生息地は十和田八幡平国立公園に指定されている。

(川口洋治)

異鰐目コハクガイ科

ヒメコハクモドキ

Retinella radiatella (Reinhardt, 1877)

秋田県2016：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2014：該当無し

◆国内外の分布 北海道西南部以南、本州北部。

◆県内の分布 十和田湖畔和井内付近。

◆本種の概要 本県では、十和田湖畔の分布のみが記録されている。森林などの落葉下に生息している。コハクモドキが南部に移行した型で、コハクモドキと同一種と考えるべきだという意見もあるようである。個体数は少ない。

◆本種の現状 個体数が少ない。

◆生存に対する脅威 生息環境の悪化。

◆現在の保護対策 生息地は十和田八幡平国立公園に指定されている。

(川口洋治)

異鰓目オナジマイマイ科

ヒタチマイマイ

Euhadra brandtii (Kobelt,1875)

秋田県2016：絶滅危惧IB類
秋田県2002：絶滅危惧種IB類
環境省2014：該当なし



- ◆国内外の分布 関東地方中央部以北、東北地方（太平洋岸、青森県五戸まで）、秋田県の一部。
- ◆県内の分布 雄勝郡東成瀬村。現在県内では、東成瀬村内での3か所のみである。
- ◆本種の概要 関東地方や、東北地方太平洋側ではよくみられる種であるが、本県では東成瀬村が唯一の分布地である。ケヤキ・エノキの幹に登ることが多く、15mほどの高さにまで登ることもある。群棲するといわれているが、本県の場合は群棲しているとはいえないようである。雨後には地上を這っていることもある。
- ◆本種の現状 本県では岩手県に近い山地で生息が確認されており、生息地は狭く、個体数も少ない。
- ◆生存に対する脅威 森林開発事業や、大気汚染などによる環境変化の影響が大きい。
- ◆現在の保護対策 生息地付近は栗駒国定公園になっている。

(川口洋治)

新生腹足目イツマデガイ科

ニクイロシブキツボ

Fukuia kurodai Abbott & Hunter,1949

秋田県2016：絶滅危惧II類
秋田県2002：絶滅危惧種II類
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 青森県～京都府。
- ◆県内の分布 由利本荘市、上小阿仁村、八峰町八森、東成瀬村
- ◆本種の概要 分布が散在的で、飛び石状に数箇所生息が確認されている状態である。滝や溪流沿いの蘚苔類、下草の間または岩のくぼみなどに見られる。
- ◆本種の現状 京都以北～山形県までは生息が以前から知られていたが、本県では長い間発見されていなかった。しかし、1981年に由利本荘市鳥海町甕山麓で採集され、その後、県内数箇所生息が確認されている。
- ◆生存に対する脅威 河川の改修などによる環境や、水温の変化・山林の道路工事による流れの分断。
- ◆特記事項 山間地の溪流や、滝付近を精査すると、まだ生息地域の確認ができると思われる。

(川口洋治)

異鰓目ベッコウマイマイ科

スジキビ

Parakaliella ruida (Pilsbry,1901)

秋田県2016：絶滅危惧II類
秋田県2002：絶滅危惧種II類
環境省2014：準絶滅危惧

- ◆国内外の分布 東北地方以南、関東・中部・北陸・近畿地方。
- ◆県内の分布 高松岳、山伏岳、湯沢市高松下新田、雄勝峠。
- ◆本種の概要 樹木下の落葉の中に生息する。他の陸貝に比べて、やや乾燥したところに棲む。
- ◆本種の現状 殻高2mm、殻径3～4mm程度の微小貝であるせいか、見つける機会が少ない。個体数は少ない。
- ◆生存に対する脅威 森林の伐採、道路工事などによる環境の変化。
- ◆現在の保護対策 高松岳・山伏岳は栗駒国定公園に指定されている。

(川口洋治)

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

陸産貝類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

異鰐目ベッコウマイマイ科

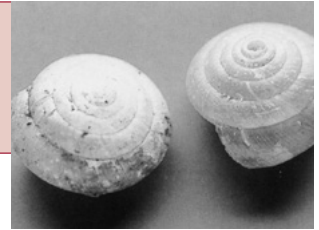
カワグチレンズガイ

Otesiopsis kawaguchii Habe, 1961

秋田県2016：絶滅危惧Ⅱ類

秋田県2002：絶滅危惧種Ⅱ類

環境省2014：準絶滅危惧



◆国内外の分布 秋田県・岩手県の山岳地帯。

◆県内の分布 秋田駒ヶ岳、高松岳、山伏岳、鳥海山、八幡平、和賀山塊、太良峡、森吉山、由利本荘市黒森山。

◆本種の概要 秋田駒ヶ岳で最初に発見された種で、県内の山岳地帯に散在的に分布しているが、稀である。山地の落葉下に生息する。

◆本種の現状 わりあい各地域で見つけられているが、個体数は少ない。

◆生存に対する脅威 開発事業などによる環境の悪化や、登山者の急増による環境の汚染。

(川口洋治)

異鰐目キセルガイ科

ミヨシギセル

Mundiphaedusa miyoshii Kuroda & Minato, 1979

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類



◆国内外の分布 岩手県、秋田県、山形県(湯殿山)の山岳地帯。

◆県内の分布 高松岳、秋田駒ヶ岳、真昼山、鳥海山、栗駒山、乳頭山、山伏岳、八塩山、和賀山塊。

◆本種の概要 秋田駒ヶ岳山麓の国見温泉が模式産地となっているが、最初の発見は本県の湯沢市高松岳である。分布は東北3県の山地帯に限られていて、標高の高い山地帯上部から高山帯にかけて生息する種である。標高1000m前後のブナ・ダケカンバの林内や、チシマザサの密生している地帯の倒木や落葉の下などに生息している。

◆本種の現状 上記のように高地帯に生息し、分布も限られている。個体数は少ない。

◆生存に対する脅威 生息環境の悪化。大気汚染。山岳地帯特有の種であるので、登山者の増加による環境の変化が心配される。

◆現在の保護対策 大部分の産地が、自然公園に指定されている。

(川口洋治)

異鰐目オナジマイマイ科

ササミケマイマイ

Aegista kunimiensis M. Azuma & Y. Azuma, 1982

秋田県2016：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2014：情報不足



◆国内外の分布 秋田県、岩手県の山岳地帯。

◆県内の分布 八幡平、和賀山塊、由利本荘市黒森山、由利本荘市東光山。

◆本種の概要 岩手県の国見温泉付近や、八幡平大沼付近などで比較的好くみられる。主にチシマザサの密生地の落葉や、ブナの落葉の堆積しているところなどにみられる。

◆本種の現状 森林伐採などにより、生息地が狭められてきているようである。

◆生存に対する脅威 森林伐採。

◆現在の保護対策 県内分布地の一部は十和田八幡平国立公園内にあるが、他は保護対策が必要。

(川口洋治)

異鰓目オナジマイマイ科

オオタキマイマイ

Euhadra grata grata (Gude,1900)

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：絶滅危惧Ⅱ類

- ◆国内外の分布 秋田県～福島県。
- ◆県内の分布 男鹿半島、湯沢市皆瀬、湯沢市秋ノ宮、八峰町、東成瀬村。
- ◆本種の概要 樹上性の陸貝である。
- ◆本種の現状 産地は極度に狭く限られており、個体数も少ない。年々、採集確認することが難しくなってきたように思われる。
- ◆生存に対する脅威 森林の開発。大気汚染などによる環境の悪化。

(川口洋治)

異鰓目オナジマイマイ科

ミチノクマイマイ

Euhadra grata gratoides Kira,1959

秋田県2016：準絶滅危惧
秋田県2002：準絶滅危惧種
環境省2014：準絶滅危惧



- ◆国内外の分布 青森県、秋田県の日本海側。
- ◆県内の分布 能代市から八峰町八森岩館にかけての日本海側に分布。
- ◆本種の概要 山本郡八峰町八森岩館がこの種の模式産地である。秋田県北部から青森県西南部にかけての海岸地帯に点々と分布している。樹上性の種である。岩館付近では人家の垣根などにも多くみられる。
- ◆本種の現状 この種の特徴である群棲を示しているが、生息地域が限られている。
- ◆生存に対する脅威 海岸地域の土地改修。
- ◆特記事項 日本海側に分布する種であるが、近年内陸部でも時々見られるようになった。

(川口洋治)

異鰓目キセルガイ科

ナミコギセル

Euphaedusa tau (Boettger,1877)

秋田県2016：情報不足
秋田県2002：情報不足種
環境省2014：該当なし



- ◆国内外の分布 関東地方以西、東海、中部、近畿、中国地方のほぼ全域、四国（鳴門市）、朝鮮（羅州）。
- ◆県内の分布 秋田市千秋公園とその付近一帯。現在県内では、ここ1か所のみ。
- ◆本種の概要 日本の代表的な種であって、関東より中国地方にかけて分布するといわれていたが、これから飛び離れて秋田県での生息が確認されたことから、その分布様式は極めて特異性をもっていると考えられる。平地から丘陵地、竹・雑木林等の根元や朽木などに生息しているといわれているが、秋田市千秋公園付近では、古木の切り株などに見られた。
- ◆本種の現状 今まで生息地が公園内のある一部に限られていたが最近の調査により、公園外の周辺でも確認されるようになった。
- ◆生存に対する脅威 環境の整備による樹木の伐採や、大気汚染による環境の悪化。
- ◆特記事項 移入された種である可能性も考えられる。

(川口洋治)

異鰓目オオコウラナメクジ科

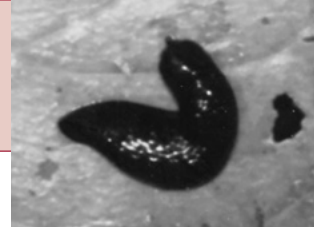
ヤマコウラナメクジ

Nipponolimax monticola Yamaguchi & Habe, 1955

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2014：準絶滅危惧



◆国内外の分布 四国・近畿地方以北。

◆県内の分布 和賀山塊（薬師岳）、小坂町、能代市茂谷山、東成瀬村。

◆本種の概要 本県では主に山地の落葉下や、朽ち木の間などにみられる。

◆本種の現状 ナメクジの仲間でもきわめて稀な種で、国内でも約10か所ほどで生息が確認されているのみである。

◆生存に対する脅威 樹木の伐採、草原の刈払いなど。ナメクジ類は乾燥に非常に弱いので、雑草、樹木の刈払いなどは致命的である。

(川口洋治)

異鰓目オナジマイマイ科

コシタカオオベソマイマイ

Aegista celsa (Pilsbry et Hirase, 1908)

秋田県2016：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2014：該当無し

◆国内外の分布 秋田県、山形県、新潟県。

◆県内の分布 秋田駒ヶ岳。

◆本種の概要 稀産の陸貝である。山地の落葉下などで稀に見られる。

◆本種の現状 県内では現在のところ1か所のみ確認である。調査が不十分なので、分布状況が正確に把握されていない感がある。今後の調査等により生息地が増えることが考えられる。

◆生存に対する脅威 極めて稀産の種で、乱獲は勿論、登山者の増加、森林開発など。

◆現在の保護対策 生息地は十和田八幡平国立公園に指定されている。

(川口洋治)

付属資料

異鰓目キセルガイモドキ科

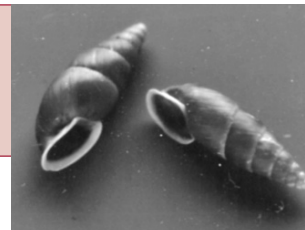
クイロキセルガイモドキ

Mirus andersonianus (Möllendorff, 1885)

秋田県2016：留意種

秋田県2002：留意種

環境省2014：準絶滅危惧



- ◆**国内外の分布** 北海道、青森、秋田、岩手の各県、山形県以西の本州（鳥取県まで）。
- ◆**県内の分布** 県内各地の山地等でみられ、その分布は割合多く、10数箇所を確認されている。
- ◆**本種の概要** 北海道知床半島から東北地方を経て山陰地方までの主として日本海側に分布し、特に東北地方には広く分布している。広葉樹の古木などにみられ、特にブナの古大木を含む森林内にすむ。主にブナの幹に付着している。
- ◆**本種の現状** 秋田県での分布は非常に多く、個体数も豊富である。

(川口洋治)

陸産貝類参考文献

- 東 正雄. 1995. 原色日本陸産貝類図鑑. 保育社.
- 肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域軟体動物総目録. エル貝類出版局.
- 環境庁. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物(無脊椎動物編).
- 川口洋治. 1974. ミヨシギセルの生息地点とその分布について. 秋田自然史研究 2:2-3. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1975. 秋田県におけるエムラマイマイの生息地点とその分布について. 秋田自然史研究 5:11-12. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1975. 秋田県におけるカワグチレンズガイの生息地点とその分布について. 秋田自然史研究 3:3-5. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1981. 秋田駒ヶ岳の陸産貝類相. 秋田自然史研究 14:4-5. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1982. シブキツボ属(*Fukuia*)について. 秋田自然史研究 15:1-3. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1982. 高松岳・山伏岳の陸産貝類相. 生物秋田 26:15-17. 秋田生物学会.
- 川口洋治. 1983. 雄勝峠の陸貝. 生物秋田 27:25-26. 秋田生物学会.
- 川口洋治. 1984. 栗駒山とその周辺の陸貝. 生物秋田 28:4-6. 秋田生物学会.
- 川口洋治. 1986. 陸貝分布論(陸産貝類からみた生物地理的考察). 生物秋田 20:7-8. 秋田生物学会.
- 川口洋治. 1987. 秋田県未記録の*Aegista*属について. 秋田自然史研究 27:30-31. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1989. 蝸牛山の陸貝. 生物秋田 31:6. 秋田生物学会.
- 川口洋治. 1991. 秋田県和賀山塊の陸貝. 秋田自然史研究 27:1-3. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1992. 秋田県和賀山塊の陸貝第2報. 秋田自然史研究 28:49-51. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治. 1994. 和賀山塊で確認された秋田県未記録の陸産貝類. 生物秋田 36:1-2. 秋田生物学会.
- 川口洋治. 1997. 秋田県陸産貝類誌.
- 川口洋治. 1999. 和賀山塊の陸棲貝類. 和賀山塊の自然(和賀山塊学術調査報告書):130-134. 和賀山塊自然学術調査会.
- 川口洋治. 1999. 和賀山塊陸産貝類採集目録. 和賀山塊の自然(和賀山塊学術調査報告書):288-295. 和賀山塊自然学術調査会.
- 湊 宏. 1988. 日本産陸産貝類総目録.
- 湊 宏・川口洋治. 1994. 秋田県奥羽山脈で採集されたエゾコギセル. ちりほたん 24(3・4):103-104. 日本貝類学会.
- 湊 宏. 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. 日本貝類学会.
- 西村 正. 1958. 県内より知られた新貝類について. 生物秋田 5:1-12. 秋田生物学会.
- 西村 正. 1959. 十和田の陸産貝類. 生物秋田 6:1-3. 秋田生物学会.
- 西村 正. 1965. 秋田県陸産貝類目録. 生物秋田 9:4-7. 秋田生物学会.
- 西村 正. 1981. 秋田県陸産貝類研究史. 生物秋田 24:9-11. 秋田生物学会.

参考資料

秋田県版レッドデータブック2002から削除した種

1 鳥類

和名	学名	秋田県 2002
ミツユビカモメ	<i>Rissa tridactyla</i> (Linnaeus, 1758)	VU
ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i> (Siebold, 1824)	VU
ユキホオジロ	<i>Plectrophenax nivalis</i> (Linnaeus, 1758)	VU
ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i> Linnaeus, 1758	NT
オオホシハジロ	<i>Aythya valisineria</i> (Wilson, 1814)	NT
ミミカイツブリ	<i>Podiceps auritus</i> (Linnaeus, 1758)	NT
ハジロカイツブリ	<i>Podiceps nigricollis</i> Brehm, 1831	NT
ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i> Pallas, 1811	NT
タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus, 1758)	NT
ワシカモメ	<i>Larus glaucescens</i> Naumann, 1840	NT
シロカモメ	<i>Larus hyperboreus</i> Gunnerus, 1767	NT
キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i> (Linnaeus, 1758)	NT
トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i> (Latham, 1790)	NT
ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i> (Pallas, 1773)	NT
イワヒバリ	<i>Prunella collaris</i> (Scopoli, 1769)	NT
カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i> (Temminck & Schlegel, 1845)	NT
ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i> Richmond, 1907	NT
ベニヒワ	<i>Carduelis flammea</i> (Linnaeus, 1758)	NT
アカエリカイツブリ	<i>Podiceps grisegena</i> (Boddaert, 1783)	DD
アビ	<i>Gavia stellata</i> (Pontoppidan, 1763)	DD
オオハム	<i>Gavia arctica</i> (Linnaeus, 1758)	DD
シロエリオオハム	<i>Gavia pacifica</i> (Lawrence, 1858)	DD
カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i> (Linnaeus, 1758)	DD
アマサギ	<i>Bubulcus ibis</i> (Linnaeus, 1758)	DD
ダイサギ	<i>Ardea alba</i> Linnaeus, 1758	DD
チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i> (Wagler, 1829)	DD
コサギ	<i>Egretta garzetta</i> (Linnaeus, 1766)	DD
オナガ	<i>Cyanopica cyanus</i> (Pallas, 1776)	DD

2 淡水魚類

和名	学名	秋田県 2002
シマヨシノポリ	<i>Rhinogobius</i> sp. CB	LP

秋田県の自然公園・自然環境保全地域一覧

1. 自然公園

すぐれた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図ることにより国民の保健、休養及び教化に資するため自然公園を指定している。県内で指定されている自然公園は表2のとおりである。公園区域内では一定の行為が規制され、特別地域内では指定された動植物の捕獲や採取などが禁止されるとともに、特別保護地区では動植物の捕獲や採取などが禁止される。

[表2] 秋田県内の自然公園指定状況

区分	公園名	指定年月日	関係市町村	面積 (ha)						
				特別保護地区	特別地域			普通地域	海域	合計
					第1種	第2種	第3種			
公園立	十和田八幡平	昭和11. 2. 1 (昭和31.7.10 八幡平地区追加)	鹿角市、小坂町、 仙北市	1,501	6,019	8,309	10,593	367		26,789
					計					
国定公園	鳥海	昭和38. 7.24	にかほ市、 由利本荘市		240	4,820	10,342		538	15,940
					計					
	栗駒	昭和43. 7.22	湯沢市、東成瀬村	3,158	3,062	2,607	14,380			23,207
					計					
	男鹿	昭和48. 5.15	男鹿市	160	1,237	2,606	4,080	73	3,378	11,534
計					7,923					
計		3箇所		3,318	4,539	10,033	28,802	73	3,916	50,681
					計					43,374
県立自然公園	田沢湖抱返り	昭和35. 4. 1	仙北市		83	4,275	1,828	1,291		7,477
					計					
	きみまち阪	昭和39. 7.16	能代市			239	304	56		599
					計					
	八森岩館	昭和39. 7.16	八峰町		101	86	748	68	1,176	2,179
					計					
	森吉山	昭和43.10. 1	北秋田市		412	2,804	11,370	628		15,214
					計					
	太平山	昭和47. 7.15	秋田市、五城目町、 上小阿仁村		614	3,328	7,955			11,897
					計					
田代岳	昭和50. 1.11	大館市		106	677	1,072			1,855	
				計						1,855
真木真昼	昭和50. 1.11	大仙市、美郷町		1,553	3,000	1,320	30		5,903	
				計						5,873
秋田白神	平成16. 8.24	八峰町、藤里町		331	684	3,091	2,169		6,275	
				計						4,106
計		8箇所			3,200	15,093	27,688	4,242	1,176	51,399
					計					45,981
合計				4,819	13,758	33,435	67,083	4,682	5,092	128,869
					計					114,276

(平成28年3月末現在)

2. 自然環境保全地域

すぐれた自然環境を保全することが特に必要な区域の生物多様性の確保、自然環境の保全を推進することにより国民が自然環境の恵沢を享受するための自然環境保全地域等を指定している。県内で指定されている自然環境保全地域等は表3のとおりである。自然環境保全地域等では一定の行為が規制され、野生動植物保護地区内では指定された動植物の捕獲や採取などが禁止される。

[表3] 秋田県内自然環境保全地域等指定状況

国指定自然環境保全地域						
地域名	関係市町村	総面積 (ha)	特別地区 (ha)	保護地区*1 (ha)	指定年月日	主な保全対象
白山山地	藤里町	4,336	2,466	2,466	平成4. 7.10	大規模ブナ林及びイヌワシ、クマゲラ等

県指定自然環境保全地域						
地域名	関係市町村	総面積 (ha)	特別地区 (ha)	保護地区*1 (ha)	指定年月日	主な保全対象
南由利原	由利本荘市	191.8	74.6		昭和49.11. 2	湿原植物群落、草原植物群落
湯の台・小方角沢	大仙市	53.4	12.7	12.7	昭和49.11. 2	湿原植物群落、ハツチョウトンボ多産地
冬師	にかほ市	32.4			昭和49.11. 2	湿地林、湿原植物群落
露熊山峡	北秋田市	71.1	22.2		昭和50. 2.22	岩壁植生
保呂羽山	横手市	10.5	10.5		昭和50. 2.22	ブナ、ミズナラを主体とする天然林
刈女木	羽後町	33.8			昭和51. 3.30	湿原植物群落
羽黒山	八峰町	5.1			昭和51. 3.30	暖地性植物
外山	横手市	17.2			昭和52. 8.11	ブナ-ユキツバキ群落
丁岳	由利本荘市	88.16	88.16		昭和53. 1.24	ブナを主体とする天然林、亜高山性植物
番鳥森	秋田市	126.83	126.83		昭和53. 1.24	ブナ及びミズナラを主体とする天然林
鞍山風穴	北秋田市	6.93	0.65	0.65	昭和56. 3.14	風穴植物群落
金峰山	横手市	21.93	3.97		昭和56. 3.14	ブナ-ユキツバキ群落
小又風穴	北秋田市	21.283	3.60	3.60	昭和57. 5. 1	風穴植物群落
親川	由利本荘市	16.67	12.91	12.91	昭和60.10. 8 拡張:平成15.11. 4	タブノキ群落、ヤブツバキ群落
出戸湿原	潟上市	2.74	2.74	2.74	平成15.11. 4	湿原植物群落
加田喜沼	由利本荘市	4.0811	4.0811	4.0811	平成16.12. 3	湿原植物群落
笹森山	由利本荘市	114.67	42.67	42.67	平成21.12.15	シナノキ群落内の貴重植物
計	17地域	818.5941	405.6111	79.3511		

*1: 野生動植物保護地区
特別地区の面積は総面積の、野生動植物保護地区の面積は特別地区のそれぞれ内数。

県指定緑地環境保全地域						
地域名	関係市町村	総面積 (ha)		指定年月日	主な保全対象	
長木溪谷	大館市	238.0		昭和49.11. 2	溪谷、スギ-ブナ群落	
今泉	北秋田市	37.5		昭和52. 8.11	池沼、広葉樹林、スギ林	
千屋並木	美郷町	7.1		昭和51. 3.30	アカマツ並木、スギ並木	
石沢峡	由利本荘市	152.2		昭和59. 5.26	溪谷、ケヤキ群落	
計	4地域	434.8				

(平成28年3月末現在)

執筆者、写真提供者

執筆者

一関晋太郎
小笠原 嵩
川口 洋治
木村 青史
草薙 利美
熊谷 雅之
今野 清文
佐々木 均
佐藤 磯男
佐藤 公生
杉山 秀樹
西出 隆
本郷 敏夫
水谷 寿

(五十音順、敬称略)

写真提供者

梅津 一史
遠藤 英之
小笠原 嵩
加賀谷幸男
加藤 正敏
川口 洋治
後藤 恭子
佐々木 均
佐藤 磯男
佐藤 公生
佐藤 成幸
杉山 秀樹
鈴木 三郎
竹内 昭史
田中 政行
千葉 和彦
土谷 諄一
西出 隆
三浦 翼

(五十音順、敬称略)

和名索引

和名	カテゴリー	ページ
[ア]		
アオアシシギ	NT	P40
アオシギ	DD	P53
アオハズク	NT	P43
アオハト	NT	P36
アカザ	CR	P87
アカショウビン	NT	P44
アカモズ	CR	P27
アリスイ	VU	P33

[イ]		
イカル	NT	P47
イカルチドリ	NT	P38
イスカ	VU	P35
イヌワシ	CR	P26
イワテビロウドマイマイ	CR	P118

[ウ]		
ウケクチウグイ	DD	P102
ウズラ	DD	P49
ウミウ	NT	P37

[エ]		
エゾウグイ	VU	P95
エゾコギセル	CR	P117

[オ]		
オオアカゲラ	DD	P54
オオコノハズク	NT	P42
オオジシギ	VU	P31
オオジュリン	NT	P49
オオセツカ	CR	P27
オオタカ	NT	P42
オオタキマイマイ	NT	P121
オオマシコ	DD	P55
オオヨシゴイ	CR	P25
オオワシ	VU	P32
オカヨシガモ	VU	P29
オジロワシ	VU	P32

[カ]		
カイツブリ	NT	P36
カジカ大卵型	NT	P98
カジカ中卵型	EN	P93
カマキリ	EN	P91
カリガネ	DD	P49
カワアイサ	DD	P50
カワグチレンズガイ	VU	P120
カワセミ	NT	P44
カワヤツメ	EN	P88
カンキョウカジカ	VU	P97
カムリカイツブリ	N	P56

[キ]		
キタノアカヒレタビラ	EN	P90
キバシリ	DD	P55
ギハチ	VU	P96

和名	カテゴリー	ページ
キョウジョシギ	NT	P41

[ク]		
クイナ	DD	P52
クニマス	EX	P81
クマガラ	CR	P26
クマタカ	EN	P29
クリイロキセルガイモドキ	N	P123
クルメサヨリ	DD	P104
クロガモ	NT	P36
クロサギ	CR	P25
クロツラヘラサギ	DD	P51
クロヨシノボリ	DD	P105

[ケ]		
ケアシノスリ	DD	P54
ケリ	NT	P38

[コ]		
コアジサシ	CR	P26
コクガン	EN	P28
コサメビタキ	NT	P47
コシアカツバメ	VU	P34
コシタカオオベソマイマイ	DD	P122
コジュリン	NT	P48
コチドリ	NT	P39
コチョウゲンボウ	DD	P55
コノハズク	NT	P43
コマドリ	NT	P46
コルリ	NT	P46

[サ]		
サクラマス(ヤマメ)	N	P107
ササゴイ	NT	P37
ササミケマイマイ	NT	P120
サシバ	NT	P42
サンカノゴイ	DD	P51
サンコウチョウ	NT	P45
サンショウクイ	VU	P34

[シ]		
シジュウカラガン	EN	P28
シナイモツゴ	CR	P83
シノリガモ	DD	P50
シマアジ	DD	P50
シマウキゴリ	DD	P104
ジュウサンウグイ	VU	P95
ジュズカケハゼ広域分布種	N	P108
シラウオ	N	P107
シロウオ	NT	P99
シロチドリ	NT	P39
シロマダラ	DD	P63

[ス]		
スカシベッコウ	EN	P118
スジキビ	VU	P119
スナヤツメ南方種	VU	P94

和名	カテゴリー	ページ
スナヤツメ北方種	VU	P94
スミウキゴリ	NT	P98

[セ]

セイタカシギ	DD	P52
セツカ	CR	P28
ゼニタナゴ	CR	P82

[タ]

タカチホヘビ	DD	P63
タシギ	NT	P40

[チ]

チクゼンハゼ	NT	P100
チゴハヤブサ	VU	P33
チゴモズ	CR	P27
チチブ	DD	P105
チュウヒ	EN	P29
チョウゲンボウ	NT	P45

[ツ]

ツミ	VU	P32
ツルシギ	VU	P31

[ト]

トジョウ	DD	P102
トミヨ属淡水型	VU	P96
トミヨ属雄物型	CR	P84
トモエガモ	VU	P30
トラフズク	NT	P43

[ナ]

ナマズ	DD	P103
ナミコギセル	DD	P121

[ニ]

ニクイロシブキツボ	VU	P119
ニッコウイワナ	DD	P103
ニホンアカガエル	NT	P71
ニホンウナギ	DD	P101
ニホンイトヨ	CR	P85

[ノ]

ノジコ	NT	P48
-----	----	-----

[ハ]

ハイイロチュウヒ	DD	P53
ハイタカ	VU	P33
ハギマシコ	NT	P47
ハクガン	CR	P25
ハコダテヤマキサゴ	CR	P117
ハチクマ	NT	P41
ハナカジカ	EN	P92
ハヤブサ	VU	P34

和名	カテゴリー	ページ
----	-------	-----

[ヒ]

ヒクイナ	VU	P31
ヒシクイ	NT	P35
ヒタチマイマイ	EN	P119
ヒメクイナ	DD	P52
ヒメコハクモドキ	EN	P118
ヒモハゼ	NT	P100
ピリンゴ	NT	P101
ピロードキンクロ	VU	P30

[フ]

フクロウ	DD	P54
ブッポウソウ	NT	P45

[ヘ]

ヘラシギ	DD	P53
------	----	-----

[ホ]

ホウロクシギ	NT	P40
ホオアカ	NT	P48
ホトケドジョウ	CR	P86

[マ]

マガン	NT	P35
マジシロ	NT	P46

[ミ]

ミサゴ	NT	P41
ミゾゴイ	DD	P51
ミチノクマイマイ	NT	P121
ミミスハゼ	NT	P99
ミヨシギセル	NT	P120

[メ]

メダカ北日本集団	VU	P97
----------	----	-----

[ヤ]

ヤマコウラナメクジ	DD	P122
ヤマシギ	NT	P39
ヤマセミ	NT	P44
ヤママメタニシ	CR	P117
ヤリタナゴ	EN	P89

[ヨ]

ヨシガモ	VU	P30
ヨシゴイ	NT	P37
ヨタカ	NT	P38

[ル]

ルリヨシノボリ	LP	P106
---------	----	------

秋田県の 絶滅のおそれのある 野生生物

—秋田県版レッドデータブック2016— 動物 I

【鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類】

2016(平成28)年3月 発行

【編集・発行】 秋田県生活環境部自然保護課
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号
TEL 018-860-1613
FAX 018-860-3835

【印刷】 秋田活版印刷株式会社

Threatened Wildlife of Akita Prefecture

秋田県の絶滅の
おそれのある
野生生物



秋田県版レッドデータブック2016 動物I
[鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類]

Red Data Book of
Akita Prefecture 2016
Animals I